

序

当埋蔵文化財センターは、秋田県の埋蔵文化財の公的調査機関として、主に開発事業等に伴う緊急発掘調査と報告書の刊行、調査結果を広く県民に公にするため、出土品の展示のほか発掘調査報告会や遺跡見学会等を実施しております。

発掘調査報告書のあり方、特に記載内容については論議のあるところではありますが、当センターでは、速報性を重んじ考察等の時間を極力省き事実報告に主眼をおいた速やかな刊行を目指しております。このため、報告書作成の際に生じた考古学的な新たな見解や仮説等については、個人的な研究という形で公表することを進めております。本紀要は、そのような見解や仮説の他、報告書に記載できなかった報告や職員の日常的な研究、資料紹介などをまとめたものであり、18号を数えるまでになりました。

本誌では、縄文時代の竪穴住居跡を論じた「秋田県における大形住居の集成」、「小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について(1)」と伊勢堂岱遺跡の出土遺物を掲載した「百聞不如一見」、墨書き土器について考察した「大曲市和合出土の墨書き土器」、文献資料として「秋田県考古学関係文献抄録(4)」を掲載しています。このほか、平成14年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会での戸村正己氏による講演録も掲載しました。

小誌ではありますが、ご一読の上、なお一層の御指導御鞭撻をいただけますよう切にお願いする次第です。

平成16年3月

秋田県埋蔵文化財センター

所長 大野憲司

秋田県埋蔵文化財センター
研究紀要 第18号

目 次

縄文土器づくり －生涯学習における土器製作体験の在り方－	戸村 正己	1
秋田県における大形住居の集成	海道 澄子	19
小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について(1)	河田 弘幸	34
百聞不如一見 －伊勢堂岱遺跡の遺物－	五十嵐一治	62
大曲市和合出土の墨書き土器 －使用痕跡にも着目して－	高橋 学	87
秋田県考古学関係文献抄録 (4) －城館・防衛性集落・城柵（秋田城跡・払田柵跡を除く）－	利部 修	93

縄文土器づくり －生涯学習における土器製作体験の在り方－

戸村 正己*

千葉県からやってまいりました戸村と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。私は、ただ今ご紹介いただきましたように、小学4年生の時に近くの川の堤防で偶然に土器のかけらを発見したことが、今日の活動の出発点となりました。小学4年生と言いますと、授業で歴史を学ぶ最初の頃ですが、その授業で先生から初めて縄文時代のことを聞かされ、胸をときめかせたのを今でもよく覚えています。「この時代に使われていた器は、粘土を焼いて作った素焼きのもので、縄目文様が付けられているので縄文土器と呼ばれています。」というお話を伺ったのです。他のクラスメートはその説明をどのように受け止めたのかは知り得ませんが、私にとっては先生の一言一言が単なる絵空事ではありませんでした。実際数千年前の土器のかけらを手にしていた実感から、授業そのものが非常に輝いた鮮烈な印象として心に深く残りました。土器を発見した場所の辺りは、今でこそ送電線の鉄塔が建ち、道路が舗装されて車が走り、上空には飛行機が飛んでいますが、そうした少しばかりの現代の造形物を取り除いてしまえば、太古と同じ丘があり、川が流れているという原風景があります。その場所から、当時の人の手によって作られた土器のかけらを発見したことは、古代人から直接にメッセージをいただいた思いがしました。手にした土器のかけらの色合いや縄目の文様、また引かれた線の風合いに言いしれぬ懐かしさや不思議な安らぎを覚えました。このような感動が原動力となって、今日の土器づくり活動につながっております。土器づくりの具体例は、この度、秋田県埋蔵文化財センター所蔵の土器をお借りして製作した経緯がありますので、後ほどお話したいと思います。その説明に入る前に、お配りした資料を参考に、話を進めていきたいと思います。

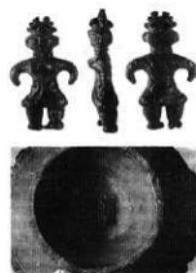
本日の私の演題であります「生涯学習における土器製作体験の在り方」ですが、まず冒頭に、そもそもものの生涯学習の背景について触れたいと思います。地球上に人類が登場したのが今から300万年～400万年前と考えられています。その遙かな大昔から現代までの大半はゆったりとした時間の流れがあったわけですが、今から200年ほど前に興ったいわゆる産業革命以降は正にスピード化の時代と言えます。今日の高められた文化状況を見れば、いろいろな分野でコンピューターが駆使され、短時間で移動が可能な交通手段があり、世界の情報を瞬時に入手できる情報機器があつたりと、あらゆる分野にわたり、人類が欲してきたことを正に実現させたとしても便利な時代に生きていることを実感させられます。欲しいものは何でも手に入ってしまうような感覚さえ覚えるほどです。しかしながら、このような便利さに安住する中で、人類が本来持っていた大事な感覚が失われてきているように思います。人類は他の動物と同様に、現実の世界に生きているわけですが、人間は、移動もせず、苦もなくボタン操作一つで物を得ることができたり、昔の人間が見たらまるで信じられないでしょうが、仮想の現実、つまりバーチャルな空間を作りだしてしまう時代もあります。こうなると、本来人間が持っていた感覚が鈍くなるのは当たり前です。実際の手応えがなくなっていていけば行くほど感じ取る力が

*フィールド考古『足あと』主宰

低下し、生きる力、すなわち生活力そのものを無くしていくのではないかと思います。こうした状況を危惧して、学校においては総合的学習としての学びの形が組まれ、一般社会においては、生涯学習という学びの形で実施されるようになって来たのだと思います。そもそも、人間は、この世に生まれてから死ぬまでの間、日々学習しているわけです。赤ん坊の段階では、例えば、甘いも辛いもしおいもよく解らないのですが、食べる体験を通して味覚が発達してその違いが解るようになります。体験することが希薄になってきている昨今にあって、そのように体験の選択肢の形としてこの生涯学習があるのではないかと思います。大きく見れば、生きていること自体、日々体験しながら学習しているわけであり、その生きていることに手応えを感じつつ、人生が輝いていくようになることが理想だと思います。

本日、この演題にあります“縄文土器づくり”を、この生涯学習という形にどのように反映させられるかということで話を進めていきたいと思います。縄文土器の作り方については、実際にどのように作られていたのかは定かではありません。土器づくりを間接的に伝えている例として、現在の陶芸の技術があります。そして、例えばニューギニアなどの先住民の人たちが行っている土器づくりの実態などもあります。しかし、これらの例は縄文土器づくりの技術を探るために参考にはなるけれども、間接的であることには変わらないので、基本的には直接の出土品に残された痕跡を基として、そこからどれだけ読み取るのかにかかっているのだと思います。出土してくる土器は、粘土という素材を使った彼らの直接のメッセージなのです。土器の素材である粘土についてですが、素材としておもしろい特性があります。それは、一つは粘着性であり、一つは可塑性です。粘着性というのは、ご存じのように粘土特有のネバネバの性質です。そして、可塑性というのは、物を形作ることができる性質です。粘着性と可塑性を併せ持った粘土は非常に優れた物質と言えるものです。つまり、押せば凹み、摘み上げたり積み上げれば飛び出します。作り手の意志をそのまま反映させることができる素材であるのです。その特性から言えば、出土土器の造形や文様は、それを製作した当時の工人たちの正に肉筆に等しいものです。そのような視点で土器を観察してみると、例えば、どの段階で文様を描いたのか、どの段階で器面の調整をしたのかなど作業の進行状況が見えてくるのです。その具体例については、後ほどお話したいと思います。

その前に、土器製作の変遷をかい摘んでみたいと思います。土器がどのようにして作られたかなどの土器製作の関心は、我が国で考古学がスタートした時点からあるわけですが、大まかな製作の概略が把握されるようになったのは、昭和3・4年頃です。それは、東北地方岩手県一戸市の梅垣さんという方で、その方が作られたものがこの資料の写真ですが（資料①）、この時代に素材の粘土から造形、そして縄目の文様まで、出土品と見まがうほどの出来栄えのものが作られていたのです。昭和3・4年と言いますと、考古学の世界では、山内清男先生が縄の原体、つまり撚紐を粘土に押し当て回転させると“縄目（縄文）”ができる事を確認した頃であります。実はこの頃、山内先生は東北大學におられまして、もしかしたら、こうした梅垣さんとの交流の中から縄文の回転施文方法を紐解かれたのかも知れません。その後かなりの間は大きな動き



資料① 梅垣鼎三氏作品
(昭和3～4年頃)

はなく、ほとんど机上論上の土器製作で推移したのです。そして、昭和43年頃になって、東京都秋川市の農家のご隠居さんで塩野半十郎さんという方が独自の土器づくりを行っておりました（資料②）。遺跡の周辺から粘土を探してきて、輪積み方法で土器を作り、屋外で焼くというこの姿勢は、今日で言う実験考古学のはしりであり、梅垣さんといい、塩野さんといい、このような活動を民間の方が早くにやられていたことは大変な驚きなわけです。このように、実際製作を行うことで土器の製作技術を探ろうとしたことの評価は、机上で論ずることとは比較にならない多くの意味があったのですが、それは、あくまで個人の体験における試行錯誤の範囲でした。しかしながら、こうした土器製作技術を科学的な裏付けのもと、体系化したのが昭和45年頃の事です。それは、千葉県千葉市にあります加曾利貝塚博物館において土器製作研究が本格的に実施されたわけですが、ここでの研究の成果は、『縄文土器の技術』としてまとめられ、現在全国で実施されている「土器づくり」の指南書になっているので、多分みなさんご存じだろうと思います。この研究に当たっていた方が群馬県出身の新井司郎先生です（資料③-1）。私は、この年、偶然に先生とお会いすることができ、直接手ほどきをいただくことができました。ところが翌年、先生は48歳の若さで急逝されました。その後、私は先生の意志を引き継ぐ形で、独自の活動を展開し今日に至っています。

ここで、新井司郎先生が研究された基礎的な部分についてお話をしたいと思います。資料にありますように、この研究が行われるまでも、自然から採取した粘土を使用し、露天で焼き上げることは解っていたのですが、粘土に一体どれほどの量の混入物を入れたらよいのかはっきりとしたことが解らなかったのです。つまり、粘土だけでは収縮率が高いためにひび割れしてしまうことから、それを緩和させるために砂などの混ぜものをするわけです。事実、縄文土器のいくつかの型式の中には、混ぜ物の種類として植物の繊維を混入させたものや、滑石、黒鉛、またキラキラと輝く雲母などが入れられたものがあります。このように、縄文時代においても粘土だけでは上手く焼けないことを知り、混ぜ物の工夫がいろいろとされていたことが解ります。この混ぜ物を混和材と呼びますが、混和材の適度な混入比率を調べるために使用したものが資料の方形や円形の版です（資料③-2・3）。混和材の混入割合を変えて練り込み、そして同一条件で焼き上げて収縮率を調べたものです。この試験版は、土器の平均的な厚さに準じて1cmとし、正方形のものは10cm×10cmの大きさにして焼成したものです。この実験の結果、混和材の混入割合は約3割程度が適当であることが解り、焼成した後、約15%～20%の収縮率が見られています。ただし、基となる粘土の性質もさまざまであるので、



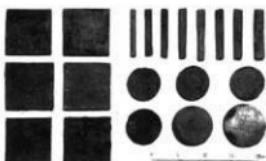
資料② 塩野半十郎氏の
「土器づくり」（昭和43年頃）



資料③-1 土器を焼く新井司郎氏
(昭和45年頃)



資料③-2 試験版による
焼成温度実験



資料③-3 収縮率実験用「試験版」

資料③-4 焼成温度実験に
使用した土器

500℃～600℃程度で焼かれていたんだろうと考えられていましたが、このような実験によって、露天で焼かれた温度が確認されたのです。それから、別の視点からのテーマがありますが、土器づくりは一年の中のどの季節が適しているのか？さらに焼成の季節はいつなのか？また、焼成時の手順や燃料の種類は？といった様々な面から土器づくりの実態に迫る研究が行われたのです。

現在、全国のあちこちで行われている土器づくりの技法は、この加曾利貝塚博物館における土器製作研究に基づいています。こうして土器製作のノウハウが知られるようになってからは、一挙に全国に広がりを見せることになりました。しかしながら、時の経過と共に本来目指した土器づくりとは異なった方向性の活動が目立つようになっている現状があります。一例を挙げれば、市販の粘土を購入して土器の形を作り、紡績糸やビニール紐で縄目を付け、表面の磨きにボールペンのキャップを使ったりといさか興ざめの感があります。形の上で縄文土器を真似て縄目を付け、露天で焼き上げることで縄文土器風の土器づくりが体験できたとしても、本当の意味での生涯学習の価値からは遠いものになってしまふかと思います。そのような状況下にあって、自分自身は、新井先生の基本の教え通りに今後もこだわりを持ってやっていきたいと思っています。私が土器づくりの活動を始めてからかれこれ30年余りになりますが、長く活動してきたことがあってか、また最近の総合的学習や生涯学習の活動が活発になるに従って、周辺の小・中学校から「縄文土器づくり講座」の講師を依頼される機会が多くなってきました。その中で、単に、「土器づくり」のみの内容で依頼がありたりしますが、その場合には丁重にお断りすることにしています。その理由は、縄文土器を作ろうとする場合、土器に関してある程度の知識がなければ、おおかたはそれが抱いている先入観による土器づくりになってしまい、単なる「粘土遊び」の延長になってしまうと考えるからです。私は、本義である縄文土器が作られた目的や文様の意味について、基本の知識を伝えた後に製作に入るべきであると考えます。私の講座のスタイルはというと、自作の土器や時代を説明する資料を持ち込む形の出前講座であります、何かと小道具が多いのが特徴です。その際に使っている資料を持ってきておりますので、ご覧

一律にこの割合が良いというものではありません。あくまで、平均値としての目安です。それから、上の段に長方形の版がありますが、この版には3本の白い筋が見られます。実はこの筋には、温度によって溶け出す度合いが異なる3種類の釉薬が埋め込まれています。この版を工業試験所の電気炉で500℃～1000℃までの間を50℃刻みで焼き上げて、焼成温度の物差しを作ったわけです。これに基づいて今度は、資料にある複製土器の口縁の内外、そして頸部と底部付近に同一の釉薬を埋め込んで、これを露天で焼き上げたものです。そして、電気炉であらかじめ焼いた試験版と比較対照しまして、露天で焼き上げた場合の土器の焼成温度をつかむことができたのです。その結果、露天で土器が焼かれた温度は、約800℃～950℃であろうということが解ったのです(資料③-4)。この実験が行われる以前は、弥生土器と比較して縄文土器は見た目でそれほど高い温度で焼かれず、せいぜい

下さい。初めに、縄文人のイメージはどんなものかと言いますと、残念ながら一般的にはあまり良いイメージは持たれていないようです。それを如実に示した絵がこれで（資料④）。埼玉県の中学生が描いた縄文人のイメージ画ですが、実際にみすばらしい姿で描かれています。これは、おそらく教科書や説明書などに掲載された縄文人の想像図から受けた影響が大きいと考えられます。これが現実だろうと思います。私は、こうしたイメージを持ったまま縄文土器を作るのはとても抵抗がありますので、まず、悪いイメージを払拭する必要があると考えております。この絵のようなみすばらしい人たちが作って使っていたであろう土器を、誰が好んで作るでしょうか。勉強だからと言って無理に作らせてても何の意味もないと思います。そのイメージチェンジのための道具として、このようなパネル式の資料を使って一通りの説明を行っています。

これは、私が初めて土器を発見した場所の遺跡から出土した「漆塗りの櫛」です（資料⑤）。秋田県においては、漆製品が出土している遺跡が結構ありますので、それほど珍しくはないと思いますが、千葉県で話をする場合には、縄文時代のマイナーなイメージを払拭する手段としてとても有効な事例となります。中学生が想像した縄文人は、見るからにみすばらしく日々食べ物に困っている様子に描かれているわけで、その先入観に敗れて踏み込み、「仮にその様な生活をしていた人達だったとしたら、わずかしか採取できず精製にもかなりの時間を要する漆製品をはたして作っただろうか？」と、疑問を投げかけるわけです。このことで、ほとんどの人がそれまで抱いていたイメージとは大きくかけ離れた出土品の存在にまず驚かされます。これが序幕であって、統いて畳みかけるように時代の長さについて話を進めます。この資料をご覧ください（資料⑥）。一目で理解できるように、1万年を1mの長さにして各時代ごとに色分けをしてあります。如何でしょうか。縄文時代のみで表の4分の3を占めているのがおわかりいただけるかと思います。我々が生きている現代が、いかに縄文時代という時代の上に乗っているかが視覚で確認できるわけです。このように縄文時代がとても長い時代であるにもかかわらず、学校での歴史の勉強では、せいぜい1時間程度の授業で終わってしまうために、感覚的に短い時代のように受け止められてしまっているのが現状です。こちらは、現代の千葉県のシルエットです。それから、こちらが今から約6,000年前の縄文時代前期の頃の千葉県の姿です（資料⑦）。大きな違いがはっきりしていますね。千葉県から茨城県、東京の周辺は地理的に低い地形であるため、温暖な気候にあった縄文時代の前期には、海水が上昇して内陸まで海



資料④ 縄文人のイメージ（イラスト）



資料⑤ 「漆塗り櫛」 千葉県高谷川遺跡出土



資料⑥ 縄文時代の長さ



資料⑦ 縄文海進（千葉県周辺）



資料⑧ 「丸舟」千葉県栗山川出土



資料⑨「離頭鉛」使用の実演

るのだと、内容が異なる道具の比較で縄文人の知恵を紹介します。このようなパフォーマンスを取り入れた説明で、全体の雰囲気が和んできます。今までの経験から、この段階で縄文人や縄文時代のマイナーなイメージはかなり崩れようです。

次に、陸上での活動についての説明に入るのですが、このような狩りの様子を描いたバナネルを用います（資料⑩）。狩りに使われた道具としては、図にありますように、代表的な弓矢の使用を説明し、合わせて獣犬の存在があったこ

が進入していました。そのため現代の姿とは違った骨々した千葉県の姿であった時がありました。つまり、かなりの範囲にわたって水域が広がった環境下にあったことをこの資料で伝えるわけです。そして、かつて海であった環境の残存として、現在茨城県の霞ヶ浦や千葉県の印旛沼、手賀沼があることを説明し、人間もそうであるように、自然も昔から連続として繋がっていることを伝えます。この辺りまで話を進めていくと、縄文時代そのものが遠い存在ではなくなり、受け入れ態勢ができるてくるように感じます。このような水域が広がっていた環境の中で、当時の人がどのような行動をしていたのかを次のこの資料は示しています（資料⑪）。この環境に適した移動手段として丸木舟の存在があります。私が住む千葉県九十九里浜周辺の低湿地からは、このような舟がこれまで100隻近く出土しています。食糧の獲得や他地域との交流手段として大いに活躍したであろうことを伝えます。そして、この水辺の生活に関連付けて、統いて漁労具である鉛の話に入っています。鉛の種類として、固定鉛と離頭鉛の2種類の鉛を復元したものを用意しておいて、まず最初に固定鉛を使ったパフォーマンスを行います。少し体格のいい子を選んで獲物の役になってもらい、鉛を突き刺す真似をして先端を握ってもらいます。そして、突き刺された痛さで暴れる演技をしてもらい、今度は鉛の柄を握っている私が引き吊り込まれる格好となりとても危険な状態になることを理解してもらいます（資料⑫）。また、固定鉛に変わって離頭鉛を取り出し、同様に突き刺す真似をして暴れる仕草ももらいます。ところが、離頭鉛の場合は鉛頭が柄の先端から外れ、獲物に突き刺さったまま体内で回転して紐で繋がっているという状態になります。そのため、獲物が暴れたとしても射込んだ私にはその振動が直接には伝わらず、危険を避けることができ



資料⑩ イノシシ猟(想像図)

イラスト 石津博典

とを伝えます。ちょうど、千葉県船橋市高木根戸遺跡（中期）から、1つの穴に3頭の犬が埋葬されていた例がありまして、その埋葬例から想定して、狩りに行き、3頭同時に事故に遭って亡くなったのだろうと推測を加えるわけです。このパネルはその3頭の犬の死を悲しみ埋葬する様子を描いたものですが（資料⑪）、愛犬の死を悲しんだであろう縄文人の心を知り、野蛮な縄文人のイメージはこの事例で見事に払拭されるのです。それから、彼ら縄文の人たちはどんな人間であったのか？現代の私たちとどのように繋がっているのかに迫ってみます。これは大きく分けて縄文人タイプと弥生人タイプですが（資料⑫）、かいづまんで言うと、顔ががっしりして目がぱっちりの縄文人タイプ。そして面長で目が細い弥生人タイプがあります。それぞれの特徴を図に表したのがこのパネルですが、自分がどのタイプに属するのかを知ることで、より縄文人との距離を縮めることができるのです。人間を登場させたことから、続いて生命に関連したことに話を進めていきます。土偶は、打ち割られた状態で出土していることから、一つの説として安産祈願の道具としての使用が考えられています。そのことから縄文人が命とどう向き合っていたのかについて伝えます。そして、パネルを使った締めくくりとして、土器の存在意義に関連付けた食糧の確保について話をするわけです。縄文人の食糧事情は自然から採取してきたものをそのまま食べていたのではなく、土器によって煮ることができるようになり、加工した食べ物を口にすることが可能となったのです。土器の存在によって自然から採取する食材の種類が格段に増えたことは生活の安定に大きな意義がありました。この絵は、長野県曾利遺跡（中期）で発見されたパン状炭化物の存在から想像されて描かれたものです（資料⑬）。この絵の内容は、現在の私たちの家族団らんの様子と重ね合わせられる要素があり、温かな雰囲気が伝わってくるものです。同時にその風景の中に加工した食品があることに着目してもらうことで、新鮮な驚きを与えることができるのです。加工食品は、土器の存在があってのこと、ここで土器がもたらした生活の安定について強調します。また、文様が意味することについては、衣・食・住の中から、最も大切と考えられる「食」との関連付けて、特に縄文中期の口の部分に顔が取り付けられている土器を例に挙げ、私の解釈として、土器の中に入れられた大切な食べ物を守る「カミ」の姿を表現しているのではないかと言うことを説明していくわけです（資料⑭）。一方、顔が付けられていない一般的な土器の文様についても、食べ物に対する祈りの意味ありとして考えられることなどを説明することによって、土器を作り、文様を付けた意味を多少なりに理解してもらえると思うのです。



資料⑪ 狩猟犬の埋葬
イラスト 中西立太



資料⑫ 縄文人の紹介
イラスト 所ゆきよし



資料⑯ 加工食品の調理
イラスト 石津博典



資料⑩ 顔面把手付土器
長野県櫛垣外遺跡出土

ところで、私の体験から土器の文様付けについて言えば、縄文土器の場合、器の形が出来上がってそれで仕上がりではなく、統いて文様付け作業が始まるのです。中には、器の形を作るよりもむしろ文様付けに時間がかかるものもあり、その様な土器の文様を付けるときは、たまに辛い気持になることがあります。合理的な考えが主流の現代の感覚から見れば、文様があろうが無かろうが、物を入れる機能は変わらないのに、無駄と思われる文様をなぜ縄文土器は付ける必要があったのだろうか、とても不思議です。縄文土器以降、現代に連なる器は、ことごとく機能一辺倒になり文様は申し訳程度になってしまったのに、縄文土器のみ特異な存在です。その無駄と思われる文様が付けられていることこそ、縄文土器の縄文土器たる所以であると考えます。

こうして、時代背景や土器の意義付けについて色々話すことによって、土器を作るに当たっての心構えができ、各々が目指す土器の構想が膨らんでいくのではないかと思うのです。そして、最後に土器づくりに対する気持をさらに高揚させる資料として、このような縄文時代の少年のキャラクターを提示します（資料⑪）。これは、私のオリジナルの絵であります、吹き出しに「どうだい、おいらも作ったぞ、君にもできるぞ。」と書き込んであります。この絵は特に小学生などに土器づくりを教えるときに役立つこと請け合いで。この少年が、「一緒にやろうよ。」と呼びかけている様子に、土器づくりの雰囲気が自然に高まってくるようです。小・中学校で授業を行った後などは、時として感謝の作文をいただくことがあります。「最初、あまり作りたいと思っていなかつたけど、作って本当に良かった。」とか、「縄文入ってすごく知恵があって、優しい人たちだと言うことがわかった。」などと感想が書かれていますと、土器づくりを通して少しでも「縄文の心」を伝えられた手応えを感じます。



資料⑪ 土器づくり喚起のパネル
イラスト 戸村正己

統いて、この度の講演に際し、秋田県内出土の土器をお借りして、土器製作を行ったのですが、製作を通じて解ったことについてスライドを見ていただきながら、お話をていきたいと思います。

スライド①最初のスライドは、土器の材料となる粘土の写真です。これは、県北の鹿角市大湯で採取した粘土です。地元の要請を受けて昨年の暮れようやく見つけることができた粘土で、赤色のものと黒色のものの2種類の粘土が手に入りました。ちょうど今回の講演が2月でしたので、秋田県出土の土器製作は、秋田県の粘土を使うのがベストだと考えて、この粘土を使うことにしました。ただ、発見してすぐに使用するにはあまりにもリスクが大きいと考えて、普段使用している千葉県の粘土を併せて使うことにしました。

スライド②このスライドは、最初に製作した縄文晩期大洞C式の「変形壺形土器」の出土品です。先ずスライドを通して出土品を観察してみることにします。この土器は、口縁の一部と胴部の一部分

を少し欠損する程度で、口縁部から底部まで一通り残っている土器です。大きさは手で握って少し余るほどのもので、ちょうど現代のマグカップを思わせるサイズの土器です。形は、口が開き気味で、頸の部分がややすばまり、底部近くが少し張り出して底が丸くなる特異な形態の土器です。厚さは約4mmと比較的薄い作りになっていて、持つてみると意外な軽さに驚いてしまいます。この土器の主だった特徴としては、ご覧のとおり、口縁の一部のみに豆粒状の2個1対の突起が3単位付けられていて、その下方底部に1カ所だけ1点の豆粒状の突起が付けられているものです。このことから考えて、正面という意識がされていることが解ります（資料⑩）。文様は大きく見て4つの構成になっていると思います。一つは、口縁直下の細かな刻みが付けられた横線の束、二つ、三つ目は、中心の文様である上下2段の雲形文様、四つ目は、底部近くの楕円を半割したような横並びの文様が見られます。次にこの土器をモデルとして製作した記録を見ていただきたいと思います。

スライド③このスライドは、作り始めの段階のものですが、この土器が壺の変化したものとされるように、底が丸くなっている丸底の状態で作り始めたものです。

スライド④そして、次の粘土の積み上げは多少内側に傾きさせた積み上げを行いました。このスライドはだいたい3段目の粘土を積み上げた状態のものです。

スライド⑤これは、全体の形が出来上がり、竹ヘラによって雲形文様の下書きをした状態です。雲形文様を書いていく手順ですが、私の場合は、文様の中心にある楕円を先ず設定し、その楕円を包み込むように上下に曲線を延ばします。そして、楕円と楕円の間の間にX字状の文様構成を設定するわけです（資料⑪）。出土品の観察から、縄目は基本的に下書きした線に沿って付けられたようであり、その様な方法で縄目を施してみました。

スライド⑥このスライドは、縄の原体が線描き文様の上に置かれている写真であります。これは、縄を転がす方向のスタート位置を示しているものです。

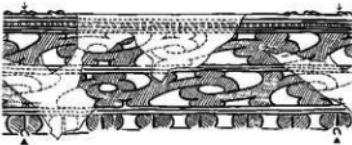
スライド⑦これは、縄を転がした後に線描き文様が押し潰された状態を表しています。

スライド⑧次は、文様の仕上げに向かって作業で、潰れた線に再度竹ヘラを当てて、縄文帯を削り取らないような斜角度で搔き取っている写真です。こうすることで、縄目が付けられた部分と、そうでない部分が明確になり、雲形文様がはっきりしてくる効果があります。

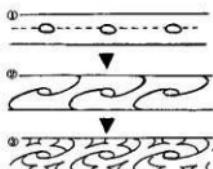
スライド⑨このスライドは、一通りの作業が終了して、完成直後に出土品と一緒に並べて撮影したものです。出土品と比べて製作したものの方が幾分大きめだと思いますが、この大きさから乾燥・焼き上げではほとんど出土品と同じサイズになります。

スライド⑩予め粘土の収縮率を計算して製作したものであり、当時に作られた大きさはほぼこの大きさだったことが解るわけです。

スライド⑪次に製作した土器は、晩期の大洞C式の浅鉢形の土器です。高さが6.5cmで口縁の径が



資料⑩ 雲形文展開図(スケッチ)



資料⑪ 雲形文施文手順(筆者)



資料⑬ 丸底文様の展開図（スケッチ）

17.5cm厚さが約3mmで全体の形は底の丸い椀の形をしています。厚さが3mmとかなり薄手で実際に手にすると本当に軽いです。文様は丸底を中心として円形に広がる雲形文様で、見た目にも複雑な文様であることが感じられます（資料⑭）。文様を描く技法として、先程の変形壺形土器の施文と共通の技法が駆使されているようです。この土器の文様の拡大部分をスライドで見ていただくと解ると思います。

がっています。この文様を描くに当たって、どこを基準としてどこを起点に描き始めたものなのか、かなり困難な土器でした。それでは実際にこの土器の製作を行った内容についてお話をします。

スライド⑮これは全体の形が出来上がろうとしている状態の写真です。この状態にするまでが大変でした。勿論最初から丸底の状態から立ち上げていったわけですが、厚さが約3mmですから、一気に粘土を積むことはとても困難な状況でしたので、粘土を乾燥させながら何段階かに分けて積んでいく方法で行いました。この方法に対してある方は、最初は少し厚めに作っておいて後で削って薄くすればよいのではないかと言われましたが、その方法は簡単なようで、実はとても難しいことが体験を通して解っています。実際にその方法で行ってみると、乾燥するにつれて削る力が外側に働き、押し出してしまう危険が出てきます。私は、体験から、その方法ではなく最初から薄く製作したと考えています。

スライド⑯そして、形ができてこの後、文様を描く段取りとなります。この段階において粘土は結構乾燥が進んでいる状態です。この状態は、形を整えたり文様を書き込む作業を行うには条件が高いのですが、その後に控えている縄目を付ける作業や描いた線を強調する作業には、乾燥が進んだ分困難になります。薄手土器を製作する際の裏腹の事情を実感することになりました。しかしながら、この状態を緩和させる方法を考えました。それは、湿った布を被せて湿りを少し取り戻すことにより、作業がスムーズに行える方法です。

スライド⑰⑯は困難さを克服して完成したものです。

統いて、晩期の大洞BC式の注口土器を作成した内容のお話をしたいと思います。

スライド⑰先ず、出土品について見ていただきます。高さが約10cm、口径が約13cm、厚さが約4.5mmです。全体の形を見るといわゆるソロバン玉のような形をしており、底が丸底になっています。屈折部分にこのような注ぎ口が付けられています。文様は、屈折部分の上半分に細かな羊齒状文と呼ばれる文様が隙間無く付けられておりスライド⑯、屈折部分には粘土の貼り付けによる彫刻的な文様スライド⑰が、さらに、底部に及んで文様がありますスライド⑱。この土器の製作は、次のようにして行いました。

スライド⑲基本的に丸底ですので、丸底の状態から作り始めまして、屈折部に至るまで一気に積み上げを行いました。このスライドがその状態です。この注口土器は、先程の薄手の浅鉢土器と違い、ある程度の厚さがあるために一気に積み上げることが可能でした。

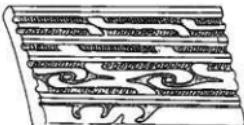
スライド⑳そして、一休みして粘土の乾燥状態を確認した上で、上半分の積み上げを行った状態の

写真がこのスライドです。後で出土品の内側を注意して見ていただきたいと思いますが、この屈折部上に粘土の積み上げが行われた際、外側は接合の隙間を塞いでいるのに対して、内側は隙間を残したままなのです。土器を製作する場合、粘土の積み上げを行った後、接合部分は特に意識して密着させるのが鉄則なのですが、この土器は最も弱い屈折部に隙間を残しています。この状態にはとても驚かされました。このことは、当時の工人の高度な技ゆえか、それとも手抜きゆえか解りませんが、いずれにしてもこの状態で器を完成させているのですから脱帽でしたスライド⑩。

スライド⑩同様にして積み上げを行い、ほぼ全体の形が出来上がった後に、注ぎ口を取り付け、統いて屈折部の彫刻的な粘土の貼り付けを行った状態のものです。このことから、全体の作業の流れが見えてくると思いますが、先ず、屈折部の彫刻的な粘土の貼り付け、上半分の細かな文様の作業を経て、最後に底部の文様を仕上げたのではないかと考えました。

スライド⑪これは、細かな文様の書き込みを開始した時の写真です。文様を構成する下地づくりとして、約5mm間隔で21本の平行する線を引きました。書き込みの基準としたのは、この平らな口縁です。実際に21本の等間隔の沈線を引くこと自体大変であったわけですが、この後の作業はもっと大変なものでした。その状況がこちらのスライドです。

スライド⑫このように予め引いた線を選択して、沈んだ線つまり沈線と、浮いた線つまり浮線とに分けていきます。配付の資料にその浮いている部分と沈んでいる部分のアップダウンが解るように断面の模式図がありますので参考にしていただきたいと思います（資料⑬）。



資料⑪ 注口土器の
文様・断面模式図（スケッチ）

スライド⑭この沈線の何本かの中に細かな刻みが入れられていますが、この刻みをよく観察してみると、一方から付けられているだけではないことが解ります。この部分ではこちらの方向ですが、ここから逆の刻みに変わっています。この部分は浮線と沈線6本を使って、新たに粘土を埋め込むなどしてX字状の羊歯状文を作り出しています。このように、沈線の中に方向の異なる刻みを入れたり浮線に粘土を足して変形させたりと、規則性を見いだして文様付けを行ったのがこの写真ですスライド⑩、⑪、⑫、⑬。文様全体を整えるまでには本当に大変な作業をクリヤーしなければ成し得ないことを、身をもって体験することになった土器でした。

スライド⑮こちらは、晩期の台付土器です。台の下部が少し欠損していますが、ほぼ全体の形がわかるものです。現在の高さは、11cm、口径が17.5cm、厚さは約4mmです。文様は、このスライドでおわかりのように口縁の一部に手のひらのような突起が4つ付けられておりまして、皿部分には、入り組みのブロック状文様が2段設定されています。台の部分は、透かし彫りの入り組み文様が付けられております。

スライド⑯これは、製作開始段階で、台の裾から立ち上げて約4段目ほどの状態です。

スライド⑰次は、台部が完成した状態の写真です。ここで台部の上部分が粘土で塞がれているわけですが、この塞ぐ工程が同時に皿の底部分になるわけです。これで台が完成して、さあ、次に皿部分の製作に取りかかって一気呵成にというところだったのですが、ところがそうは問屋が下ろしてくれませんでした。といいますのは、この台の上に粘土を積み上げていくことは、つまりこの上に乗る粘

土の重さプラス作業するときの力が全て台の裾部分にかかることになり、裾部分に縦に亀裂が入ってくることが確認されましたスライド⑩。この状態を克服するには、これまでお話してきた土器と同様にある程度の粘土の乾燥を計算に入れてからなければならないことが解りました。適度な乾燥を得た後、皿部分を積み上げ全体の形が出来上がり、統いて文様付けに入りました。

スライド⑪文様付けは、皿部の入り組みブロック状文の文様の下地づくりとして、予め線描きでこのような方形の区割りをしておきます。そして、この方形を巴形やクランク状にさらに分割していくと、文様全体のバランスが見えてきます。

スライド⑫このスライドは、分割が終了した直後の状態です。ここを見ていただくとおわかりと思いますが、この段階では文様がシャープです。出土品を見ると、このシャープさが無く、角が取れて丸みがあり、ソフトな文様に仕上がっているのがおわかりいただけると思います。

この様な状態にするには、粘土の乾燥に応じて区割りした文様の線をなぞりながら、ヘラを多少傾けて角を落とす意識で作業を繰り返さなければなりません。ただ、数回のなぞり作業では、決して出土品のようなソフトな文様にはならないことが解りましたスライド⑬。

台部の文様は、入り組み文様を予めデッサンしておいてから、残す部分と透かしでカットする部分とに分けて、全体の文様が構成できるようにしましたスライド⑭。

スライド⑮とにかく、このように出土品と同様なものを製作復元してみると、形を作るだけでも容易ではないのに、文様付けに注がれた労力と時間は並々ならぬものがあることを強く感じずにいられませんでした。

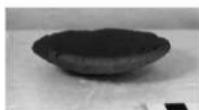
以上、実際の出土品をモデルに土器製作を実施した内容についてお話をしました。しかし、これらの土器を製作して思うことは、見る人によって当然受け止め方は違うものの、ただ眺めるだけであれば、「薄手の作りで複雑な文様がある土器」という程度の表面的な見方しかできないと思いますが、一步踏み込んで観察をし、更に実際に土器をつくるなどの疑似体験を行うことにより、内面にある技術や精神までも受け止められるようになると思います。それが、生身の人間が実体験によって得ることができる確かな感触だと思います。よく、「百聞は一見に如かず」と言いますが、私は、土器製作体験を通して「百見も一体験に如かず」なのだと強く実感しております。今後、みなさんが生涯学習の形で土器づくりに取り組まれる機会があれば、土器の形を作るということだけではなく、関連したこととしていろいろな角度からのアプローチが可能であると思います。参考に申し上げさせていただければ、土器づくりの基本材料である粘土について調べられるのもよいかと思います。粘土と一口に言つても、奥の深いものであり、一般的に見て、時期や型式、地域の差によって荒々しいものから、きめ細かいものなど様々な粘土の使用が見られています。また、土器の形や文様についても製作面から見て、どのような道具を使って表現されたものなのか考えてみるのもよいかと思います。また、形や大きさはどのような必然性のもと生み出されたのかなど、テーマは無数にあります。いずれにしても、手応えのある内容は本人の心の方向次第です。有意義な学習が展開されることを祈っております。その際、私の今回の拙い話が何らかの形でお役に立つことがあるならば、幸いに思います。お粗末な話を最後までお聞きいただき本当にありがとうございました。これで私の話を終わりにしたいと思います。



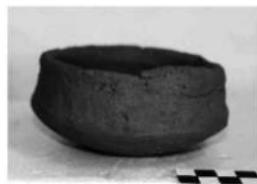
スライド① 粘土（鹿角市大湯採取）



スライド② 大洞C1式「変形壺形土器」出土土器



スライド③ 作り始め段階（丸底）



スライド④ 粘土の積み上げ（3段目）



スライド⑤ 雲形文様の下書き



スライド⑥ 縄文施文の方向



スライド⑦ 縄文施文後の沈線の潰れ

スライド①～⑦



スライド⑧ ヘラによる沈線の強調



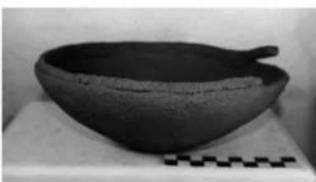
スライド⑨ 施文完了後の複製土器(左)と出土土器(右)



スライド⑩ 焼成後の複製土器(左)と出土土器(右)



スライド⑪ 大洞C₁式「浅鉢形土器」(出土土器)



スライド⑫ 器形完成間近の積み上げ



スライド⑬ 雲形文様の沈線の強調(出土土器)

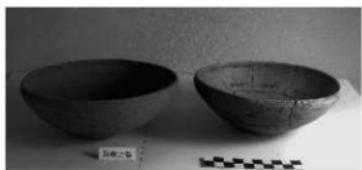


スライド⑭ 繩文施文前の雲形文様の線書き

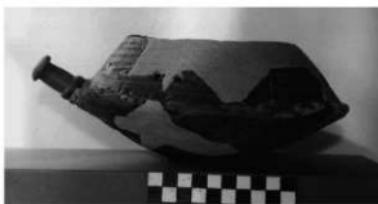


スライド⑮ 複製土器の完成(焼成前)

スライド⑧～⑯



スライド⑦ 焼成前の複製土器(左)と出土土器(右)



スライド⑧ 大洞B C式「注口土器」(出土土器)



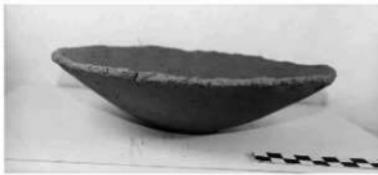
スライド⑨ 屈折部上部の羊歯状文 (出土土器)



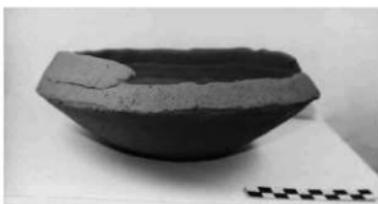
スライド⑩ 屈折部の貼付文様 (出土土器)



スライド⑪ 注口部付近の底部文様 (出土土器)



スライド⑫ 注口土器の製作開始段階(丸底)



スライド⑬ 屈折上部の積み上げ

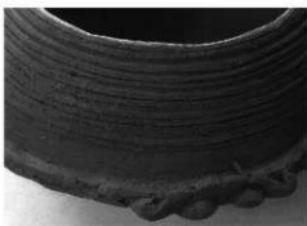


スライド⑭ 屈折部の積み上げ (内側に隙間を残す)

スライド⑮～⑯



スライド⑧ 施文の手順を読む



スライド⑨ 施文（細かな平行沈線の下書き）



スライド⑩ 浮線・沈線の選択と器面調整



スライド⑪ 羊歯状文の文様構成（出土土器）



スライド⑫ 施文（沈線内の点刻と貼付）

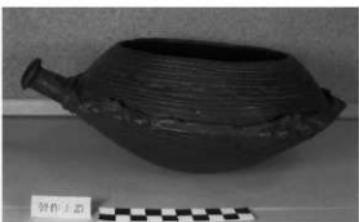


スライド⑬ 底面文様の下書き

スライド⑭～⑯



スライド⑩ 複製土器の完成（焼成前）



スライド⑪ 焼成完了後の複製土器（側面）



スライド⑫ 大洞B C式「台付土器」（出土土器）



スライド⑬ 粘土の積み上げ
(4段目)



スライド⑭ 台部形成完成



スライド⑮ 台裾部の亀裂



スライド⑯ 施文（線描き初期段階）

スライド⑩～⑯



スライド⑩ 施文初期（シャープな状態）



スライド⑪ 文様調整（シャープさからソフトさへ）



スライド⑫ 台部の施文(透かし彫り)



スライド⑬ 複製土器の完成（焼成前）

スライド⑩～⑬

秋田県における大形住居の集成

海道 澄子*

はじめに

「大形住居」か「大型住居」のどちらを使うかは研究者によるが、本稿では「大形」を用いることとする。その理由は、小川望氏が指摘するように、「『大形』は、何らかの造構、遺物を考えるとき、その中で比較的規模の大きいものを示し、『大型』は、大きいという属性がその造構、遺物を他の類似の造構、遺物から区別していることを示す。つまり、『大形』は一連の造構、遺物における内的な差を示すのに対して、『大型』はそれ自体が一つの独立した文化現象を区別する属性を示す」と考えられるため、当面は質的な差が明瞭とされない限り、「大型」は用いにくく、「大形」を使用するのが妥当といえる。

大形住居の研究は、1973年の富山県不動堂遺跡2号住居址の発見がその端緒となつた。^(註1) 不動堂遺跡2号住居址は、平面形は長軸17mの楕円形を呈し、柱穴により区画された各間ごとに炉が設置されるという特徴を持ち、当時、破格の大きさをもった住居として注目された。

不動堂遺跡2号住居址の発見以後、東北・北陸地方を中心として、新潟県沖ノ原遺跡、秋田県杉沢台遺跡などで大形住居が発見され、大形住居の認定には、住居の大きさもさることながら、平面形や炉の形態も重要な要素となった。

本稿では、秋田県における縄文時代の大形住居についてその集成を試みた。何をもって大形住居とするかは現状で定まった基準はない。今までの研究者の大形住居に関する形態分類を見ていくと、中村良幸氏は、竪穴式のものと「長方形柱穴列」・「方形配列土壙群」・「ウッドサークル」と呼ばれる平地式か高床式のものの2系統に分けた。更に竪穴式のものを時代と地域によって「長方形大形住居址」と「円形大形住居址」に分類した。^(註2) また、武藤康弘氏は、「1類を長方形大型住居に、2類は円形の大型住居、3類は長方形基調の地上建物、4類は円形の地上建て建物に分類し、地上建ての建物（一般に掘立建物）も大型住居」として扱った。^(註3) 石井寛氏もまた円形プランの大形住居と建物を含めて議論していることから、相対的に大きいものを作業上、大形住居とし、その分類と性格を検討することが主流となっている。

本稿では以上をふまえながらも、竪穴住居の長軸約10m以上のもので、その平面形を楕円形あるいは長方形のものを大形住居と認定し、炉の形態、内部構造についてみていく。

1 大形住居に関する研究略史

大形住居は、大きさゆえに、通常の居住以外の機能があるのではないかと考えられ、多くの研究者たちにより機能に関する問題が議論されてきた。不動堂遺跡の報告書では、「例えば集会所のようなものとも考えられる」とし、公的施設の可能性が指摘された。^(註4)

渡辺誠氏は大形住居の分布が積雪地帯中心であることに注目し、構造的に屋根裏部屋の貯蔵庫を想定していることから、雪国の共同作業場説を主張した。この堅果類のアカ抜き作業に伴う共同作業場

*秋田県埋蔵文化財センター調査・研究員

説は、新潟県の沖ノ原遺跡などでクルミ破片や、クッキー状炭化物が出土したことから広い支持を集めた。

さらに、中村良幸氏はこの論を積極的に支持した。大形住居は、①東北地方北部で前期前半に出現して北陸地方への南下が見られる、②炉址のあり方が独特、③土器・石器の量が多い、④大きな集落では数棟存在する、⑤フラスコ状ピットが周囲に集まるなどの特徴をあげ、加工作業に適した住居が、積雪地方に分布していることをその理由とした。

1987年に調査が行われた上ノ山II遺跡では、集落内で多数の大形住居が検出された。そこで、注目されるようになったのが、武藤康弘氏の共同居住家屋説といえる。武藤氏は、「隔壁構造の存在から核家族かそれに近い規模の単位集団が共住する複合居住家屋ととらえることも可能である」とした。雪国の作業場説の根拠であった同じ多雪地方に大形住居が分布することは「冬季間における共同家屋として機能した」ことによる可能性を推測した。また、「長軸方向に拡張可能な柔軟な上屋構造、住居長軸線上に配列された複数の炉の存在、内部空間を区切る隔壁構造」などの特徴は、複合居住家屋としての性格のためではないかとした。住居内間仕切りの認定を一つの根拠として複合居住家屋の存在を主張した。

菅谷通保氏は、炉と主柱穴に囲まれた空間=中核的な居住空間=<炉空間>とし、①<単純単位形態>個別施設、炉空間とともに1単位。住居及び同一技術的背景を持つ構築物の基本的な形態、②<複合単位形態>炉空間を複数の単位に認めるもの、③<非単位形態>複数炉が計画的に配置されながら、炉空間を形成せず炉が屋内の生活の中心にならないといった3つに住居を分類し、住居の規模の大小にかかわらず、<単純単位形態>は最小単位の1集団を収容する施設であり、複数の炉空間を持つ<複合単位形態>は、複数の集団を最小単位として独立性を保ったまま、同時に収容する施設であるとした。そして、<非単位形態>が炉空間を形成しないのは、一つの単位として認める形で人間を収容したものではない、つまり共用的施設であると機能を推定した。

さて、大形住居の機能に関しての見解はとまるところ、石井寛氏がいうように、「渡辺に代表される公共的施設と武藤の主張する複合家屋説に集約される」。大形住居と呼ばれる施設が、住居以外の機能を有していたかどうかという問題に帰結するのではないだろうか。

さて、秋田県内の大形住居の発見は、1972年の萱刈沢貝塚（山本郡八竜町）第2号住居址の発見が最初となる。続いて、柳沢遺跡（秋田市）第6号住居跡や不動羅遺跡（北秋田郡上小阿仁村）1号住居址など大形住居が相次いで発見された。この3遺跡の大形住居は1974年、富樫泰時氏によって、紹介されている。

1987年の秋田県上ノ山II遺跡で、多数の大形住居が検出された。今まででは、集落内で数棟しか存在してこなかった大形住居が「その『大型』の目安となる長軸が10mを超えるものが29軒あり、ほぼ半數に近く発見された。この新たな遺跡の発見によって、大形住居はその性格を一旦考え直す必要性に迫られた。また最近、大規模な集落内での大形住居の検出が多く、秋田県内に限らず、大集落の大形住居について考え直す必要があるといえる。

2 秋田県内の大形住居

秋田県内の大形住居について集成した（第1～7図・第1～3表）。その結果、20遺跡74軒を確認

することができた。これらを概観すると、以下のことが指摘できよう。

大形住居の規模は、縄文時代前期中葉から中期後葉にかけてほとんど通的な変化がみられない。

主柱穴は6本か8本のものが多く、大形住居の大きさに従って、柱穴も多くなる傾向にある。縄文時代中期前葉には、柱穴の配置が和田Ⅲ遺跡S I 15（第6図8）や不動羅遺跡1号住居址（第6図1）のように、長軸線上をはさんで対称に向かい合う場合が多い。

炉の形態は、地床炉で床面の長軸ライン上に存在することが多い。縄文時代前期中葉から前期後葉は、はりま館遺跡S I 007や池内遺跡S I 141のように地床炉が1基の大形住居もあるが、基本的に住居内床面の長軸ライン上に炉が2基以上配置されることが全体的に多い。縄文時代中期前葉以降は、地床炉だけではなく、天戸森遺跡S I 15堅穴住居跡（第7図1）に見られる石囲炉や、和田Ⅲ遺跡S I 04・同S I 32、下堤A遺跡42号住居跡に見られるような土器埋設炉が加わるようになる。

その他の内部構造では、秋田県内の大形住居によく見られる特徴として、床面が1段低く掘り込まれたベッド状造構と呼ばれる、2段構造の大形住居がある。はりま館遺跡S I 332A・B（第2図2）、杉沢台遺跡（第2図1）、上野遺跡、大烟台遺跡第37号住居跡（第6図3）、和田Ⅲ遺跡S I 15（第6図8）、池内遺跡S I 07（第2図3）、下堤A遺跡37号住居跡（第6図2）でこの2段構造をもつ大形住居が発見された。ベッド状に周りを残して、住居中央部をさらに1段（深さ0.1~0.2m）掘り下げた床面を持ち、その形態は長方形のものが多い。杉沢台遺跡や大烟台遺跡、和田Ⅲ遺跡のように、柱穴数が多く、1段下がった床面を仕切るような柱穴の配置をしている大形住居も認められる。こうした2段構造を持つ大形住居の分布は秋田県北部に集中し、時期は縄文時代前期後葉から中期前葉にみられる。^{註10)}

また、秋田県内の大形住居で特に言えることは、1遺跡内に複数の大形住居が存在する遺跡が多い点である。上ノ山II遺跡（第5図）をはじめ、杉沢台遺跡、はりま館遺跡など大形住居が1遺跡内で3軒以上検出された。

秋田県内の大形住居の発見数から言うと、縄文時代前期後葉から中期前葉までの間に集中している。北陸地方を中心として縄文時代中期中葉に大形住居が数多く見られるのに対して、秋田県内の大形住居は、中期中葉には数が減少し、中期後葉以降はほとんど見られなくなる。

おわりに

本稿では、長軸約10m以上で平面形が楕円形あるいは長方形を呈する大形住居の集成を試みた。

その結果、秋田県内の大形住居は、

①縄文時代前期中葉～中期後葉まで認められる。とくに前期後葉～中期前葉に集中する。

②2段構造をもつ大形住居が多く、また、その分布は県北部に集中する傾向にある。

③集落内で複数の大形住居が検出される場合が多い。

ということが分かった。今後は大形住居の構造に関する詳細な分析を行うとともに、大形住居とそれ以外の住居との比較検討を行い、集落内で大形住居の性格を多角的な視野にたって分析することが課題である。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、高橋忠彦氏、榮一郎氏、村上義直氏、吉川耕太郎氏、山田祐子氏にはご

多忙の中御助言を頂いた。末筆ですが、感謝致します。また、本稿は2002年度国学院大學文学部に提出した卒業論文を改めて書き下ろしたもので、卒業論文指導の節は小林達雄先生、岩崎厚志助手に御指導いただきました。あわせて御礼申し上げます。

遺跡報告書一覧（表中の文献番号と対応）

- 1 秋田市教育委員会『秋田市新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤A遺跡・下堤B遺跡』 1988 (昭和63) 年
- 2 秋田市教育委員会『秋田市新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 下堤E遺跡・下堤F遺跡・板ノ上F遺跡・狸崎A遺跡・湯ノ沢D遺跡・深田沢遺跡』 1985 (昭和60) 年
- 3 秋田県教育委員会『家の下遺跡（1）一県営は場整備事業（琴丘地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ一』 秋田県文化財調査報告書 第256集 1995 (平成7) 年
- 4 秋田県教育委員会『池内遺跡一国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅷ 遺構篇一』 秋田県文化財調査報告書 第268集 1997 (平成9) 年
- 5 秋田県教育委員会『上野遺跡一国道103号道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI一』 秋田県文化財調査報告書 第222集 1992 (平成4) 年
- 6 秋田県教育委員会『上岱I遺跡発掘調査報告書一国道105号改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査一』 秋田県文化財調査報告書 第184集 1989 (平成元) 年
- 7 秋田県教育委員会『潟前遺跡（第2次）一県営田沢湖オートキャンプ場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一』 秋田県文化財調査報告書 第306集 2000 (平成12) 年
- 8 秋田県教育委員会『杉沢台・竹生遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書 第83集 1981 (昭和56) 年
- 9 秋田県教育委員会『館下I遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書 第62集 1979 (昭和54) 年
- 10a 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II一上ノ山I遺跡・館野遺跡・上ノ山II遺跡一』 秋田県文化財調査報告書 第166集 1988 (昭和63) 年
- 10b 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II（補遺）一上ノ山II遺跡一』 秋田県文化財調査報告書 第186集 1989 (平成元) 年
- 11 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XX一蟹子沢遺跡一』 秋田県文化財調査報告書 第261集 1996 (平成8) 年
- 12 秋田県教育委員会『はりま船遺跡発掘調査報告書（上巻）一東北自動車道小坂インターチェンジ建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査一』 秋田県文化財調査報告書 第192集 1990 (平成2) 年
- 13 秋田県教育委員会『和田III遺跡一農免農道整備事業金岡西部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一』 秋田県文化財調査報告書 第350集 2003 (平成15) 年
- 14 富樫泰時「秋田市柳沢遺跡発見の住居址」『考古学ジャーナル』99 1974 (昭和49) 年
- 15 鹿角市教育委員会『天戸森遺跡』鹿角市文化財調査資料26 1984 (昭和59) 年
- 16 上小阿仁村教育委員会『上小阿仁村不動羅遺跡概報』 1975 (昭和50) 年
- 17 田沢湖町教育委員会『黒倉B遺跡 第一次発掘調査報告』 1985 (昭和60) 年
- 18 雄物川町教育委員会『根羽子沢遺跡発掘調査報告書』 1987 (昭和62) 年
- 19 日本鉱業（株）船川製油所『大煙台遺跡』 1979 (昭和54) 年

- 20 八竜町教育委員会 『第2次萱刈沢貝塚発掘調査概報』 1974（昭和49）年

註

- 1 小川望 「縄文時代の「大形住居」について(その1)その定義と機能をめぐる若干の考察」 『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』 第4号 1985（昭和60）年
- 2 小島俊彰 「富山県不動堂遺跡発見の大住居跡」 『考古学ジャーナル』 85 1973（昭和48）年
- 3 中村良幸 「大形住居」 『縄文文化の研究』 8 雄山閣 1982（昭和57）年
- 4 武藤康弘 「縄文時代の大型住居—長方形大型住居の共時的・通時の分析」 『縄文式生活構造—土俗考古学からのアプローチ』 同成社 1998（平成10）年
- 5 石井寛 「遺構研究 大形住居址と大型建物跡」 『縄文時代』 第10号 縄文時代文化研究会 1999（平成11）年
- 6 註2文献
- 7 渡辺誠 「縄文時代の植物食」 雄山閣 1975（昭和50）年
- 8 註3文献
- 9 武藤康弘 「縄文時代前中期の長方形大型住居の研究」 『住の考古学』 同成社 1997（平成9）年
- 10 註4文献
- 11 管谷通保 「縄文時代特殊住居批判—「大型住居」研究の展開のために」 『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』 第6号 1987（昭和62）年
- 12 註5文献
- 13 八竜町教育委員会 『第2次萱刈沢貝塚発掘調査概報』 1974（昭和49）年
- 14 富樫泰時 「秋田市柳沢遺跡発見の住居址」 『考古学ジャーナル』 99 1974（昭和49）年
- 15 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ—上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡—』 秋田県文化財調査報告書 第166集 1988（昭和63）年
- 16 こうした分布差は何に起因しようか。その背景に何が想定されるかを明らかにするには、他県の事例も含めて検討せねばならず今後の課題である。ただし、県南部においても、上ノ山Ⅱ遺跡ではSⅠ171（第3図1）等2段構造をもつと考えられる大形住居が存在することから、単純に南北差とは結論づけられないだろう。

追記

不動羅遺跡Ⅰ号住居址・上ノ山Ⅱ遺跡SⅠ220Aの炉の記載について、広い焼土面は炉が複数ある可能性はあるが、1つの地床炉として記載した。

表1 時期別大形住居の集成①

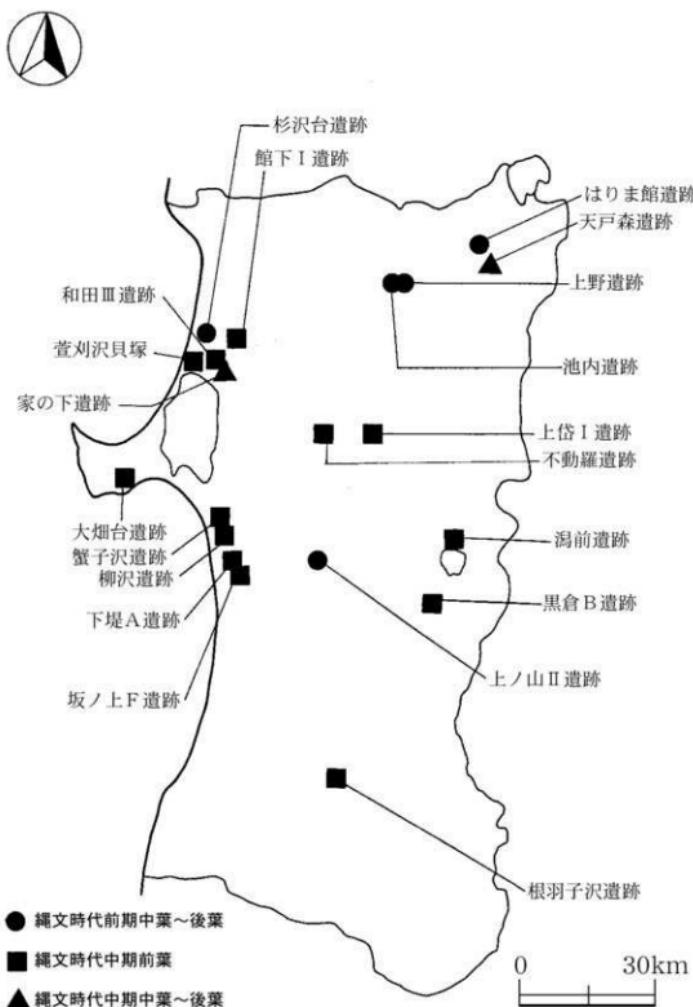
文献番号	遺跡名	所在地	遺構名	平面	規模 長幅(m)	改築	主柱穴	燎 地床 石畳 土畳敷	その他	2段 構造		時期(縦文時代)
										長幅(m)	底幅(m)	
12	はりま船跡	小坂町 小坂	S 1007	長方形	9.46	6.2	6	1				有
			S 1014	長方形	10.8	8.1	8	1				有
			S 1015	長方形	13.5	8	1	13	1			有
			S 1.332A・B	楕円形	8.2	6.4	1	6	2			有
8	杉沢台遺跡	能代市磐	S 1.06多穴住居跡	楕円形	16	6.6	1	9→14	10			有
			S 1.07多穴住居跡	楕円形	31	8.8	3	14→13→	6			有
			S 1.18多穴住居跡	楕円形	15	7	1	8→8	5			有
			S 1.44多穴住居跡	楕円形	28	9		16	9			有
			第6号住居跡	長方形	15	5		—	4			前中期～後葉
4	池内遺跡	秋田市佐面 大館市池内	S 1141	長方形	13.08	8.05	6				1	
			S 1.066	楕円形	10.15	7.88	5	1				前中期～後葉
			S 1.87	楕円形	10.75	5.6	19	—				前中期～後葉
10a	上ノ山II遺跡	協和町 中淀川	S 1.015	楕円形	11.8	5.6	1	16→19	—			有?
			S 1.084	楕円形	10.59	3.1	—	—				前中期～後葉
			S 1.099	楕円形	10.03	5.29	—	1				前中期～中期中葉～後期前葉
			S 1.118	楕円形	14.3	5.5	10	14				前中期～後葉
			S 1.123	楕円形	10	3.5	17	4				前中期～後葉
			S 1.126	楕円形	22	8	13	5				前中期～後葉
			S 1.147	楕円形	10	7.5	14	—				前中期～後葉
			S 1.148	楕円形	11	5	15	3				前中期～後葉
			S 1.150	楕円形	24.5	5.3	26	1				前中期～後葉
			S 1.156	楕円形	20	7.7	31	2				前中期～後葉
10a	10b	10a	S 1.170	楕円形	21	4.2	23	—				前中期～後葉
			S 1.171	楕円形	30.2	8.3	1	30	8			有?
			S 1.180	長方形	18	4.5	30	1				前中期～後葉

表2 時期別大形住居の集成②

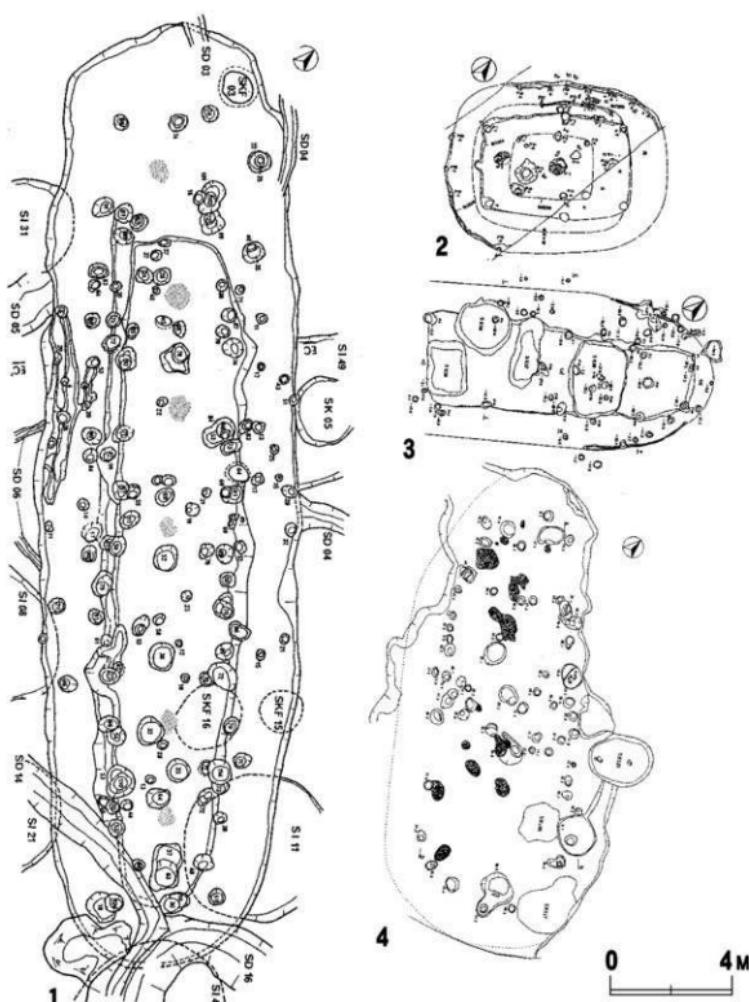
文獻 番号	遺跡名	所在地	遺構名	平面	規模 (長軸) ^{1) (短軸)²⁾}	改築	主柱穴	柱石/石門柱/土間柱/その他		2段 構造	時期(縦文時代)
								地床柱	石門柱		
10a	上ノ山II遺跡	協和町 中淀川	S 1190	楕円形	17.2 4.1	26	4				前期後半
10a			S 1195	楕円形	14.3 6.56	20	—				前期後半
10a			S 1199	楕円形	14.7 5.7	21	3				前期後半
10b			S 1200	楕円形	20.8 6.28	18	4				前期後半
10a		S 1213	楕円形	17.9 6.2	複数	49	1				前期後半
10b			S 1214	楕円形	12.27 5.97	—	3				前期後半
10a			S 1215	楕円形	12.4 6	—	1				前期後半
10a		S 1217	楕円形	11.2 5.8	—	1					前期後半
10a			S 1218	楕円形	10.7 5.5	—	1				前期後半
10a			S 1220A	楕円形	13.2 8.6	—	3				前期後半
10a		S 1220B	楕円形	13.5 7.1	—	—					前期後半
10a			S 1229	楕円形	10.4 7.4	—	2				前期後半
10a			S 1230	長方形	12.6 6.6	12	2				前期後半
10b		S 1239	楕円形	12.12 4.96	—	1					前期後半
10b			S 1255	楕円形	17.4 6.3	12	3				前期後半
10a			S 1311	楕円形	13.6 7.2	15	—				前期後半
10a		S 1312	楕円形	20 6.5	29	2					前期後半
10a			S 1314	楕円形	23 9	17	2				前期後半
10a			S 1315	楕円形	11 4.5	23	—				前期後半
10a		S 1326	楕円形	14.1 6.8	14	—					前期後半
10a			S 1327	楕円形	17.2 4.3	20	3				前期後半
10a			S 1328	楕円形	15 4	12	3				前期後半
7	湖前遺跡	田沢湖町 田沢	S 1136	楕円形	10 5.5	2	—	3			前期末葉～中期前葉
			S 1137	楕円形	10 5	—	4	—			前期末葉～中期前葉
			S 1197	楕円形	17 4.8	17	10	2			前期末葉～中期前葉
12	蟹子沢遺跡	秋田市鷹川	S 108	楕円形	10.1 5.7	—	1				前期末葉～中期前葉

表3 時期別大形住居の集成③

文献番号	遺跡名	所在地	遺構名	平面	規模 長幅(m)	改築	主柱穴	地床枠 石脚等 土壌剖面	その他	2段		時期(縄文時代)
										構造	構造	
12	蟹子沢遺跡	秋田市鷹川	S 131	楕円形	12.9	5.4	—	1				前期末葉～中期前葉
14	船羽子洋遺跡	雄物川町大沢	S 101	楕円形	15.7	5.2	26	5				中期前葉 (円筒下削式)
2	坂ノ上F遺跡	秋田市御所野	8号住居跡	楕円形	19	6.1	12	3				中期前葉 (円筒下削式)
9	館下1遺跡	能代市久慈沢	5号住居跡	楕円形	10	4.8	6	3				中期前葉 (大木7a式)
1	下堤A遺跡	秋田市御所野	37号住居跡	楕円形	10.7	6.4	10	1	有	有		中期前葉 (大木7a式)
17	黒倉D遺跡	田沢湖町平田	豊穴住居址	楕円形	18.3	8.2	6	2				中期前葉 (大木7a式)
16	不動塙遺跡	上小原仁斗村南沢	1号住居址	長方形	8	4.5	4	1				中期前葉 (円筒上削式)
13	和田III遺跡	山本町	S 115	楕円形	10.1	7.05	1	8→8	1	1	有	中期前葉 (円筒上削式)
			S 104	楕円形	12.5	6.6	4	2	1	1	有	中期前葉 (円筒上削式)
			S 132	楕円形	9.6	5.7	6	1	1	1	有	中期前葉 (円筒上削式)
19	壹ノ朝貝塚	八竜町壹ノ朝沢	第2号住居址	長方形	9.8	4.2	1?	8	2		有	中期前葉 (円筒上削式)
20	大畠台遺跡	男鹿市船川港	第29号住居跡	楕円形	10.8	5.2	8	—				中期中葉 (大木8b式)
			第37号住居跡	楕円形	9.2	5.9	6	2			有	中期前葉 (円筒上削式)
			第38号住居跡	楕円形	8.7	5.6	6	2			有	中期前葉 (円筒上削式)
1	下堤A遺跡	秋田市御所野	42号住居跡	楕円形	11.2	6.5	—		1			中期中葉 (大木7a式)
6	上岱1遺跡	阿仁町水無	S 106	楕円形	14.8	5	11	—				中期中葉 (円筒上削式)
15	天戸森遺跡	鹿角市花輪	S 115号穴住居跡	楕円形	10.3		6	1				中期後半
3	家の下遺跡	琴丘町施設	S 183	楕円形	13	4	1	—	2			中期中葉
5	上野遺跡	大館市池内	S 1110	長方形	11.2	2.8	1	—	1		有	前期前葉、中期中葉～後期前葉
1	下堤A遺跡	秋田市御所野	19号住居跡	楕円形	9	6.6	8	2	2		不明	
9	館下1遺跡	能代市久慈沢	7号住居跡	楕円形	12.8	8.1	8	1			不明	
6	上岱1遺跡	阿仁町水無	S 103	楕円形	9.8	5.1	8	3			不明	

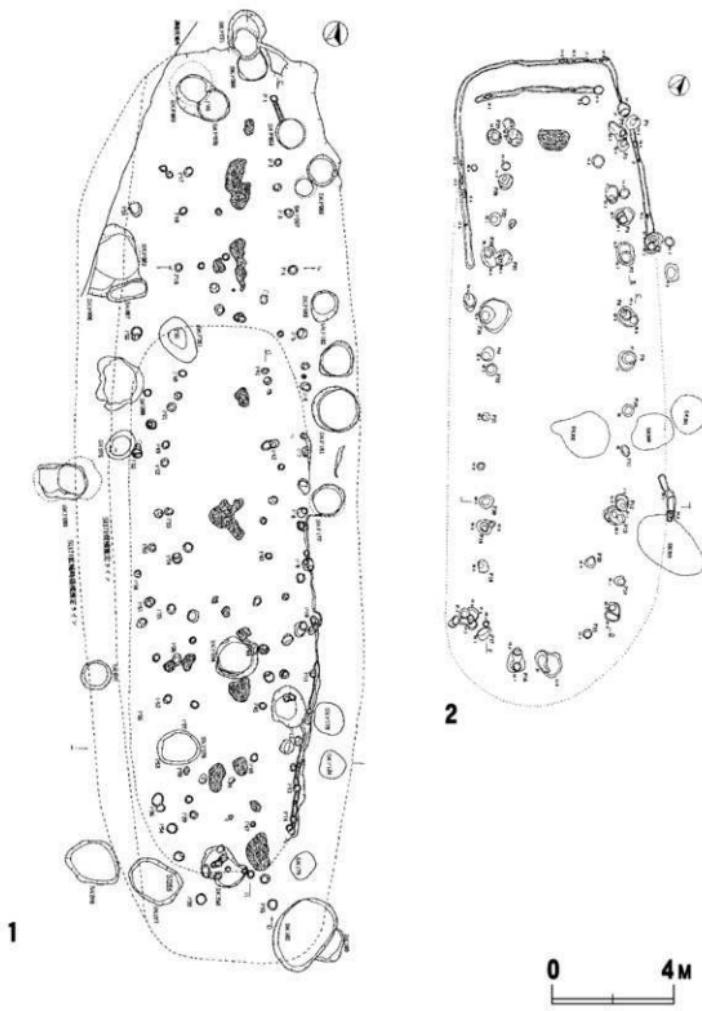


第1図 秋田県内の大型住居検出遺跡分布図



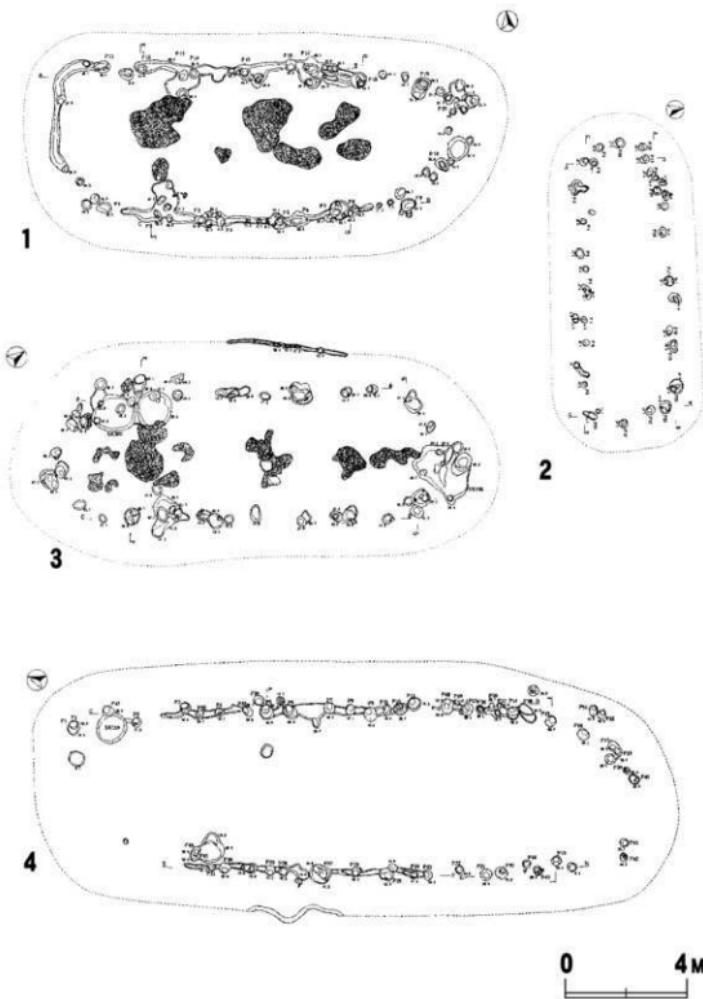
1 杉沢台遺跡：S I 07 2 はりま館遺跡：S I 332A・B 3 池内遺跡：S I 87
4 上ノ山II遺跡：S I 118

第2図 繩文時代前期中葉～後葉の大形住居①



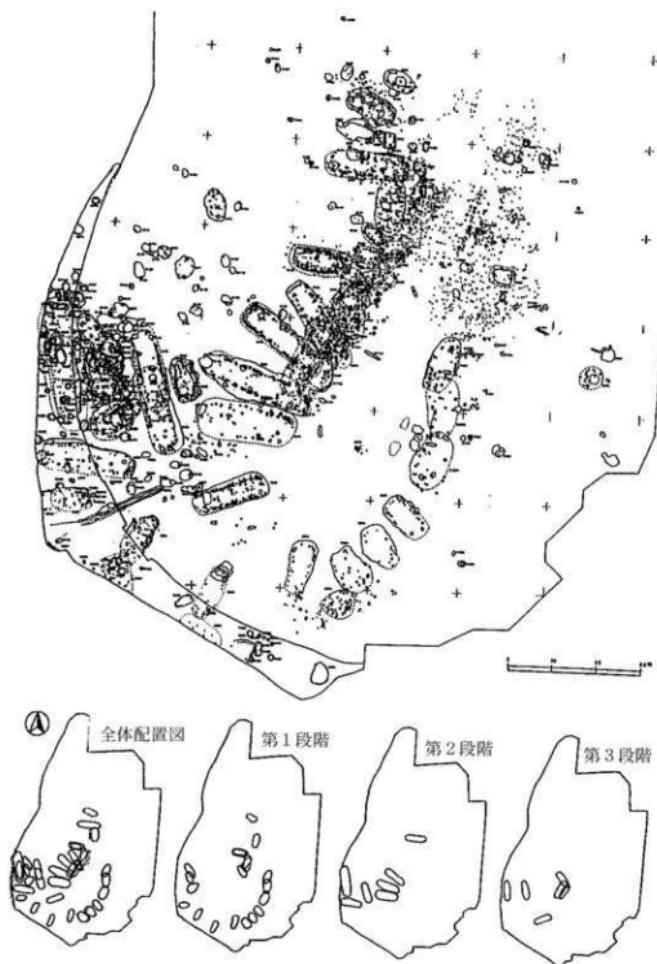
1 上ノ山II遺跡: S I 171 2 上ノ山II遺跡: S I 180

第3図 縄文時代前期中葉～後葉の大形住居②



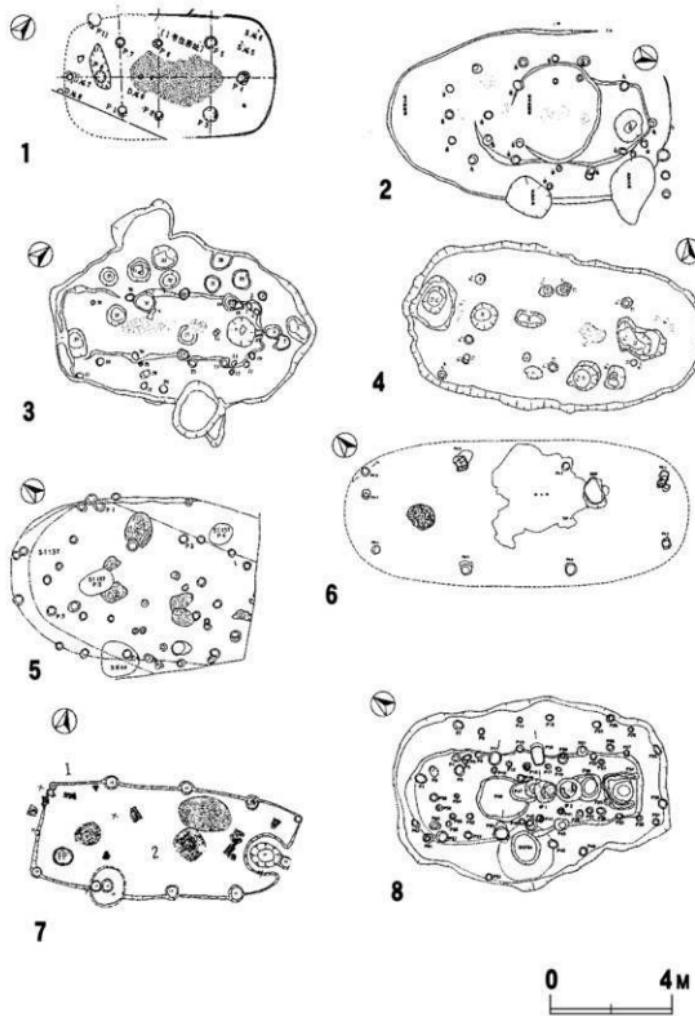
1 上ノ山II遺跡: S I 195 2 上ノ山II遺跡: S I 315 3 上ノ山II遺跡: S I 199
4 上ノ山II遺跡: S I 156

第4図 縄文時代前期中葉～後葉の大形住居③



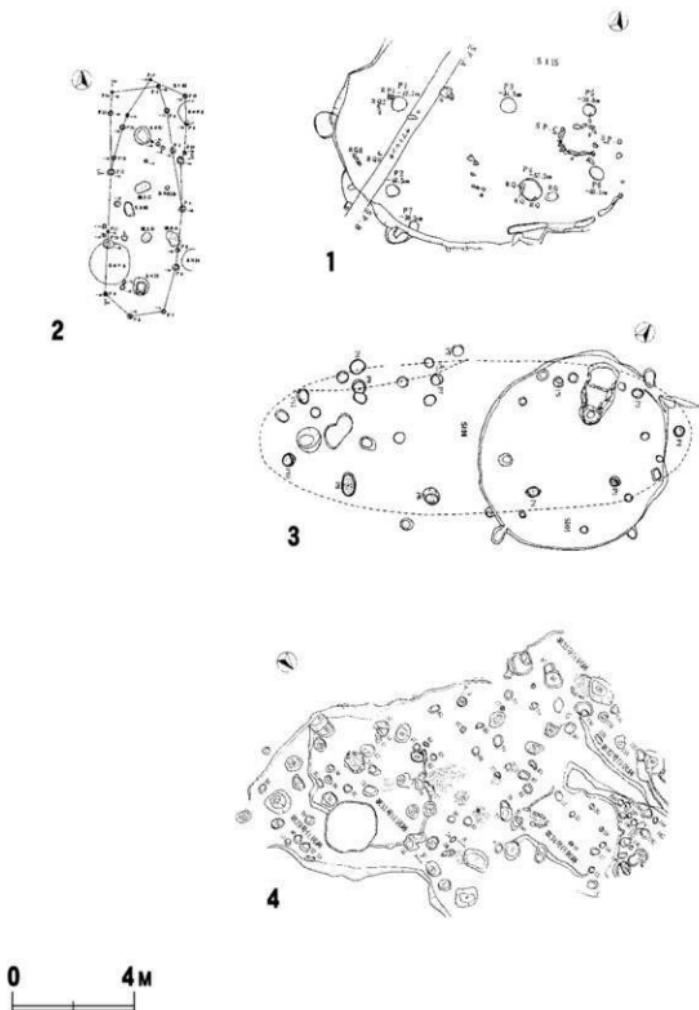
武藤康弘 (1998) より

第5図 上ノ山II遺跡遺構配置図



1 不動羅遺跡：1号住居址 2 下堤A遺跡：37号住居跡 3 大烟台遺跡：第37住居跡
 4 館下I遺跡：5号住居跡 5 涸前遺跡：S I 136 6 蟹子沢遺跡：S I 131
 7 莳刈沢貝塚：第2号住居址 8 和田III遺跡：S I 15

第6図 縄文時代中期前葉の大形住居



1 天戸森遺跡：S I 15竪穴住居跡 2 家の下遺跡：S I 83 3 上倍I遺跡：S I 06
4 大畠台遺跡：第29号住居跡

第7図 繩文時代中期中葉～後葉の大形住居

小又川流域における縄文時代の竪穴住居跡について(1)

河田 弘幸*

はじめに

昭和47（1972）年に、米代川下流に位置する能代市と二ツ井町における大洪水を機に、「米代川工事実施基本計画」の見直しが行われ、上流ダム群による水量を調節することとなった。このダム群の一つとして阿仁川の右支流、小又川に建設することになったのが森吉山ダムである。

秋田県教育委員会では、平成4（1992）年、森吉山ダムによって水没する当該地域に関して遺跡分布調査を開始した。当初、新しく確認された遺跡は6遺跡であったが、その後数が増え60遺跡を数える。発掘調査は、平成7（1995）年に森吉町教育委員会により日廻岱A遺跡・碎測遺跡、平成8（1996）年に上悪戸D遺跡・深渡遺跡・地蔵岱遺跡・森吉家ノ前B遺跡・天津場C遺跡の工事用道路部分が行われた。その後、平成9（1997）年～平成15（2003）年の7年間で、秋田県教育委員会により桐内A～D遺跡、桐内沢遺跡、姫ヶ岱C（一部）・D遺跡、日廻岱A遺跡、日廻岱B遺跡、漆下遺跡、向様田A～F遺跡、森吉家ノ前A・C遺跡、碎測遺跡、深渡遺跡、深渡A遺跡、森吉町教育委員会により上悪戸A・B・C遺跡、姫ヶ岱A～C遺跡、二重鳥A・C～G遺跡、森吉B遺跡の調査が行われた。^(註1)また、平成4（1992）年には「小瀧阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査」で森吉山ダム建設予定地より下流の桂の沢遺跡も調査されている。このように、森吉山ダム建設予定地内に分布する60遺跡のうち約2／3遺跡、約23万km²の発掘調査が行われ、小又川流域における縄文時代の様相が明らかになってきた。

本稿では、これまでの発掘調査の成果を基に小又川流域の縄文時代の竪穴住居跡について、規模や平面形、炉の形態等について比較し検討を加えるとともに、当該地域の集落について論ずるものである。なお、竪穴住居跡の規模については床面積とする。ただし、削平等で床面が確認されない住居については、柱穴間の長軸と短軸の距離を掛けたものを床面積の目安とした。

文献は第1表の文献番号に対応する。

1 遺跡の立地

小又川は、北秋田郡・仙北郡・鹿角市の境界をなす三ツ又森（標高1,119m）・柴倉岳（標高1,178m）に源を発し、六郎沢・粒様沢・ノロ川・連漸沢などの支流を合わせ、森吉山北麓を蛇行しながら西流し、阿仁前田地区で阿仁川と合流する。桂の沢遺跡を含め61の小又川流域に存在する遺跡は、小又川左岸に26遺跡、右岸に35遺跡位置する。そのうち縄文時代の竪穴住居跡が検出された遺跡は、左岸に15遺跡（桐内沢遺跡を含む）、右岸に6遺跡ある。これらの遺跡は小又川沿いに点在するが、左岸の様田地区と対岸の向様田地区にはまとまって立地している。

小又川流域では、洪積段丘を含め最大6段の段丘面が確認される。^(註2)遺跡は、最も発達した段丘面（L1面 2～3万年前）に一番多く、次にL1面について発達した段丘面（M2面 8～10万年前）に多く存在する。これらの段丘面の標高は、110～200mである。

*秋田県埋蔵文化財センター北調査課学芸主事

2 縄文時代の竪穴住居跡

これまでの発掘調査において、小又川流域の遺跡で検出された竪穴住居跡は、桐内A遺跡6軒、桐内C遺跡5軒、桐内D遺跡2軒、桐内沢遺跡1軒、姫ヶ岱C遺跡7軒、姫ヶ岱D遺跡8軒、日廻岱B遺跡24軒、漆下遺跡24軒、二重鳥C遺跡27軒、二重鳥D遺跡14軒、二重鳥E遺跡22軒、二重鳥G遺跡4軒、向様田A遺跡3軒、向様田D遺跡2軒、向様田E遺跡1軒、向様田F遺跡2軒、森吉家ノ前A遺跡10軒、砂渕遺跡2軒、深渡遺跡14軒、深渡A遺跡1軒、桂の沢遺跡⁽²³⁾48軒である。

(1) 草創期

草創期の遺跡は今のところ確認されていない。

(2) 早期

早期の遺構を検出した遺跡は今のところ確認されていないが、早期後半に位置づけられている貝殻腹縁圧痕文・貝殻条痕文の土器片が姫ヶ岱C遺跡、桂の沢遺跡で、貝殻腹縁圧痕文の土器片が地蔵岱遺跡で出土している。向様田E遺跡と桂の沢遺跡では爪形文の土器片が出土しており、早期に位置づけている。姫ヶ岱D遺跡では赤御堂式と考えられる縄文尖底系土器が、桐内D遺跡では胎土に纖維の混入が認められる平底の土器が出土している。また、早期後葉から前期初頭に位置づけられる縄文尖底系の土器が桐内A遺跡、桐内C遺跡、姫ヶ岱C遺跡、姫ヶ岱D遺跡、向様田B遺跡で出土している。

(3) 前期（第3・4図）

前期の遺跡は、桐内B遺跡、桐内C遺跡、桐内D遺跡、桐内沢遺跡、姫ヶ岱A遺跡、姫ヶ岱C遺跡、姫ヶ岱D遺跡、日廻岱A遺跡、日廻岱B遺跡、上八岱B遺跡、漆下遺跡、二重鳥C遺跡、向様田B遺跡、向様田E遺跡、森吉家ノ前A遺跡、地蔵岱遺跡、深渡遺跡、桂の沢遺跡がある。これらの遺跡のうち、検出された前期の竪穴住居跡は、日廻岱B遺跡2軒（後葉1・不明1）、二重鳥C遺跡3軒（後葉）、森吉家ノ前A遺跡1軒（後葉）、深渡遺跡7軒（中葉1・後葉4・不明2）、桂の沢遺跡1軒である。日廻岱B遺跡で検出された2軒の住居跡の床面積は28m²と35m²で、平面形は楕円形と円形である。S I 1105は住居中央に地床炉をもつ。S I 2158は2軒重複しており、住居中央付近に地床炉を3基もつ。二重鳥C遺跡で検出された住居跡の床面積は9~18m²で、平面形は不整円形や楕円形を呈する。3軒のうち、炉を共伴する住居跡はS I 1011軒であり、北壁際に地床炉をもつ。S I 127は本来炉を伴っており、S I 58・100を構築の際に消失したと考えられている。森吉家ノ前A遺跡で検出したS I 120の床面積は60m²で小又川流域で検出した住居跡としては最大である。平面形は長楕円形を呈し、長軸方向に2基の掘込炉と地床炉が等間隔に並ぶ。3軒の住居が重複している可能性もあるが現在のところ大型住居跡とらえている。深渡遺跡では7軒の住居跡を検出したが、そのうちの6軒が遺跡南西端に集中する。5軒の住居跡の床面積は22~25m²であるが、S I 5001-Aは32m²と広い。平面形は円形又は楕円形を呈し、すべての住居に地床炉が伴う。

(4) 中期（第5~14図）

中期の遺跡は、上悪戸A遺跡、上悪戸C遺跡、上悪戸D遺跡、桐内A遺跡、桐内B遺跡、桐内C遺跡、桐内D遺跡、桐内沢遺跡、姫ヶ岱B遺跡、姫ヶ岱C遺跡、姫ヶ岱D遺跡、日廻岱A遺跡、上八岱A遺跡、漆下遺跡、上八岱B遺跡、二重鳥D遺跡、二重鳥E遺跡、二重鳥F遺跡、水上ミ遺跡、向様田B遺跡、天津場C遺跡、森吉家ノ前A遺跡、森吉家ノ前B遺跡、地蔵岱遺跡、砂渕遺跡、深渡遺跡、深渡A遺跡、桂の沢遺跡がある。これらの遺跡のうち、検出された中期の竪穴住居跡は、桐内A遺跡

1軒（中葉）、桐内C遺跡1軒（中葉）、桐内D遺跡2軒（後葉）、桐内沢遺跡1軒（前葉）、姫ヶ岱C遺跡5軒（後葉）、姫ヶ岱D遺跡3軒（後葉）、漆下遺跡4軒（前葉1・中葉3）、二重鳥C遺跡22軒（前葉1・前葉以降1・中葉14・後葉以前1・後葉4・後葉以降1）、二重鳥D遺跡2軒（後葉1・後葉以降1）、二重鳥E遺跡7軒（中期以前1・中期以降2・前葉以降2・中葉1・後葉1）、二重鳥G遺跡3軒（前葉～中葉1・中葉2）、向様田A遺跡2軒（後葉1・末葉～後期初頭1）、向様田D遺跡1軒（後葉）、森吉家ノ前A遺跡7軒（中葉1・後葉6）、硯測遺跡1軒（後葉）、深渡遺跡3軒（前半1・後葉2）、深渡A遺跡1軒（後葉）、桂の沢遺跡12軒（前葉2・中葉1・後葉6・不明3）である。

住居跡の床面積は、10m未満7軒、10～20m30軒、20～30m13軒、30～40m10軒、40～50m1軒、50m以上2軒であり、前葉・中葉・後葉における床面積には、時期ごとの特徴は見られない。床面積の最も広い住居跡は、桐内C遺跡S I 38であり51.4m²を測るが、住居北側のプランが確認できなかったため実際の床面積はもう少し広い。平面形は、深渡遺跡S I 107がやや不整な隅丸方形、二重鳥G遺跡S I 01が隅丸方形と報告されているが、ほとんどが円形又は梢円形を基調とする。住居跡の主柱穴は4基のものが多く、5基や6基のものもある。検出した66軒の住居（桂の沢遺跡を除く）のうち炉を伴う住居は57軒である。炉の形態は、地床炉20、立石+地床炉1、掘込炉1、石囲炉5、複式炉23、石囲土器埋設炉3、土器片開炉1である。

前葉の住居に伴う炉は、地床炉5（前葉～中葉1・前葉以降1含む）、土器埋設炉2である。地床炉はほぼ住居中央部に位置する。いずれの住居跡の覆土からも円筒上層b・c式土器が出土しているが、大木式土器は共伴していない。土器埋設炉を伴う住居跡は桐内沢遺跡S I 05と漆下遺跡S I 524である。S I 05は口縁部の欠損した円筒上層c式土器が住居中央部に正位に埋設されている。S I 524の炉の位置は不明であるが、底部を打ち欠いた円筒上層c式土器を正位に埋設している。桂の沢遺跡でも、円筒上層b式期と円筒上層c式期の住居跡が検出されているが、詳細は不明である。

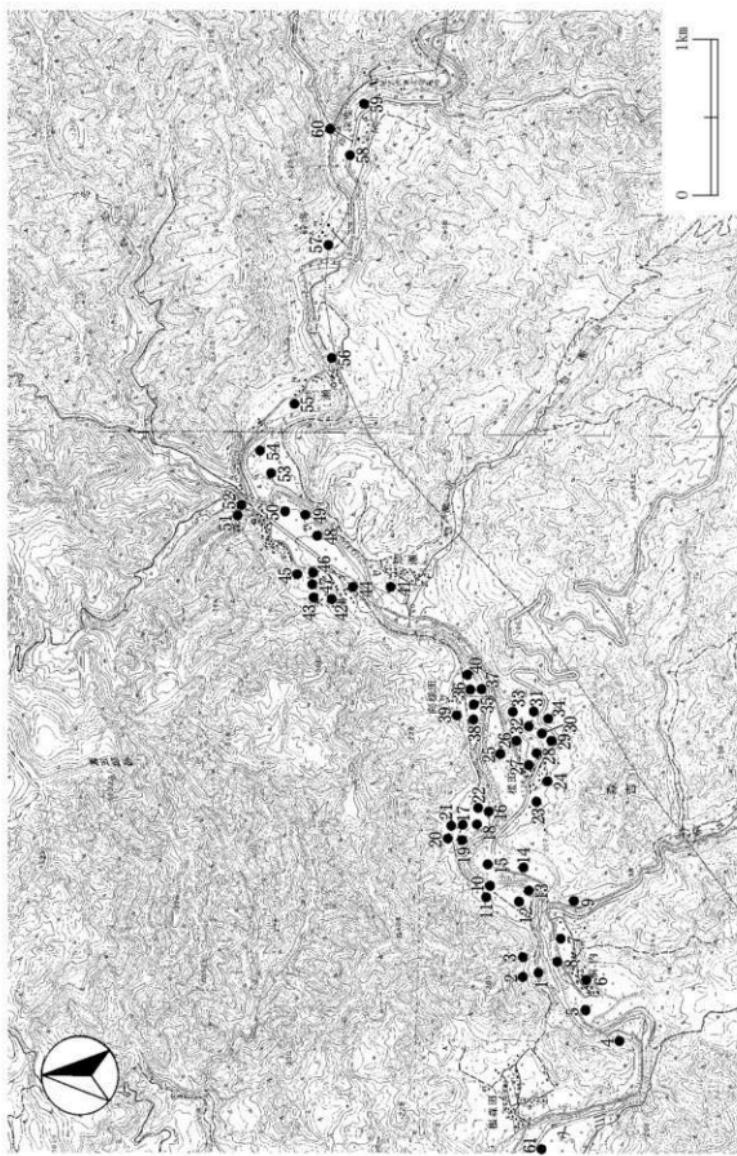
中葉の住居に伴う炉は、地床炉12、掘込炉1、石囲土器埋設炉2、土器埋設炉1、土器片開炉1である。地床炉は若干中央部よりずれている場合もあるが、ほとんどが住居中央部に位置する。掘込炉もほぼ住居中央に位置する。2基の地床炉をもつ住居は、二重鳥C遺跡S I 46・50・112、桐内C遺跡S I 38である。ただし、二重鳥C遺跡S I 46は拡張されており、2基の地床炉は新旧に伴うか同時期かは不明である。地床炉をもつ住居跡の覆土からは円筒上層d・e式土器が出土しており、二重鳥C遺跡S I 202は大木7b～8a式土器、S I 46・50では大木8b式土器破片が共伴している。また、桐内A遺跡S I 113、桐内C遺跡S I 38でも大木8b式土器破片が共伴する。石囲土器埋設炉を構築する住居跡は、二重鳥C遺跡S I 121と漆下遺跡S I 129である。二重鳥C遺跡S I 121の炉は住居ほぼ中央部に位置する。径60cm程の円形に河原石を配し、その中央部に土器を正位に埋設している。埋設土器は、胴部上半と底部を欠損しており土器型式は不明であるが、覆土中から円筒上層e式土器が出土している。漆下遺跡S I 129は、プランが確認されなかつたため炉の位置は不明である。炉の礎は、一部抜けているが、扁平な礎を長方形に配し、中央部に土器を正位に埋設している。土器の口縁部は欠損しており地文は縦文のみであるが、この土器は大木8b式土器と考えている。また、漆下遺跡では土器片開炉を有する住居跡S I 903も検出している。S I 129同様にプランが確認されなかつたため炉の位置は不明であるが、円筒上層d・e式土器破片と扁平な礎を方形に突き立てて炉を形

成している。土器埋設炉をもつ住居跡は、森吉家ノ前A遺跡S I 224である。プランが確認されないため炉の位置は不明であるが、S I 224も底部を打ち欠いた円筒上層d式土器を正位に埋設している。

後葉の住居に伴う炉は地床炉3（中期以降2含む）、立石+地床炉1、石圓炉5、石圓土器埋設炉1、複式炉24（後期初頭としている姫ヶ岱C遺跡第3号含む）であり、圧倒的に複式炉が多くなる。二重鳥C遺跡S I 54は住居内北側に地床炉をもつ。姫ヶ岱C遺跡第2号の炉は、地床炉北側に立石を伴い、住居跡覆土内からは大木10新式土器が出土している。石圓炉を構築する住居跡は、向様田A遺跡S I 190、二重鳥C遺跡S I 29・100、二重鳥D遺跡S I 34、姫ヶ岱C遺跡第1号である。姫ヶ岱C遺跡第1号は楕円形の石圓炉が住居中央部に位置するが、二重鳥C遺跡と向様田A遺跡の石圓炉は中央部より壁際に寄る。姫ヶ岱C遺跡第1号からは大木10新式土器が出土している。二重鳥C遺跡S I 29と二重鳥D遺跡S I 34の石圓炉は方形を呈しており、S I 34からは大木9式土器破片が出土している。二重鳥C遺跡S I 100の炉は東壁際に構築されている。河原石を円形に組んでおり、焚口部分は「ハ」の字状に開く。構築時期は造構の重複関係より大木9式期以前と考えられる。向様田A遺跡S I 190の炉は扁平な河原石を方形に組んでおり、南側には地床炉もしくは使用されなくなったと考えられる焼土面が広がる。石圓土器埋設炉を構築する住居は、二重鳥C遺跡S I 08である。二重鳥C遺跡S I 08は中央部に地床炉をもつその南側に石圓土器埋設炉を構築している。土器は胴部下半を欠く大木10式土器で正位に埋設されている。

検出した複式炉は壁際に構築している場合が多いが、二重鳥D遺跡S I 12A・Bと向様田D遺跡S I 03はやや中央部寄りに構築している。複式炉の形態は、土器埋設+石組部+前庭部から構築されている複式炉11、土器埋設+石組部から構築されている複式炉4、土器埋設+前庭部から構築されている複式炉1、石組部+前庭部から構築されている複式炉6である。また、削平や重複により石組部のみ検出され複式炉と考えられるものもある。土器埋設+石組部+前庭部で構築している複式炉をもつ住居は、桐内D遺跡S I 34、姫ヶ岱C遺跡第3号、二重鳥C遺跡S I 53・58、向様田A遺跡S I 200、森吉家ノ前A遺跡S I 219・227・430、碎測遺跡S I 90、深渡遺跡S I 2001・5013である。桐内D遺跡S I 34は円形に組んだ石圓の中央部に口縁部と底部を打ち欠いた土器を正位に埋設する。石組部は「コ」の字状を呈し、前底部は「ハ」の字状に礎を配する。二重鳥C遺跡S I 53は、下半を打ち欠いた大木9式土器を逆位に埋設しているが石圓は伴わない。石組部は「ニ」の字状を呈し上下とも礎で閉じない。前庭部は掘り込みのみである。これに対してS I 58は、土器破片で組んだ中央部に底部を打ち欠いた大木9式土器を正位に埋設している。石組部は「日」の字状を呈し、前庭部は「ハ」の字状に礎を配する。向様田A遺跡S I 200の複式炉は、土器埋設の抜き取り痕が残る。石組部は「コ」の字状を呈し底面には扁平な礎を敷き詰めている。前底部は「ハ」の字状に礎を配する。森吉家ノ前A遺跡S I 219・430は石組部に向かって斜位に土器を埋設している。碎測遺跡S I 90は、石圓の中央部に胴部上半のみの土器を正位に埋設している。石組部は「コ」の字状を呈し前庭部は掘り込みのみである。深渡遺跡S I 2001は壁際に、4列×4～5段礎を積み重ねて前庭部を構築しており、他の複式炉の形態とは大きく異なる。土器埋設+石組部で構築される炉をもつ住居は、姫ヶ岱D遺跡S I 46、二重鳥D遺跡S I 12B、二重鳥E遺跡S I 01、向様田D遺跡S I 03である。姫ヶ岱D遺跡S I 46は「コ」の字状の石圓の中に大木10式土器を埋設している。二重鳥D遺跡S I 12Bは口縁部と底部を打ち欠いた土器を正位に埋設している。石組部は「コ」の字状を呈する。二重鳥E遺跡

S I 01は方形に組んだ石圓の中央部に底部を打ち欠いた土器を正位に埋設している。石組部は「二」の字状を呈し東側底面に礎を敷いている。向様田D遺跡S I 03は口縁部と底部を打ち欠いてさらに縦に半分に割った大木10式土器を正位に埋設している。石組部は「コ」の字状を呈し下底に円礎を敷く。石組部+前庭部で構築されている炉をもつ住居は、桐内D遺跡S I 33、姫ヶ岱C遺跡S Q10、二重鳥D遺跡S I 12A、森吉家ノ前A遺跡S I 221・429・510である。プランが確認されたのは二重鳥D遺跡S I 12Aと森吉家ノ前A遺跡S I 221であり、その他は地山土が削平されていたために確認できなかった。桐内D遺跡S I 33は方形に組んだ石圓の中央部に底部を打ち欠いた土器を正位に埋設している。前庭部には「ハ」の字状に礎を配する。二重鳥D遺跡S I 12Aの複式炉は壁際に、森吉家ノ前A遺跡S I 221の複式炉は壁際よりやや中央寄りに構築されている。姫ヶ岱D遺跡S I 43・45は、「コ」の字状を呈する石組部のみを検出しており全体的な形態は不明であるが、S I 45には底面に礎を敷いている。このように中期になると住居の形態や規模には大差はないが、屋内炉の形態が変化する。



第1図 小又川流域に分布する遺跡群

第1表 小又川流域に分布する遺跡群

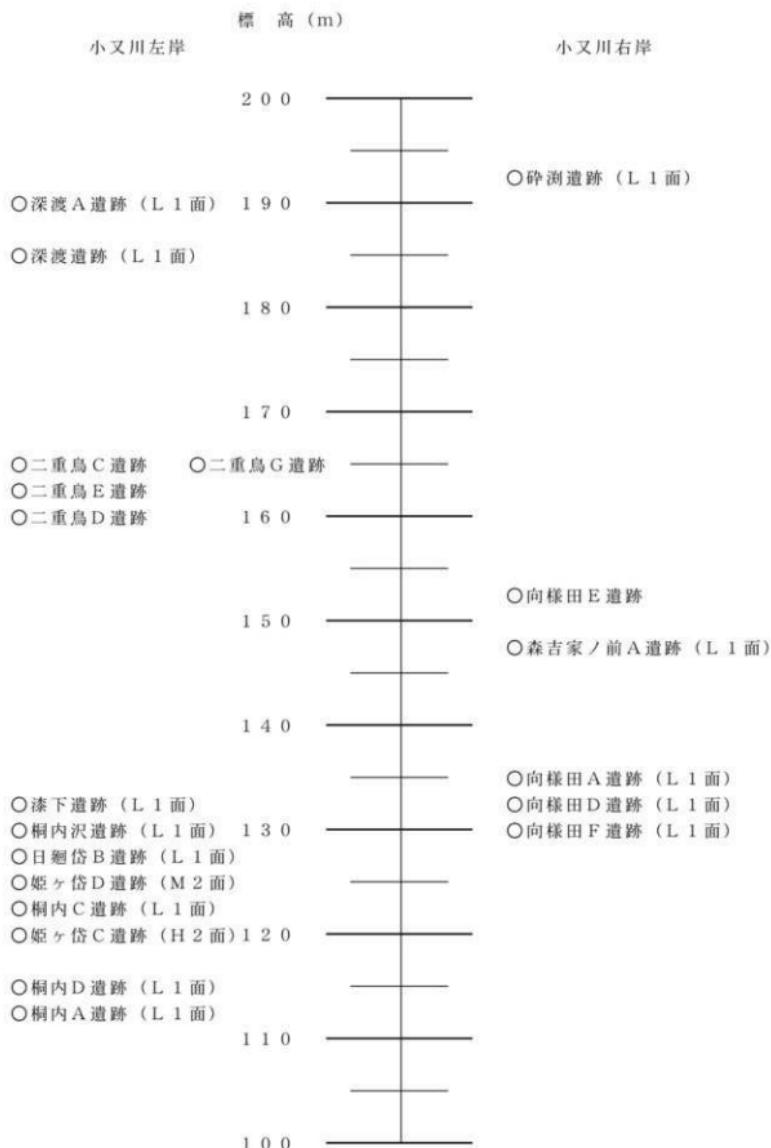
番号	遺跡名	遺跡所在地	時期	調査年度	文献
1	上郷戸A	森吉町根森田字上郷戸4-1, 9, 10-1, 12-1~4, 13, 14-1, 16-1~2外	縄文中~後期 弥生後期	町H9年 町H10年	1・21 2・21
2	上郷戸B	森吉町根森田字上郷戸8-12	縄文中~後期	町H10年	2・21
3	上郷戸C	森吉町根森田字上郷戸7, 8-9	縄文中~後期	町H10年	2・21
4	上郷戸D	森吉町根森田字上郷戸34-7, 34-29~41, 34-60, 61-67, 54外	縄文中~後期	町H8年	3・21
5	桐内A	森吉町森古字桐内前田5-1, 6-1~3外	縄文早~後期	町H11~12年	4・20
6	桐内B	森吉町森古字桐内前田16, 字桐内33-1, 34~37外	縄文前~中・晚期	町H11年	5・21
7	桐内C	森吉町森古字桐内前田ノ上ミ塔11外	縄文前~晚期	町H10年	6
8	桐内D	森吉町森古字桐内前田ノ上川鉢19外	縄文早~後期	町H11年	5
9	桐内沢	森吉町森古字桐内沢下103	縄文前~後期	町H12年	7
10	郷ヶ岱A	森吉町根森田字郷ヶ岱8-9, 10-1	縄文前~晚期	町H9年 町H10年	2・21
11	郷ヶ岱B	森吉町根森田字郷ヶ岱14-10~12	縄文中~後期	町H9年 町H10年	2・21
12	郷ヶ岱C	森吉町根森田字郷ヶ岱12~21, 15外	縄文早~晚期	町H9年 町H10年	2・8・21
13	郷ヶ岱D	森吉町根森田字郷ヶ岱12-31外	縄文早~中・晚期	町H9年	9・21
14	日隈岱A	森吉町森古字日隈岱65, 63-1外	縄文前~晚期	町H12年 町H7年	7・20
15	日隈岱B	森吉町森古字日隈岱86, 88, 89, 90, 91	縄文前~後期	町H14年	20
16	橋場岱A	森吉町森古字橋場岱48, 49, 50~1外	縄文中期		21
17	橋場岱B	森吉町森古字橋場岱569, 78外	縄文後~晚期		21
18	橋場岱C	森吉町森古字橋場岱42, 62外	縄文後~晚期		21
19	橋場岱D	森吉町森古字橋場岱110外	縄文時代		21
20	橋場岱E	森吉町森古字橋場岱109	縄文時代		21
21	橋場岱F	森吉町森古字橋場岱101, 103, 104	縄文晚期		21
22	橋場岱G	森吉町森古字橋場岱66-1, 39, 40, 46	縄文後期		21
23	上八岱A	森吉町森古字上八岱102, 104, 105, 106外	縄文中~晚期、弥生	町H10~11年 町H11年	20 20
24	上八岱B	森吉町森古字上八岱70, 71, 72	縄文前~晚期	町H11年	20
25	塗下	森吉町森古字塗下2-1, 4, 5, 6, 7, 8, 14-2, 37外	縄文前~後期、中世	町H13~14年	20
26	二重島A	森吉町森古字二重島31-1, 32-2, 47-1, 106-1, 134, 135	縄文晚期	町H14~15年	20
27	二重島B	森吉町森古字二重島11, 99, 100外	縄文中~後期	町H14年	20
28	二重島C	森吉町森古字二重島93, 94, 95, 96, 97, 110	縄文前~晚期	町H13~14年	10・20
29	二重島D	森吉町森古字二重島39	縄文中~晚期	町H12年	11・20
30	二重島E	森吉町森古字二重島65, 66-1, 69, 70-2, 70-3	縄文中~中・後期、弥生	町H12年	11・20
31	二重島F	森吉町森古字二重島124-1	縄文中~後期、弥生	町H12年	11・20
32	二重島G	森吉町森古字二重島80, 81-1, 84-1	縄文中~中・後期、弥生	町H13年	10・20
33	二重島H	森吉町森古字二重島6, 14, 15	縄文後期	町H14年	20
34	水上ミ	森吉町森古字水上42-1, 43-1, 44, 113-6外	縄文中~晚期、弥生	町H11年	20
35	向様田A	森吉町森古字向様田家ノ下モ8-1, 9-1-2, 11, 16, 81-1, 82, 83, 84	縄文晚期	町H12~13年	12・13・21~23
36	向様田B	森吉町森古字向様田67-1-2, 70, 71-1, 72, 74, 75外	縄文前~晚期	町H13年	14・21・23
37	向様田C	森吉町森古字向様田16, 77, 78, 79	縄文後期	町H13年	14・21・23
38	向様田D	森吉町森古字向様田ノ下モ14-1, 17, 18, 19-1, 20	縄文晚期	町H13年	21・23
39	向様田E	森吉町森古字向様田ノ下モ36, 37, 39, 63, 64	縄文後期	町H13年	14・21
40	向様田F	森吉町森古字向様田58, 59外	縄文前~晚期	町H13年	15・21
41	惣瀬	森吉町森古字惣瀬86外	縄文後期、古代		22
42	天津場A	森吉町森古字天津場15-3	縄文後期、古代		20
43	天津場B	森吉町森古字天津場16-1	縄文後期		20
44	天津場C	森吉町森古字天津場87-1, 87-3, 88-2	縄文中~後期	町H8年	16・20
45	冬木沢A	森吉町森古字冬木沢26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35	縄文後期	町H14~15年	20
46	冬木沢B	森吉町森古字冬木沢17, 19, 22	縄文後期		20
47	冬木沢C	森吉町森古字冬木沢6-1	縄文晚期		20
48	森吉家ノ前A	森吉町森古字森吉家ノ前50, 145, 174, 175, 176, 177, 178	縄文後期~美濃、古代、中世	町H14~15年	20
49	森吉家ノ前B	森吉町森古字森吉家ノ前138, 139, 140, 141, 142	縄文後期	町H8年	16・20
50	森吉家ノ前C	森吉町森古字森吉家ノ前101-1, 103, 114, 115, 116	中世	町H15年	20
51	森吉A	森吉町森古字森吉95	縄文後期、古代		20
52	森吉B	森吉町森古字森吉69	縄文後期		20
53	地蔵岱	森吉町森古字地蔵岱74外	縄文早~後期、古代	町H8年	16・22
54	地蔵岱A	森吉町森古字地蔵岱124外	縄文中~後期		22
55	磐ノ瀬	森吉町森古字磐ノ瀬80外	縄文後期		22・23
56	糞岱	森吉町森古字糞岱74外	縄文後~晚期		22
57	糞瀬	森吉町森古字糞瀬124外	縄文中~後期	町H13年 町H7年	17
58	深渡	森吉町森古字深渡104-1外	縄文前~晚期	町H9~15年 町H8年	16・18・22
59	深渡A	森吉町森古字深渡29外	縄文中~晚期	町H15年	22
60	丹瀬口	森吉町森古字丹瀬2~1外	縄文後期		
61	桂の沢	森吉町根森田字桂の沢19-2外	縄文早~晚期	町H4年	19

第2表 縄文時代の竪穴住居跡一覧

遺跡名	立地	標高(m)	遺構名	規格 (m)	形態	剖面	時期	柱穴	備考
輪内A道路	左岸段丘 (L.1面)	116~ 117	S 1113	5.19×4.82	円形	竪床炉	中期中葉	5基 (主4基)	
			S 1111	5.26×5.15	円形	石圓炉 (円形)	後期後葉	4基	
			S 132	5.56×5.10	円形	石圓炉 (円形)	後期後葉	6基 (主6基) 掘り込み外	
			S 137	3.52×3.47	円形	石圓炉 (円形)	後期後葉	4基 (主4基) 掘り込み外	
			S 182	伴4	円形	石圓炉 (円形)	後期後葉	3基	
			S 1123	4.82×3.93	円形	石圓炉 (円形)	後期後葉		
			S 136	5.0×3.6	不明	石圓炉 (円形)	後期	6基 (主6基)	
輪内C道路	左岸段丘 (L.1面)	125	S 136	5.0×3.6	不明	石圓炉 (円形)	後期	6基 (主6基)	
			S 138	7.96×6.46	圓丸方形容	竪床炉2	中期中葉	6基 (主6基)	上層c 大木8b
			S 114B	3.5×3.0	不明		後期	7基 (主6基)	
			S 115B	4.0×3.8	不明		後期	8基 (主7基)	
			S 116B	4.2×4.0	不明		後期	7基 (主7基)	
輪内D道路	左岸段丘 (L.1面)	115~ 117	S 133	4.5~(推定)	不明	複式炉+土器埋設+前庭部	中期後葉	9基	土器埋設核 き取り
			S 134	5.08×4.98	円形	複式炉+土器埋設+石組部+前庭部	中期後葉	5基 (主4基)	石組部一部 砾石
輪内沢道路	輪内沢川 右岸段丘 (L.1面)	125~ 137	S 105	4.45×4.12	不整円形	土器埋設炉	中期前葉	6基	上層c
			S 106	2.8×2.63	不整円形	立石+地床炉	中期後葉	14基	
柴田岱C道路	左岸 (L.2面)	125	第1号	2.9×2.5	不明	石圓炉 (椭円形)	中期後葉	4基	
			第2号	2.8×2.63	不整円形	立石+地床炉	中期後葉	14基	
			第3号 (推定)	2.5×2.3	不明	複式炉 (土器埋設+石組部+前庭部)	後期初頭		
			第4号	2×1.32	柄錐状		後期初頭		
			第5号	2.9×2.6	掘り出し部のみ		不明		
			S Q10	2.9×2.6	不明	複式炉 (石組部+前庭部)	中期後葉		
			S 104	2.6	円形	石圓炉 (円形)	後期前葉	2基	
柴田岱D道路	右岸段丘 (L.2面)	126~ 127	S 105	3	円形	石圓炉 (円形)	後期前葉		
			S 109	不明	不明	石圓炉 (圓丸方形容)	後期前葉		
			S 140	2.9×2.4	不整形		後期初頭		
			S 141	3.3×3.2	不明		後期後葉		
			S 143	不明	不明	複式炉	中期後葉		
			S 145	不明	不明	複式炉	中期後葉		
			S 146	不明	不明	複式炉 (土器埋設+石組部)	中期後葉		大木10
日輪岱B道路	左岸段丘 (L.1面)	125~ 131	S 11105	6.5×5.4	椭円形	竪床炉	後期後葉		下層d
			S 12042	不明	不明	土器埋設炉 (正位)	後期前葉		
			S 12370	4.6×4	椭円形	土器埋設炉 (正位+正位)	後期前葉		
			S 12001	3.4~4.8	円形	土器埋設炉 (中央+外位) (變正位)	後期前葉		2軒並棲
			S 12005	3.4~(推定)	円形	立石+土器埋設炉 (中央+外位)	後期前葉		
			S 12007	3×4	椭円形	立石+土器埋設炉 (正位+斜位)	後期前葉	5基	伊と柱穴の 作り替え
			S 12017	4.7×4.3	円形	土器埋設炉 (正位+正位)	後期前葉	12基	伊と柱穴の 作り替え
			S 12019	5.6×5.1	円形	土器埋設炉 (正位+正位)	後期前葉	14基	伊と柱穴の 作り替え
			S 12025	4.8×4.6 (推定)	円形	立石+土器埋設炉 (中央+外位)	後期前葉	5基	
			S 12028	4×1.3	椭円形	立石	後期前葉	2基	
			S 12036	3.3×3.1	円形		後期前葉	5基	
			S 12134a	不明	不明	立石+土器埋設炉 (正位)	後期前葉		
			S 12134b	不明	不明	立石+土器埋設炉 (正位)	後期前葉		
			S 12134c	不明	不明	立石+土器埋設炉 (正位)	後期前葉		
			S 12158	5.6×5.1	円形	竪床炉3	後期	6基	
			S 12228	4(推定)×3.7	円形	土器埋設炉	後期前葉	5基	
			S 12303	3.6×3.1	椭円形	石圓炉 (円形)	後期前葉	4基 (主4基)	
			S 12338	4.3×4.2	円形		後期前葉		
			S 12344	5.8×5.3	円形	土器埋設炉 (正位+斜位)	後期前葉	6基	
			S 12374	4.5×4 (推定)	円形	土器埋設炉 (中央+外位+斜位)	後期前葉	5基	
			S 12376	4.5×4.2	円形	土器埋設炉 (中央+外位)	後期前葉	7基	
			S 12381	4(推定)×3.3(推定)	椭円形	石圓炉	後期前葉	6基	
			S 12484	不明	不明	土器埋設炉 (斜位)	後期前葉		
			S 12460	不明	不明	土器埋設炉 (正位+斜位)	後期前葉		
津下道路	左岸段丘 (L.1面)	135~ 140	S 1129	不明	不明	石圓炉+土器埋設炉 (方形)	中期中葉		大木8b?
			S 1168	椭3.54	円形又は椭円形	竪床炉	後期後葉	1基	十脚内4
			S 1169	3.6×3.42	円形		後期後葉		十脚内4
			S 1170	4.24×3.68	椭円形	石圓炉+鍬込炉	後期後葉	13基 (壁9基)	十脚内4

			S 1196	様3	円形又は楕円形	地床炉	後期中葉	4基	十間内3
			S 1204	楕3.76	楕円形	地床炉	後期中葉		
			S 1228	不明	不明	土器埋設炉	後期		
			S 1312	楕3.4	円形又は楕円形	地床炉	後期中葉		
			S 1313	不明	不明	石調炉	不明		
			S 1326	不明	不明	立石+土器埋設炉	後期前葉		
			S 1331	6.6×5.7	楕円形	立石+土器埋設炉2	後期前葉	7基	
			S 1332	不明	不明	立石+土器埋設炉	後期前葉		
			S 1333	不明	不明	立石+土器埋設炉	後期前葉		
			S 1335	不明	不明	石調炉(楕円形又は丸角楕形)	後期前葉		
			S 1353	不明	不明	立石+土器埋設炉	後期前葉		
			S 1355	3.35×1.60	楕円形?	地床炉	不明	4基	
			S 1403	不明	不明	石調炉(楕丸角形)	不明		
			S 1485	不明	不明	土器埋設炉	後期前葉		
			S 1524	不明	不明	土器埋設炉	中期前葉		上層c
			S 1531	不明	不明	土器埋設炉	後期		
			S 1903	不明	不明	土器片調炉	中期中葉		上層d~e
			S 1906	不明	不明	土器埋設炉	後期		
			S 1975	楕5.1	楕円形	地床炉	後期中葉	8基	
			S 11026	楕4	楕円形	地床炉	中期中葉		
			S 1106	4.12×3.08	楕円形	地床炉	中期中葉	17基	上層c
			S 108	3.46×2.78	楕円形	石調炉(土器埋設)	中期後葉		大木10
			S 109	5.40×4.15	楕円形	楕込炉	中期中葉	19基(±6基)	上層c
			S 112	4.42×3.29	楕円形	地床炉	中期前葉	15基(±5基)	上層b
			S 118	3.6×3.07	楕円形	地床炉	中期中葉	3基	上層c
			S 119	様3	円形	地床炉	中期中葉	11基(±4基)	上層c
			S 129	様3.6	円形	石調炉(方形)	中期後葉	9基(±5基)	
			S 139	様3.4	円形	石調+土器埋設炉	後期前葉	8基	
			S 146	3.8×3.33	楕円形	地床炉2	中期中葉	35基(±4基)	上層c
			S 150	5.08×4.75	楕円形	地床炉2	中期中葉	10基(±4基)	上層c
			S 153	4.40×3.4(確定)	楕円形	楕式炉(土器埋設+石組座+前庭部)	中期後葉	8基	上層後葉 複数個乳 大木9
			S 154	5.89×4.50	楕円形	地床炉	中期後葉	8基	
			S 158	3.92×3.43	不整楕円形	楕式炉(土器埋設+石組座+前庭部)	中期後葉	12基(±5基)	大木9
			S 190	3.06×3.54	不整楕円形	地床炉	中期後葉	8基(±5基)	大木8b
			S 1100	4.03×3.05(確定)	楕円形	石調炉(楕円形?)	中期後葉		
			S 1101	3.35×2.70	不整楕円形	地床炉	前期後葉	7基	下層d
			S 1107	6.20×4.68	不整楕円形	地床炉	中期中葉	17基(±4基 桿持2基)	上層c
			S 1110	3.14×2.58	不整楕円形	地床炉	中期中葉	14基(±4基 桿持10基)	大木8b
			S 1112	6(推定)×4.25	楕円形	地床炉2	中期中葉	10基	上層c
			S 1121	5.50×4.76	楕円形	石調炉(土器埋設炉(円形))	中期中葉	9基(±4基 桿持2基)	上層c
			S 1124	様3.90~4.00	円形	石調炉	中期後葉	7基	
			S 1127	4.40×4.00	不整楕円形	楕込炉	前期後葉	16基(±4基)	下層d
			S 1136	5.13×3.57	楕円形	地床炉	中期中葉	15基(±4基)	上層c
			S 1148	3.63×3.28	楕円形	地床炉	中期後葉	10基(±4基)	上層c
			S 1202	5.18×4.46	楕円形	地床炉	中期中葉	11基(±4基)	上層c
			S 1211	4.6(推定)×3.5(確定)	楕円形	地床炉	前期後葉	3基	下層d
			S 1270	3.50×3.10	楕円形	地床炉	中期中葉	4基(±4基)	上層c
			S 102	5.46×5.11	円形	石調炉(円形)	後期後葉	32基(±4基)	
			S 103	5.08×4.56	楕円形	石調炉(円弧)	後期後葉	39基(±4基 壁27基)	
			S 112	様4(確定)	円形	A複式炉(石組部+前庭部) B複式炉(土器埋設+石組部)	中期後葉	4基(±4基)	
			S 118	3.62×2.76	楕円形	地床炉	後期後葉	5基	
			S 119	5.24×4.12	楕円形	地床炉	後期後葉	8基	
			S 134	2.90×2.70	楕円形	石調炉(方形)	中期後葉	21基(±4基 壁11基)	
			S 136	5.16×4.02	楕円形	地床炉	後期後葉	6基	
			S 137	3.51×2.91	不整楕円形	石調炉(円形)	後期後葉	4基(±4基)	
			S 138	5.41×4.46	楕円形	石調炉(円形)	後期後葉	4基(±4基)	
			S 139	6.00×5.00	楕円形	石調炉(円形)増築前 地床炉増築後	後期後葉	10基(±4基)	
			S 140	6.64×5.88	楕円形	石調炉(円形)	後期後葉	36基(±4基 壁32基)	
			S 142	4.48×3.31	不整楕円形	地床炉	後期後葉	1基	
			S 143	3.6(4.6)×3.48	円形	地床炉	後期後葉	2基	
			S 144	5.90×5.44	楕円形	地床炉	後期後葉	8基	
			S 101	5.8×4.9	楕円形	A複式炉(土器埋設+石組部)	中期後葉	18基(±4基)	
			S 102	4.0×3.48	楕円形	地床炉	後期後葉	8基(±4基)	
			S 103	4.31×4.17	楕円形	地床炉	後期後葉	6基(±4基)	

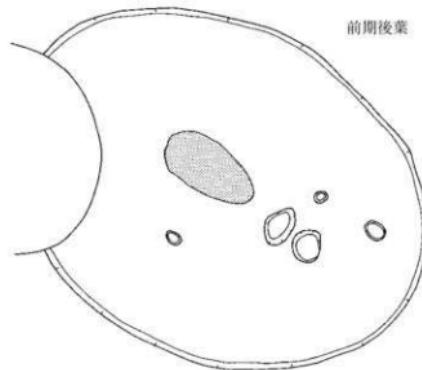
		S 105	坪4	円形	竪床炉	不明		
		S 110	3.82×3.50	円形	竪床炉	後期後業	10基	
		S 112	4.56×3.79	楕円形	竪床炉	後期後業	9基	
		S 115	3.56×3.06	円形	竪床炉	中期以降	7基	
		S 120	5.56×4.82	楕円形	竪床炉	中期以降	11基 (主4基)	
		S 126	4.00×3.6	楕円形	上層埋設炉	後期前業	3基 (主3基)	
		S 134	3.48×3.16	楕円形	竪床炉	後期前業	10基	
		S 135	3.4×3.0	楕円形	石岡炉 (円形)	後期前業	6基 (主4基)	
		S 137	4.70×4.24	円形	竪床炉	不明	11基	
		S 138	4.30×3.95	円形	竪床炉	不明	11基	
		S 139	4.02×2.90	楕円形	竪床炉	不明	9基	
		S 140	5.13×4.64	楕円形	竪床炉	不明	9基	
		S 154	3.40×2.98	楕円形	竪床炉	後期後業	9基	
		S 175	4.69×4.00	楕円形	石岡炉 (円形)	後期後業	4基	
		S 182	径4 (推定)	円形	竪床炉	中期後業	7基 (主4基)	
		S 183	3.53×3.06	楕円形	竪床炉	中期中業	4基 (主4基)	
		S 192	80厘米2 (60推定)	柱根円形	竪床炉	中期以前	6基 (主6基)	
		S 195	4.76×3.95	円形	竪床炉	後期後業	6基 (主5基)	
		S 196	3.13×3.00	円形	竪床炉	中期後業	4基 (主4基)	
二重島G遺跡	左岸 台地	156~ 164	S 101	4.80推定 (3.77推定)	楕丸方形	竪床炉	中期前業 ～中期	5基 (主4基) 上層c ~ d
			S 106	4.07×3.67	楕円形	竪床炉	不明	5基 (主4基)
			S 128	3.94×3.16	楕円形	竪床炉	中期中業	29基 (主4基) 上層c
			S 133	3.88×3.25	楕円形	竪床炉	中期中業	17基 (主6基) 上層d
			S 1200	不明	複式炉 (上層埋設+石組部)	中期後業		大木9
向塚田A遺跡	右岸段丘 (L. 1面)	134~ 136	S 1190	3.46×3.56	楕円形	石岡炉 (方型)	中期末葉 ～後期初期	5基
			S 1291	輪4.63	不明	石岡炉 (コ字型)	多変形または円形	不明
			S 103	径3 (推定)	不明	複式炉 (土器埋設+石組部)	中期後業	大木10
向塚田D遺跡	右岸段丘 (L. 1面)	134	S 1112	径4	円形	石岡土器埋設設炉	後期中業	
		159	S 120	2.4×2.1	楕円形	竪床炉	後期	2基
向塚田E遺跡	右岸段丘 (L. 1面)	138	S 101	4.4×4.2	楕円形	なし	後期後業 ～既知初期	
			S 102	5.8×5	楕円形	なし	後期後業 ～既知初期	8基
森吉家ノ前 A道跡	右岸段丘 (L. 1面)	150	S 191	4.22×3.8	楕円形	竪床炉	不明	3基 (主3基)
			S 1120	13推定 (X推定)	楕円形	竪床炉2 + 複合炉2	前期 (後業)	13基 (主8基) 大型往來跡
			S 1218	不明	不明	石岡炉 (方型)	不明	14基
			S 1219	不明	不明	複式炉 (土器埋設+石組部+前庭部)	中期後業	15基 (主4基) 上層設置物
			S 1221	3.8×3	楕円形	複式炉 (石組部+前庭部)	中期後業	12基 (主4基) 鋼片織籠 ピット有り
			S 1224	不明	不明	上層埋設設	中期中業	
			S 1227	径4	円形	複式炉 (土器埋設+石組部+前庭部)	中期後業	8基 (主4基) 上層設置物
			S 1429	不明	不明	複式炉 (石組部+前庭部)	中期後業	大木10
			S 1430	径4.6	円形	複式炉 (土器埋設+石組部+前庭部)	中期後業	2基 (主2基) 上層設置物 想構を作つ
			S 1510	不明	不明	複式炉 (石組部+前庭部)	中期後業	6基
砂利遺跡	右岸段丘 (L. 1面)	194~ 196	S 190	5×4	楕円形	複式炉 (土器埋設+石組部+前庭部)	中期後業	2基
			S 194	径4~5 (推定)	楕円形	上層岡炉 (底部に礫を敷く)	後期後業	
深底遺跡	左岸段丘 (L. 1面)	180~ 190	S 195	3.3×3	不整な円形	なし	後期前業	6基
			S 1107	5.6×5.2	不整な楕丸方形	楕木棒のため不明	中期前半	
			S 15001 A	6.5×5	楕円形	竪床炉	中期	13基
			S 15001 B	不明	不明	竪床炉	中期	
			S 15003	坪4.5	円形	竪床炉	中期後業	4基 (主4基) 下解d
			S 15004	5×4.6	円形	竪床炉	中期後業	4基 下解d
			S 15005	5×4.5	円形	竪床炉	中期後業	4基 下解d
			S 15012	5×4.5 (推定)	円形	竪床炉	中期後業	4基 下解d
			S 15010	径3	円形	竪床炉	不明	
			S 15013	3.4×3	円形	複式炉 (土器埋設+石組部+前庭部)	中期後業	3基
			S 11012	楕円形	竪床炉	中期中業		下解a
			S 12001	径3.5	円形	複式炉 (土器埋設+石組部+前庭部)	中期後業	4基 魔術儀孔 大木10
			S 1266	円形	竪床炉	中期中業	壁柱穴	大洞B C ~ C:
			S 12004	円形	竪床炉	不明		魔術儀孔 大木10
深底A道跡	左岸段丘 (L. 1面)	180~ 190	S 129	径3	楕丸方形	複式炉 (石組部+前庭部)	中期後業	



第2図 縄文時代の竪穴住居跡を検出した遺跡の標高

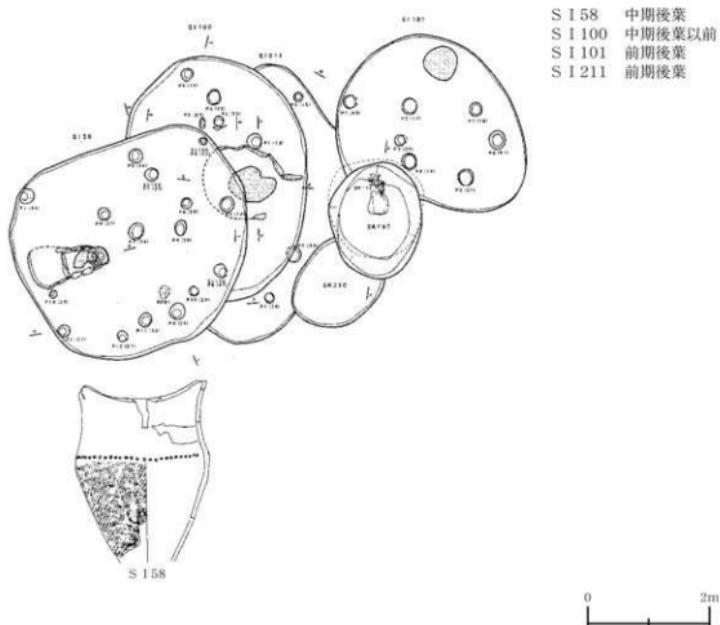
前期

日廻岱B S I 1105



前期後葉

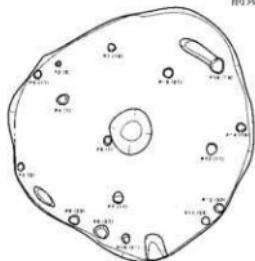
二重鳥C S 158・100・101・211



第3図 検出された竪穴住居跡(1)

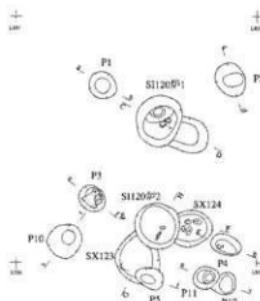
二重鳥C S I 127

前期後葉



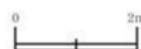
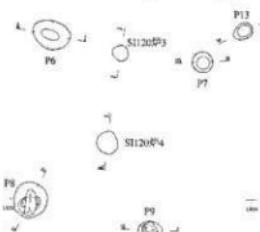
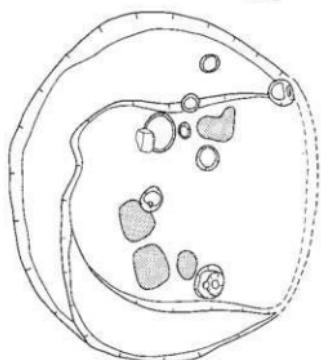
森吉家ノ前A S I 120

前期（後葉）



日廻岱B S I 2158

前期

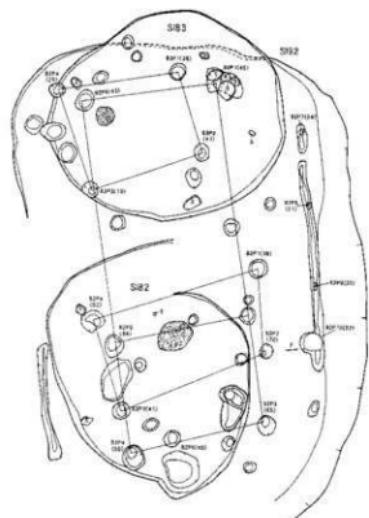


第4図 検出された竪穴住居跡(2)

中期

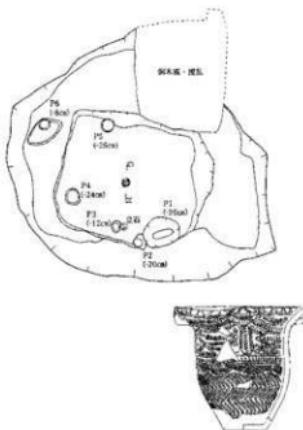
二重鳥E S I 82・83・92

S I 82 中期前葉以降
S I 83 中期中葉
S I 92 中期以前



桐内沢 S I 05

中期前葉



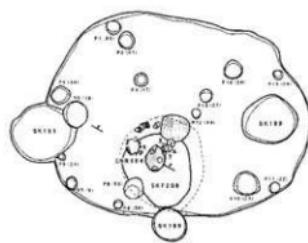
漆下 S I 524

中期前葉



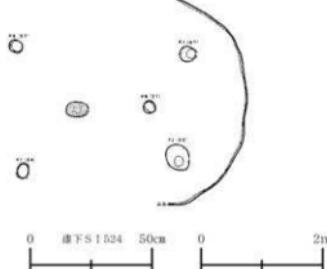
二重鳥C S I 12

中期前葉

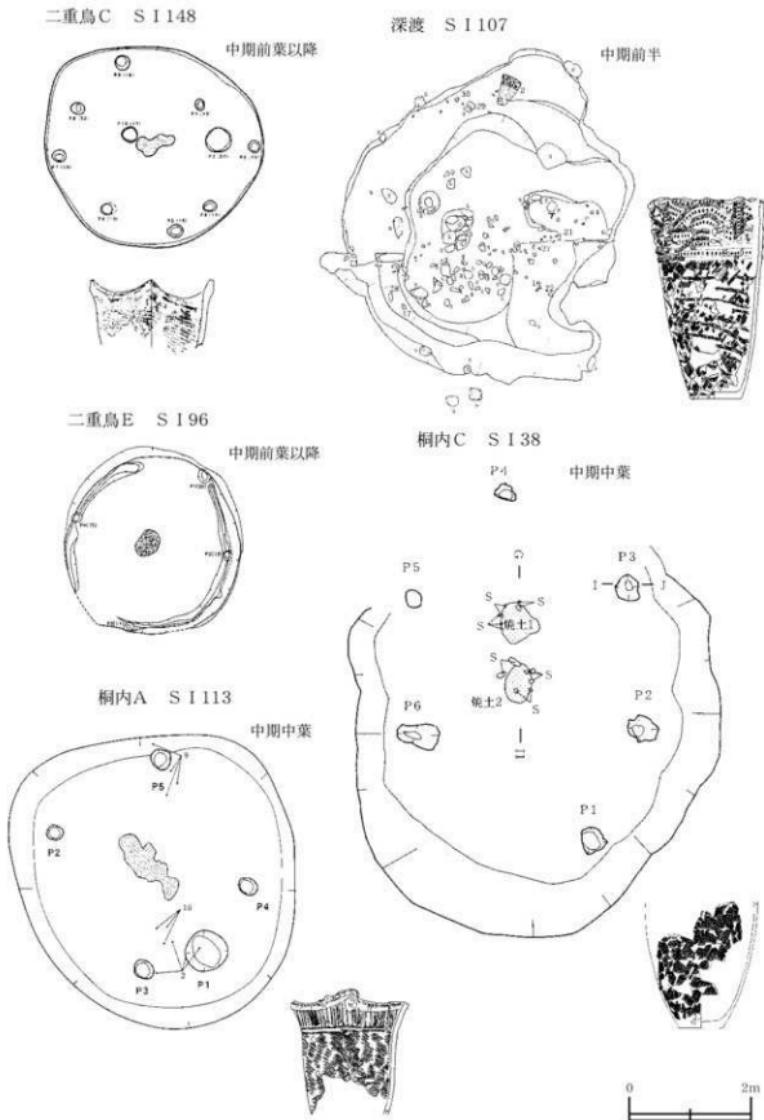


二重鳥G S I 01

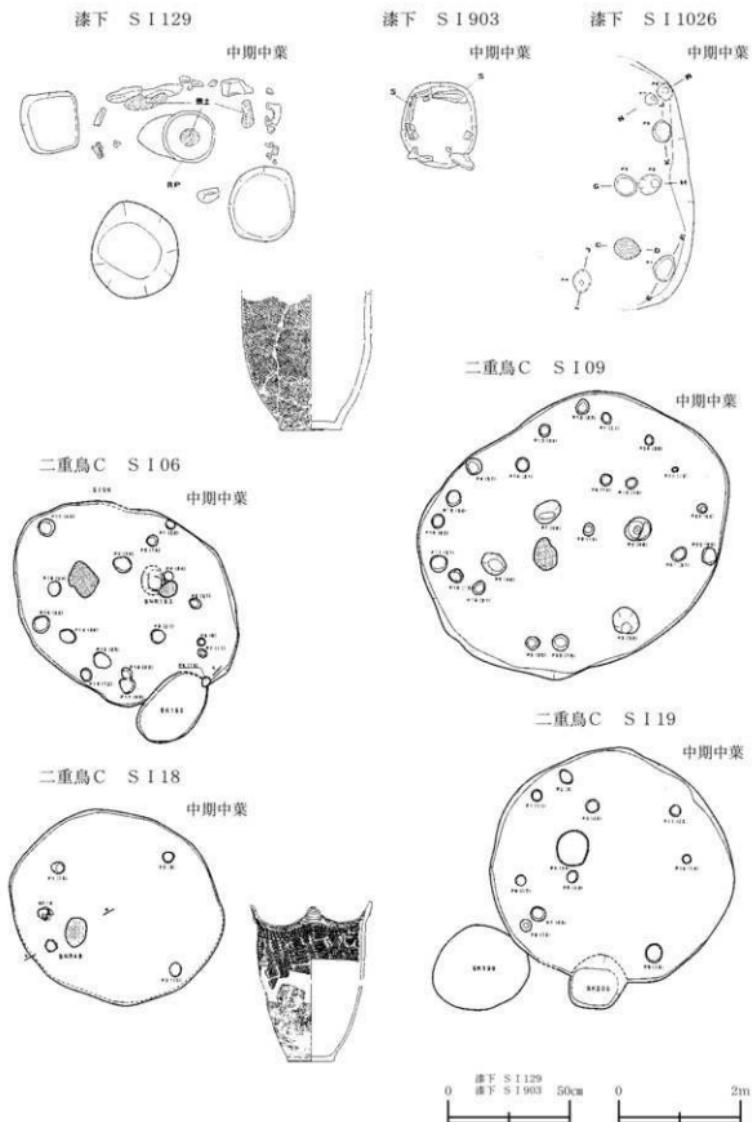
中期前葉～中葉



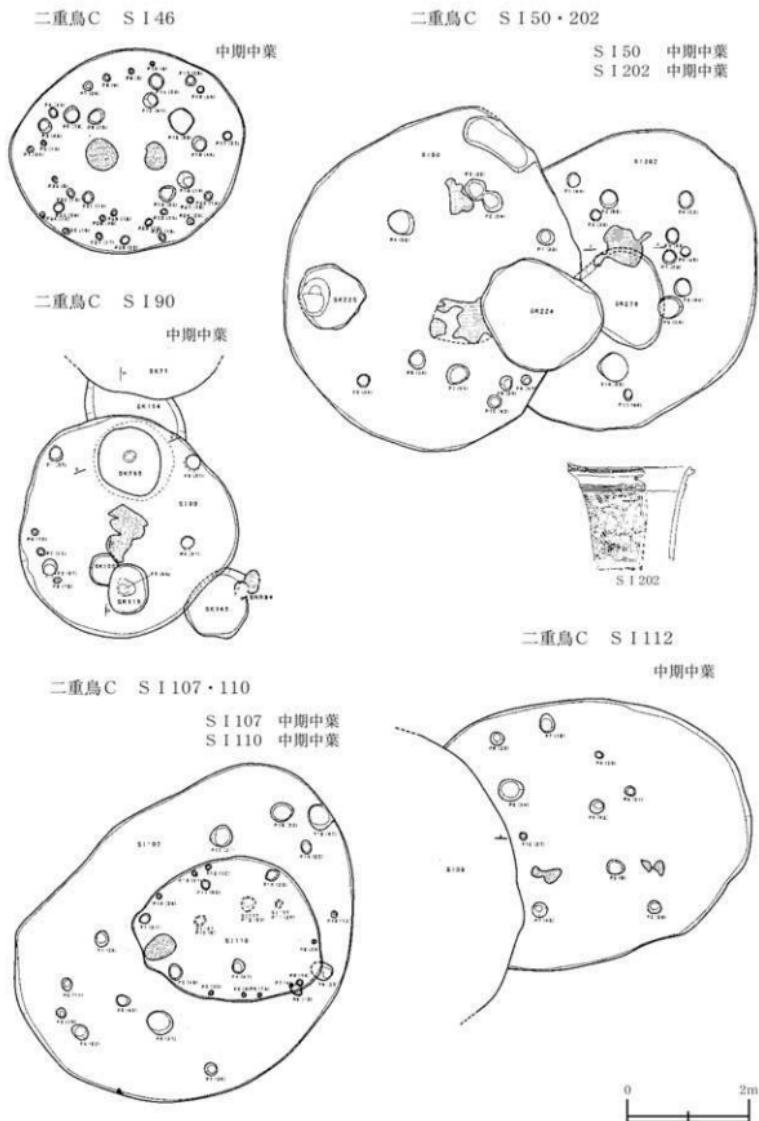
第5図 検出された竪穴住居跡(3)



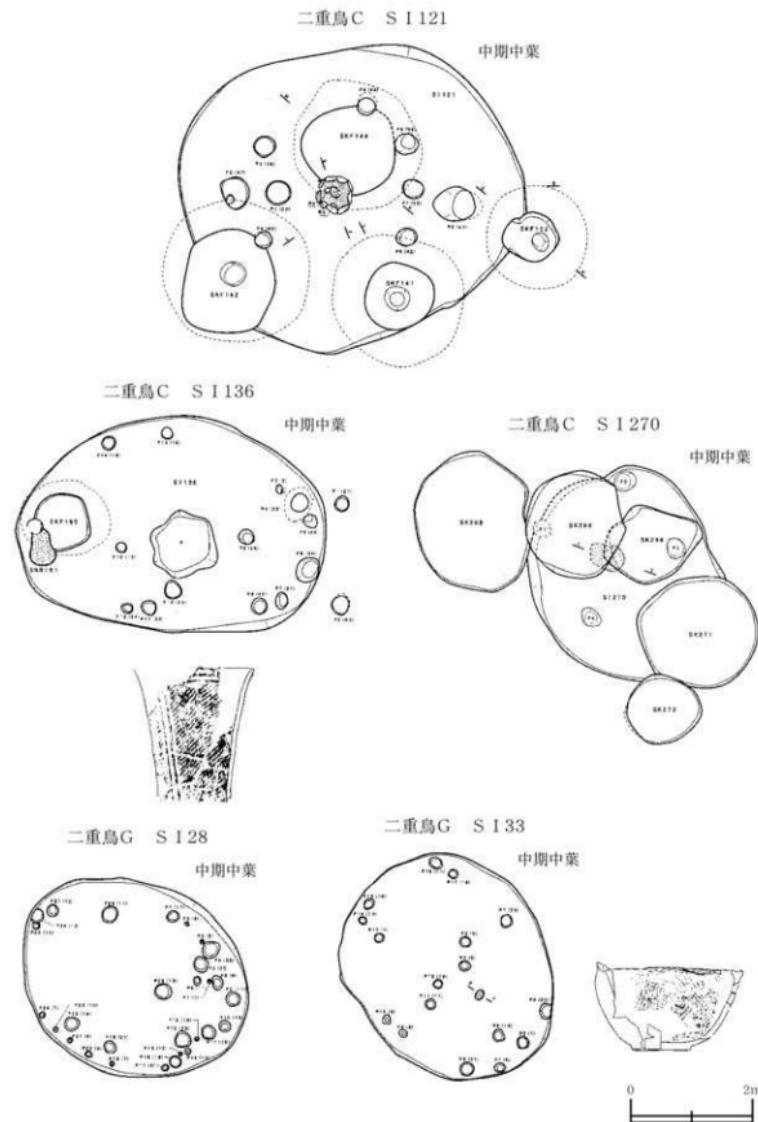
第6図 検出された竪穴住居跡(4)



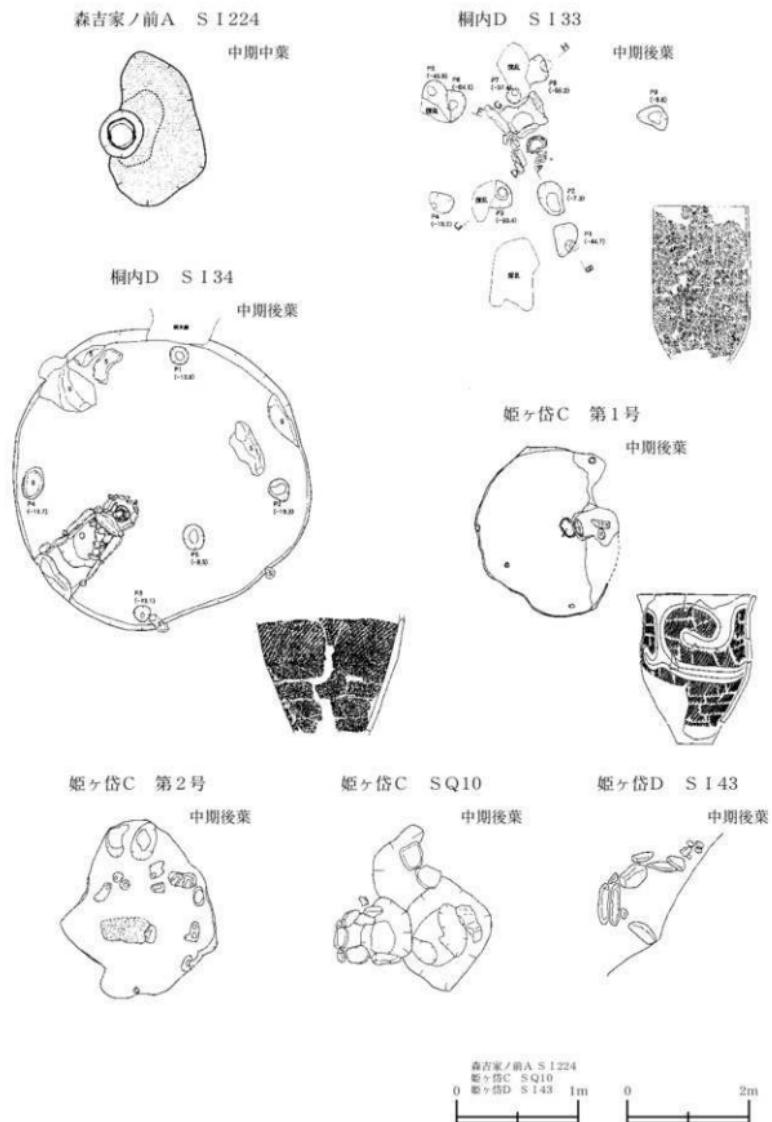
第7図 検出された竪穴住居跡(5)



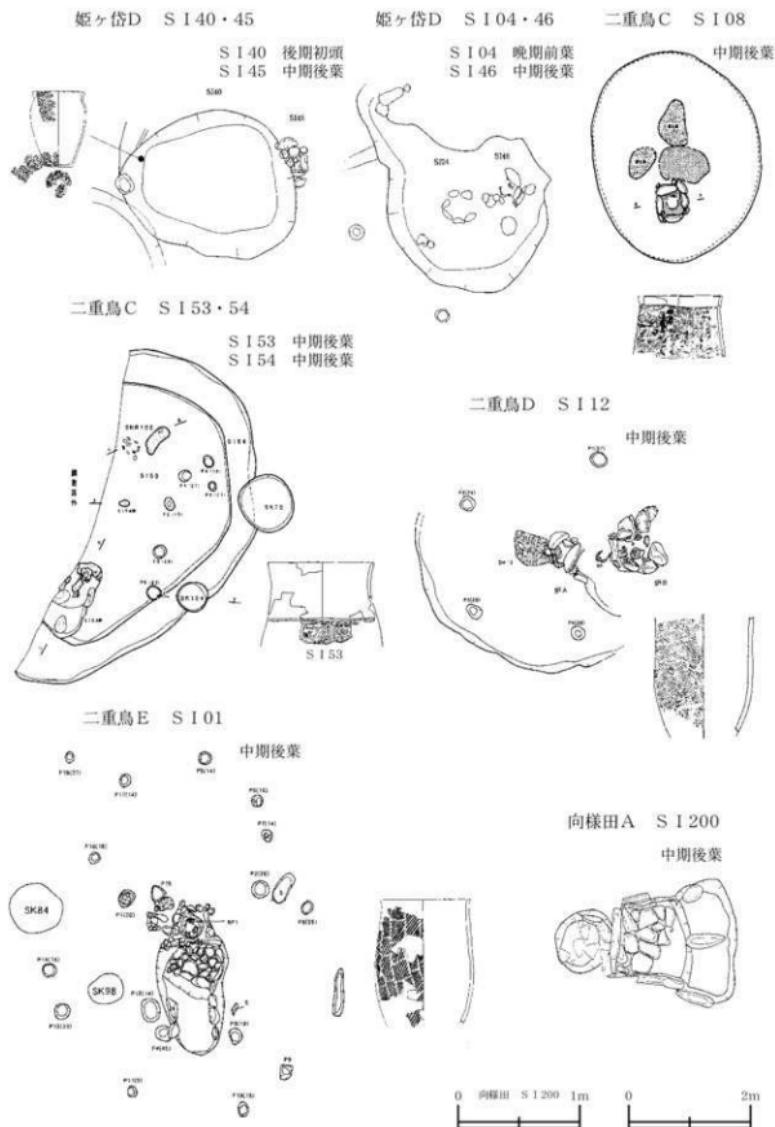
第8図 検出された竪穴住居跡(6)



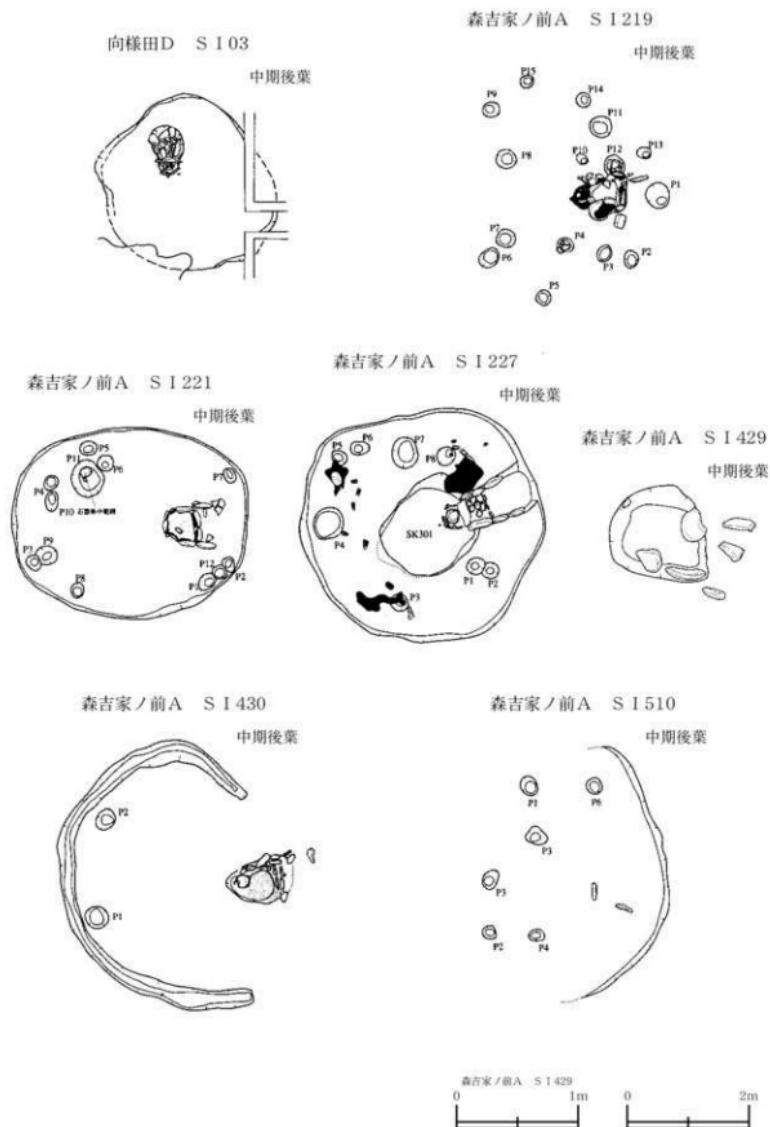
第9図 検出された竪穴住居跡(7)



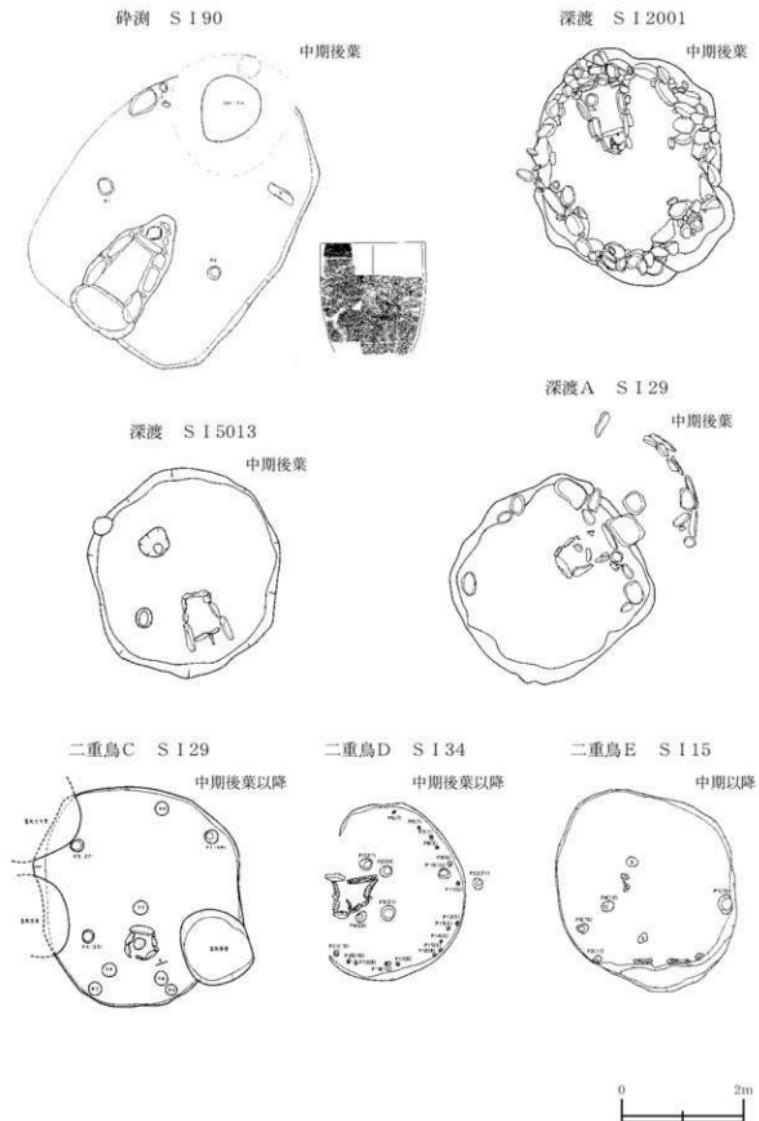
第10図 検出された竪穴住居跡(8)



第11図 検出された竪穴住居跡(9)



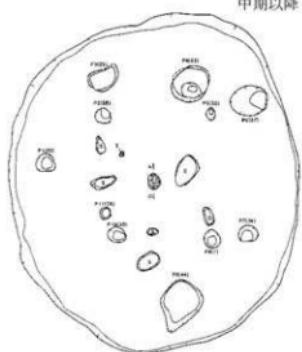
第12図 検出された竪穴住居跡(10)



第13図 検出された竪穴住居跡(1)

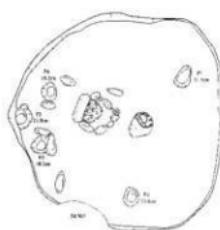
二重鳥E S I 20

中期以降



向様田A S I 190

中期末葉～後期初頭



姫ヶ岱C 第3・4号

第4号



第3号 後期初頭

第4号 後期初頭



第3号



第14図 検出された竪穴住居跡(12)

3 考 察

小又川流域に分布する61遺跡のうち、約20遺跡で縄文時代前期の遺物を出土しているが、竪穴住居跡を検出した遺跡は小又川左岸に位置する日廻岱B遺跡2軒、二重鳥C遺跡3軒、深渡遺跡7軒、桂の沢遺跡1軒と右岸に位置する森吉家ノ前A遺跡1軒の5遺跡だけである。二重鳥C遺跡以外は今から2~3万年前に発達した段丘上に立地する。遺跡の標高は桂の沢遺跡の約100m~碎済遺跡の約190mの間であり、遺跡の位置と立地からは特徴的なことは見いだせない。

検出した住居跡はすべて円筒下層a式期以降の住居跡である。平面形は円形又は梢円形を基調としており住居内に地床炉をもつ。住居の規模は、森吉家ノ前A遺跡の大型住居跡や、小型の住居跡が多い二重鳥C遺跡などで特徴が見られる。

森吉家ノ前A遺跡S I 120は削平を受けており平面形は不明であるが、検出した柱穴から平面形を想定すると、長軸12m×短軸5m程の長梢円形を呈する。住居北側の一部に周溝が巡り長軸方向に柱穴が2列並ぶ。住居中央部には長軸方向に掘込炉2基と地床炉2基が等間隔に並んでおり、いわゆる「ロングハウス」と考えられる。前期の遺構は本遺構だけであるが、遺跡内の小さい沢に前期後葉の小規模な捨て場があり、本住居の構築時期は捨て場と同時期と考えられる。一般的に「ロングハウス」と総称される遺構の機能については、「集会所・公民館説」、「祭祀遺構説」、「共同作業所説」など^(註5)が考えられている。本遺跡内又は近隣の遺跡では前期の竪穴住居跡が検出されていないこと、捨て場から出土している土器はほとんどが破片であり、葬送儀礼に使用した土器とは考えにくいこと等を踏まえて、「ロングハウス」と考えられる本遺構の性格について検討する必要がある。なお、本遺跡は未調査区部分があり今後の発掘調査でさらなる解明を期待したい。

小又川流域における前期の様相は、2・3軒程度で小規模な集落を形成していたと言える。ただし、上記のS I 120の存在から、何らかの機会に、それぞれの小集落から「ロングハウス」と呼ばれている大型住居に集まり、何かをしたのだろうか。検出した竪穴住居跡からは大木式土器を共伴しておらず、大木文化圏の影響はほとんど受けっていない。竪穴住居は地床炉を有しており、前期中葉には地床炉が屋内炉として定着している。ただし、漆下遺跡では円筒下層a式土器を埋め込んだ土器埋設炉を2基検出している。周りに柱穴が検出されないので屋外炉と考えているが、いずれにせよこの時期には土器埋設炉が出現する。

中期の遺物は約30遺跡で出土されており、竪穴住居跡も小又川左岸で12遺跡、右岸で6遺跡検出されている。ほとんどの遺跡が2~3万年前の段丘上に立地するが、22軒の竪穴住居跡がまとまって検出された二重鳥C遺跡や二重鳥D・E・G遺跡はこの段丘面より約30m高い台地上に立地する。

二重鳥C遺跡、桂の沢遺跡を除くと各遺跡とも検出された住居跡は1~数軒で、前期同様に小規模な集落を形成していたことが分かる。検出した前葉の住居跡は5遺跡で6軒、中葉の住居跡は8遺跡で24軒、後葉の住居跡が14遺跡で39軒と後期に近づくにつれ生活の場が広範囲になってきている。

住居の平面形は前期同様に円形又は梢円形を基調としており、住居跡の規模も各遺跡ごとや各時期ごとに特徴的な差異は見られない。これに対して、住居に伴う炉の形態は変容していく。前葉→中葉では地床炉を伴っている住居跡が多く、当該地域においては縄文時代前期から中期中葉まで一般的に地床炉が普及していることが分かる。軒数は少ないが、円筒上層c式期になると、桐内沢遺跡や漆下遺跡で土器埋設炉を伴う住居跡が検出されており、中葉になると土器埋設炉や石圓土器埋設炉・土器

片圓炉を伴う住居跡が見られる。これらのうち、漆下遺跡では土器埋設炉、石圓土器埋設炉、土器片圓炉が検出されており炉の形態がバラエティに富む。二重鳥C遺跡 S I 121の石圓土器埋設炉は河原石を円形に配している。このように石圓炉に使われる礎は、中期後葉の石圓炉や複式炉でも基本的に河原石を使用している。そのため、方形を基調としても実際は隅丸方形を呈する。これに対して、漆下遺跡 S I 129の石圓炉は、薄く割れた緑色の凝灰岩を長方形に組んでいる。この凝灰岩は小又川流域で結構見られる礎で特別珍しいものではない。中葉になると円筒式土器とともに大木式土器を出土する遺跡が多くなる。大木文化圏では、大木8a・8b式期になると長方形石組炉や一部土器片圓石組炉、長方形石組炉の底部に石敷を行ったものが知られている。漆下遺跡 S I 129の石圓土器埋設炉や、円筒上層d・e式土器で構築されているS I 903の土器片圓炉は、円筒文化圏とは系譜の異なる大木文化圏の影響を受けているものと考えられる。

後葉になると複式炉が圧倒的に多くなる。複式炉の形態は、土器埋設+石組部+前庭部、土器埋設+石組部、土器埋設+前庭部、石組部+前庭部と多様になる。全体的には土器埋設+石組部+前庭部で構築する複式炉が約半数を占めている。この形態の複式炉を構築する住居は、大木9式期が3軒、大木10式期が3軒である。複式炉を構築する住居跡を6軒まとめて検出した森吉家ノ前A遺跡の炉の形態を見ると、土器埋設+石組部+前庭部で構築するものが3軒、石組部+前庭部で構築するものが3軒である。このうち時期が判明している住居跡は大木10式期に構築されたS I 227のみであり、残念ながら他の住居跡の炉体土器からは詳しい時期は決定できない。

土器埋設部の形態は、石圓を伴わないと伴うもの、石圓の代わりに土器片圓をしているもの、土器を正位に埋設するものと斜位に埋設するもの、また土器の半分を埋設するもの、底部を打ち欠いているものと打ち欠いていないものなどバラエティーに富む。石組部も、前庭部と仕切りをもつものともないもの、底面に礎を敷くものと敷かないものが見られる。中村良幸氏によると、岩手県北部では、大木8b式期に石圓土器埋設炉が大型化し、住居の壁寄りに構築される。大木9b式期になると石組炉+(a掘り込み部、b石組部)、石組炉+石組炉+(a、b、c施設なし)が多くなるという。また、県中央部では、石圓土器埋設炉、地床炉、土器埋設石組炉の順で作られており、大木8b~9a式期に祖型的な形が現れ始めたと見ている。そして、大木9b~10古式期になると石組炉+石組炉、土器埋設+石組部の形態が一般的になる。さらに、終末になると、石組部の一部をあけて土器を斜位に埋設する形態が多くなるという。^(註6)

複式炉における各部分の機能については次のような説がある。土器埋設部は、「オキを入れておいた火壺」、「オキを移して煮沸する炉」、「肉魚類を調理した場所」等である。石組部は、よく火が焚かれた場所であり、煮沸・照明・暖房等の「焚火炉」と考えられている。前庭部は、「石組炉の焚口」、「住居の入り口」、「火による祭祀の場」等があげられる。森吉家ノ前A遺跡では、石組部の方向に傾けた埋設土器が2基検出されている。埋設土器を使って肉魚類を調理するとすれば、斜位になっているのはあまり都合がよいとは思われない。むしろ前庭部の方向からオキ等を入れるには都合がよい。斜位埋設炉をもつ2軒の住居のうち、1軒には住居外側に周溝が巡る。排水のための周溝と考えられるが、複式炉の前庭部側は周溝がとぎれる。このことより本住居の入り口は複式炉の前庭部側にあると考えられ、前庭部が入り口に当たる可能性もある。当該地域における複式炉を有する住居跡の検出は20数軒であり、炉の形態や詳しい構築時期がはっきりしない住居も多い。今後検出される住居跡

と、より広範囲の米代川流域の住居跡も含めて比較・検討し、複式炉の形態の変遷、機能等を考えていかなければならぬ。

今年度深渡遺跡と隣接する深渡A遺跡で注目すべき住居跡が検出された。深渡遺跡 S I 2001は径3.5mの円形を、深渡A遺跡 S I 29は径3 mの隅丸方形を呈し、どちらも複式炉を伴っている。2軒とも30~50cm程の大きい円形な礎を壁際に埋め込んだ状態で検出された。S I 29の北東側には、礎が住居跡より一回り大きく弧状に巡り、一部2重になっている。調査より、壁際に配された礎は住居構築時に伴うものではなく、住居を埋め戻したときに配したことか確認されている。S I 2001の複式炉は、前庭部の壁際に接する部分を石積み状に構築している。このような形態の前庭部は他の複式炉では見られない。S I 29は前庭部に並んで壁際に2個の礎を突き立てている。2個の礎の間には扁平な河原石を置いており祭壇のようになっている。どちらの複式炉にも焼土はほとんど見られることより、これらの住居を埋め戻す前に、まず炉の中の焼土をきれいに搔き出している。S I 29は炉の焼土を搔き出した後、住居に火をつけて燃やしている。そして、どちらの住居も壁際に礎を配しながら埋め戻したと考えられる。このように礎を配する廃絶儀礼を行った住居跡は他の遺跡では1軒も検出されておらず、一般的な住居というより祭祀的な関連施設だったのかもしれない。また、家長が亡くなって住居を墓に転用した廃屋墓の可能性もあるか。この2軒の住居に共伴する土器は大木10式土器であり、漆下遺跡で多数検出している後期前葉に構築される配石遺構の祖型と見ることができるだろう。他にも廃絶儀礼を行っていると考えられる住居跡が二重鳥C遺跡で1軒検出されている。この住居跡はS I 53で、複式炉の埋設土器の中に石組部で使用したと考えられる角状の礎を入れている。住居の構築時期は大木9式期であり、前述した2軒の住居より旧い。

姫ヶ岱C遺跡で検出された第2号住居跡の炉は、地床炉に立石が伴う。共伴する遺物よりこの住居の構築時期は大木10新式期である。日廻岱B遺跡と漆下遺跡では埋設土器に立石を伴う形態の炉をもつ後期前葉の住居跡が多数見つかっている。埋設されている土器は十腰内I式土器より古い土器であり、複式炉→立石+地床炉→立石+土器埋設炉の変遷が考えられる。なお、後期以降の竪穴式住居跡に関しては次稿で詳しく記載する予定である。

終わりに

縄文時代の竪穴住居跡を論することは、縄文時代の集落について論ずることにもつながる。遺跡の分析は地形との関係や遺跡相互間の関係を比較検討することが大切になる。ダム工事に関連する発掘調査は、道路建設に関する発掘調査と異なり広く面的にに行うことが出来る。小又川流域に分布する遺跡の中には、本来同一の遺跡でありながら現在の道路や水田の区画によって遺跡名が分かれている場合もある。周辺地形との関連や、標高、比高、面積等の立地分析、遺跡の時期や性格等を考慮し遺跡のとらえ直しが必要である。小又川流域に分布する遺跡の多くはかつて水田として利用されていた。昭和40年代のは場整備の際に地山面まで削平されている遺跡が多く、検出した住居跡等も遺存状態が悪い場合が多い。本来竪穴住居跡であったものが削平のため検出できなかったケースや、台地縁辺部に構築された竪穴住居跡が長い間に崩落したもの、屋外炉としている遺構が本来は竪穴住居に伴うものであったことは十分に考えられるが、大集落という遺跡は見つかっていない。当該地域の縄文時代前期中葉から中期後葉までは数軒の小集落が分散して存在していたことが分かる。そんな中で、中期

の竪穴住居跡が30数軒検出された二重鳥C・D・E・G遺跡のある台地は比較的大きな集落であったのだろう。そして、この集落の人々は後期の前葉になると、この台地より一段低い段丘上の塗下遺跡や日廻岱B遺跡に移り住んだと考えられる。

註1 本稿ではなるべく多くの事例を取り上げたい旨から、現在報告書作成のための整理中の遺跡や今年度発掘調査した遺跡の竪穴住居跡も取り上げている。本稿での記述と相違のある場合は報告書が優先する。現在整理中の遺跡は、平成13年度調査を行った向様田D遺跡、平成14年度調査を行った日廻岱B遺跡・塗下遺跡、平成14・15年度調査を行った森吉家ノ前A遺跡、平成15年度調査を行った深渡遺跡、深渡A遺跡である。記載に当たっては、下記の方々から図面等の資料の提供、助言を頂いた。

向様田D遺跡 榎一郎氏 日廻岱B遺跡 榎一郎・菅野美香子氏 森吉家ノ前A遺跡 山本起嗣氏

深渡遺跡 榎一郎・菅野美香子氏 深渡A遺跡 菅原一彦・松尾睦子氏

なお、塗下遺跡については筆者が現在整理中である。

註2 小又川沿いの段丘面及び埋蔵文化財調査位置の標高分布図 森吉山ダム工事事務所 川村公一作成

註3 時期区分については、前葉、中葉、後葉を基本としたが、報告書で記載されているものについては基本的に報告書に準じた。

註4 「複式炉」という名称は当初土器埋設炉と石圓炉がセットになる炉であったが、本稿では、土器埋設+石組部+前庭部で構成している炉を標準とし、石圓の中に土器を埋設している炉は石圓土器埋設炉とした。

註5 中村良幸 「大型住居」『縄文文化の研究8 社会・文化』 雄山閣 1995(平成7)年

註6 中村良幸 「複式炉についてー岩手県を中心にしてー」『考古風土記 第7号』1982(昭和57)年

註7 丹羽茂 「福島県における縄文時代中期の住居・集落跡研究の現状と問題点」『福島考古第15号』 福島県考古学会 1974(昭和49)年

註8 梅宮茂 「複式炉文化論」『福島考古第15号』 福島県考古学会 1974(昭和49)年

註9 梅宮祐翁 「史学としての複式炉の命名とその展開」『論集しのぶ考古ー目黒吉明先生頌寿記念ー』 論集しのぶ考古刊行会 1996(平成8)年

文献

- 1 森吉町教育委員会 『平成9年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 上悪戸A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』 1998(平成10)年
- 2 森吉町教育委員会 『平成10年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 上悪戸B・C遺跡 姫ヶ岱A・B・C遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』 1999(平成11)年
- 3 森吉町教育委員会 『上悪戸D遺跡発掘調査報告書～北内森吉線地方道改良工事に係る発掘調査～』 1997(平成9)年
- 4 秋田県教育委員会 『桐内A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI－』 秋田県文化財調査報告書 第334集 2002(平成14)年
- 5 秋田県教育委員会 『桐内B遺跡・桐内D遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V－』 秋田県文化財調査報告書 第318集 2001(平成13)年
- 6 秋田県教育委員会 『桐内C遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書III－』 秋田県文化財調査報告書 第319集 2001(平成13)年

- 書 第299集 2000(平成12)年
- 7 秋田県教育委員会 『桐内沢遺跡・日廻岱A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VII－』 秋田県文化財調査報告書 第335集 2002(平成14)年
- 8 秋田県教育委員会 『姫ヶ岱C遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II－』 秋田県文化財調査報告書 第287集 1999(平成11)年
- 9 秋田県教育委員会 『姫ヶ岱D遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IV－』 秋田県文化財調査報告書 第300集 2000(平成12)年
- 10 森吉町教育委員会 『平成13年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 二重島C・G遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』 2003(平成15)年
- 11 森吉町教育委員会 『平成12年度 埋蔵文化財発掘調査報告書 二重島D・E・F遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』 2002(平成14)年
- 12 秋田県教育委員会 『向様田A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VI－ 遺構篇』 秋田県文化財調査報告書 第346集 2003(平成15)年
- 13 秋田県教育委員会 『向様田A遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書VII－ 遺物篇』 秋田県文化財調査報告書 第370集 2004(平成16)年
- 14 秋田県教育委員会 『向様田B遺跡 向様田C遺跡 向様田E遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書IX－』 秋田県文化財調査報告書 第347集 2003(平成15)年
- 15 秋田県教育委員会 『向様田F遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書X－』 秋田県文化財調査報告書 第348集 2003(平成15)年
- 16 森吉町教育委員会 『平成8年度 埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～』 1997(平成9)年
- 17 秋田県教育委員会 『砂利遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XI－』 秋田県文化財調査報告書 第349集 2003(平成15)年
- 18 秋田県教育委員会 『深瀬遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書I－』 秋田県文化財調査報告書 第286集 1999(平成11)年
- 19 秋田県教育委員会 『桂の沢遺跡－小瀬阿仁前田停車場線地方道改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査－』 秋田県文化財調査報告書 第247集 1994(平成6)年
- 20 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書 第267集 1996(平成8)年
- 21 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書 第270集 1997(平成9)年
- 22 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書 第281集 1998(平成10)年
- 23 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書 第291集 1999(平成11)年

百聞不如一見－伊勢堂岱遺跡の遺物－

五十嵐 一治*

はじめに

秋田県教育委員会は大館能代空港開設に伴なうアクセス道路整備のため、北秋田郡鷹巣町脇神地内に所在する伊勢堂岱遺跡の発掘調査を実施した。平成7・8年度の2ヶ年にわたる発掘調査で3基の環状列石を確認し、秋田県当局は平成8年11月に発掘調査の中止とアクセス道路の迂回および遺跡の現地保存を決定した。平成9年度からは鷹巣町教育委員会による詳細分布調査が始まり、遺跡の立地する台地全域について、利用状況等の把握および環状列石周辺の調査が進められた。その結果、県教委がボーリング調査を実施した環状列石Cの配石列を平成9年度に確認し、また環状列石Cから南南東に約20m離れて隣接する環状列石Dを平成12年度に確認した。そして平成13年1月29日に伊勢堂岱遺跡は国史跡に指定された。

伊勢堂岱遺跡における主要な構造は環状列石をはじめとする配石構造および土壙墓である。環状列石の成立とともに、祭祀の場が大型不整形の土壙墓から環状列石へと変遷するが、両者は時間的前後関係を有しながらも有機的なつながりを持つことが明らかになっている。

前述したように県教委の調査では3基の環状列石の存在を確認したが、環状列石Aは一部が調査区外北側に連続するものの、ほぼその全容を確認した環状列石である（ただし列石内の土坑のほとんどは、遺跡の保存決定により未調査のまま埋め戻した）。また列石を構成する礫の配置についても一部が大型不整形の土壙墓に接するように構築されていることが明らかになっている。

このように伊勢堂岱遺跡においては縄文時代後期前葉、環状列石構築前～構築後における墓域の変遷および構造内外からの遺物出土位置の検討から、従来「第二の道具」等と呼称されていた遺物群についても一定の出土傾向が存在することが明らかとなつた。

伊勢堂岱遺跡の本報告では編集の都合から写真図版を8頁しか掲載できず、数多くの遺構・遺物についても実測図しか提示できなかったことは断腸の思いであった。昨年・一昨年と、伊勢堂岱遺跡における墓域の変遷を考えるうえで重要な位置を占める土壙墓および環状列石の詳細について、図版解説により紹介した。今回は出土遺物、特に土器・土製品・石製品を取り上げ紹介する。なお掲載した写真は、切り抜き編集する前提で撮影した作業用写真をそのまま使用したため、背景や台座などの写り込みが生じており縮尺も不同であるが、容赦願いたい。

なお図版中の数字は、報告書中の挿図番号および遺物番号に対応する。

註1 鷹巣町教育委員会『伊勢堂岱遺跡詳細分布調査報告書』(1)～(4) 鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第4～7集 1998(平成10)～2001(平成13)年

同『伊勢堂岱遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 鷹巣町埋蔵文化財調査報告書第8集 2002(平成14)年

秋田県教育委員会『伊勢堂岱遺跡』 秋田県文化財調査報告書第293集 1999(平成11)年

註2 五十嵐一治『秋田県伊勢堂岱遺跡における墓域』『第20回記念シンポジウム発表要旨－北日本における縄文時代の墓制－』南北海道考古学情報交換会第20回記念シンポジウム実行委員会 1999(平成11)年

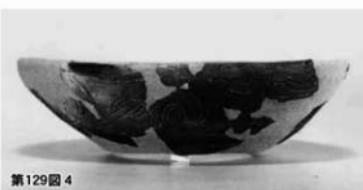
五十嵐一治『環状列石構築直前の土壙墓と祭祀関連遺物』 青森県考古学 第12号 2000(平成12)年

註3 五十嵐一治『百聞不如一見－伊勢堂岱遺跡の構造(1)－』 秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第16号 2002(平成14)年

同『百聞不如一見－伊勢堂岱遺跡の構造(2)－』 秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第17号 2003(平成15)年



第129図 1



第129図 4



第130図 4



第131図 1



第131図 1(2)



第131図 3



第132図 1



第133図 1



第133図 2



第134図 5



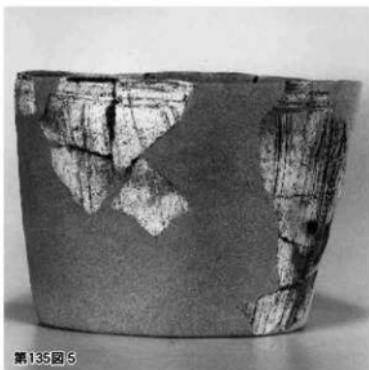
第134図 5(2)



第134図 8



第135図 3



第135図 5



第136図 1



第136図 4



第137図 1



第137図 4



第138図 3



第138図 4



第138図 5



第138図 5 (2)



第139図 1



第140図 1



第142図 1



第142図 3



第143図 1



第143図 2



第144図 3



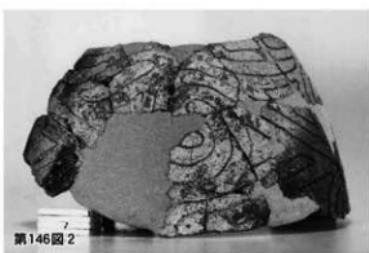
第144図 4



第144図 5



第145図 1



第146図 2



第146図 8



第147図 1



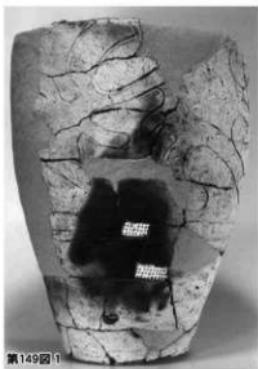
第147図 3



第147図 6



第148図 2



第149図 1



第149図 5



第151図 2



第151図 2(2)



第152図 1



第152図 3



第152図 4



第153図 1



第153図 5



第154図 3



第154図 5



第155図 1
(第156図 1)



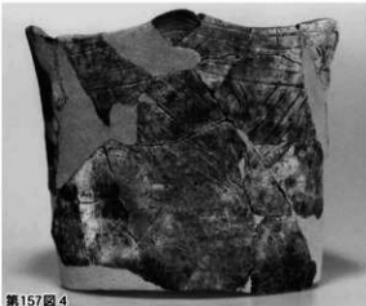
第155図 1(2)
(第156図 1(2))



第156図 2



第157図 3



第157図 4



第158図 2



第158図 2(2)



第159図 1



第159図 3



第160図 1



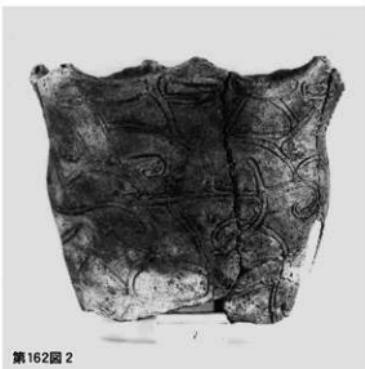
第160図 2



第161図 1



第161図 2



第162図 2



第162図 3



第162図 4



第162図 5



第163図1



第163図2



第163図4



第163図7



第164図1



第164図2



第165図 2



第166図 2



第166図 6



第166図 7



第166図 8



第167図 1



第167図2



第167図4



第168図4



第169図1



第170図2



第170図3



第170図 4



第170図 5



第171図 1



第171図 2



第171図 5



第171図 7



第172図 1



第172図 4



第172図 5



第172図 6



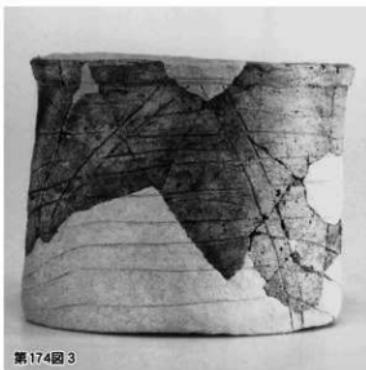
第172図 7



第173図 1



第174図 1



第174図 3



第174図 4



第177図 1



第177図 2



第178図 1



第179図 1



第179図 2



第180図 2



第182図 1



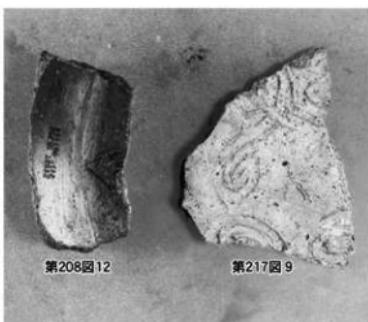
第182図 2



第209図 1

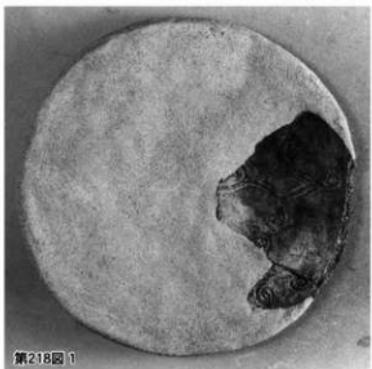


第209図 1(2)



第208図 12

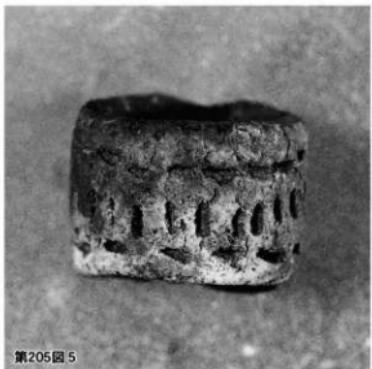
第217図 9



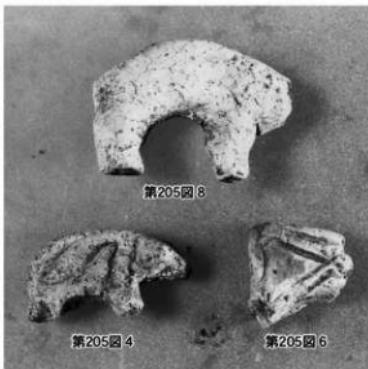
第218図 1



第218図 1(2)



第205図 5

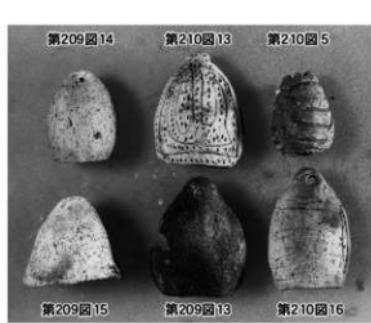
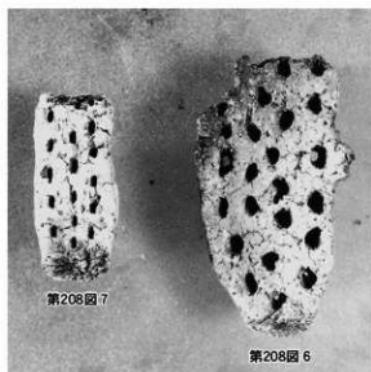


第205図 8

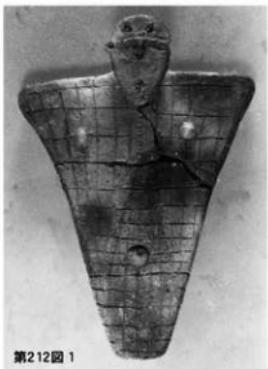
第205図 4

第205図 6

図版
20



第211図 6(2)



第212図 1

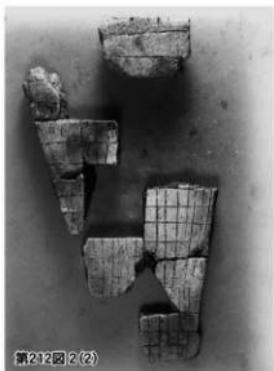
図版
21



第212図 1(2)



第212図 2



第212図 2(2)



第213図 3

第213図 5

第213図 1

第205図 2



第213図 8



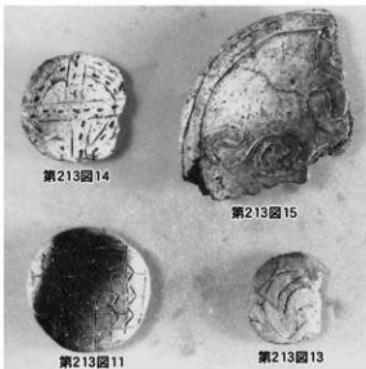
第213図 10



第213図 4



第213図 2



第213図 14



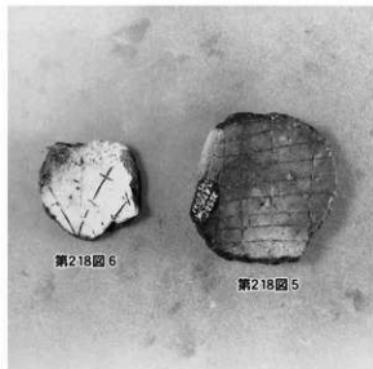
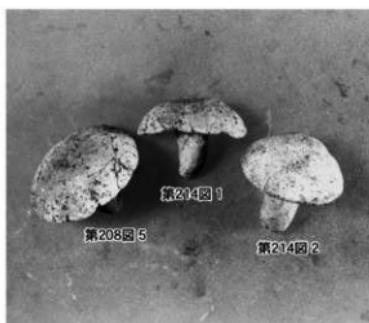
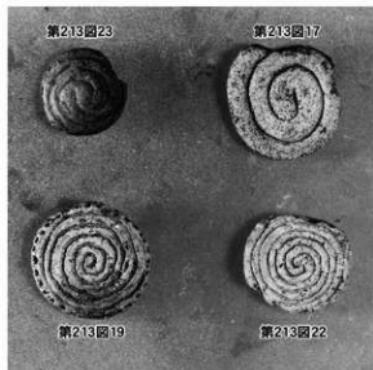
第213図 15



第213図 11



第213図 13





第244図 8



第245図 1

第245図 3



第248図 4



第249図 15

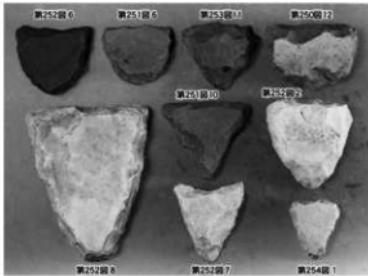
第249図 12

第244図 7

第249図 16



第250図 5



第252図 6

第251図 6

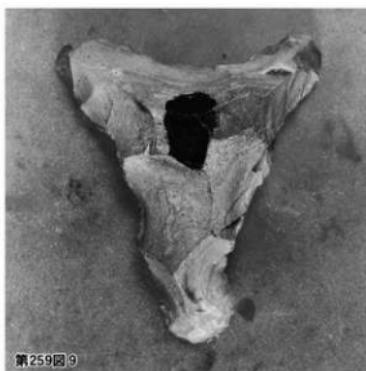
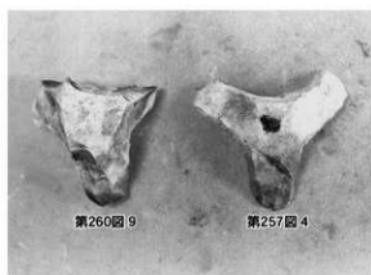
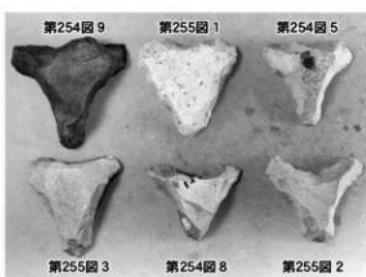
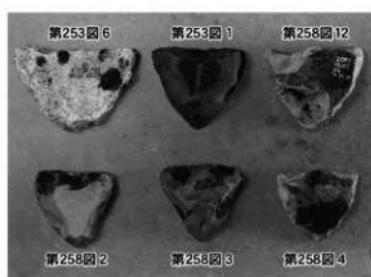
第253図 10

第254図 2

第252図 8

第252図 9

第254図 1



大曲市和合出土の墨書き土器 - 使用痕跡にも着目して -

高橋 学*

はじめに

秋田県埋蔵文化財センターでは毎年、当該年度に発掘調査した遺跡の成果を広く県民に知らせると共に、埋蔵文化財保護思想の普及をはかることを目的に『秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会』を実施している。平成14年度は大曲市中央公民館を会場とし、平成15年2月15・16日に開催された。その報告会の折り、大曲市和合在住の佐々木千代治さんが「いつ頃の土器で、何と書いてあるのか」と墨書き土器を持参された。本稿は、その際に持ち込まれた3個体の墨書き土器について紹介するものである。

1 遺跡の位置と遺物の概要

(1) 遺跡の位置

和合地区は大曲市の南東部に位置し、北側を仙北町、東側を千畳町、南側を六郷町と接する水田地帯である。資料は昭和30年代前半頃、佐々木さん宅所有の水田に樅架^{はさき}掛け用の穴を掘った際に3個体がまとまって出土し、その層準は「深かった」そうである。その他、共伴の遺物はなかったようである。同地区内には周知の遺跡は登録されておらず、新発見の遺跡となる。標高は30m程度である。

なお遺跡の西約1.3kmには1570年（元亀元年）に飛騨古川（現在の岐阜県吉成郡古川町）の匠、甚兵衛の作となる古四王神社（国重要文化財）が現存する。

(2) 遺物の概要

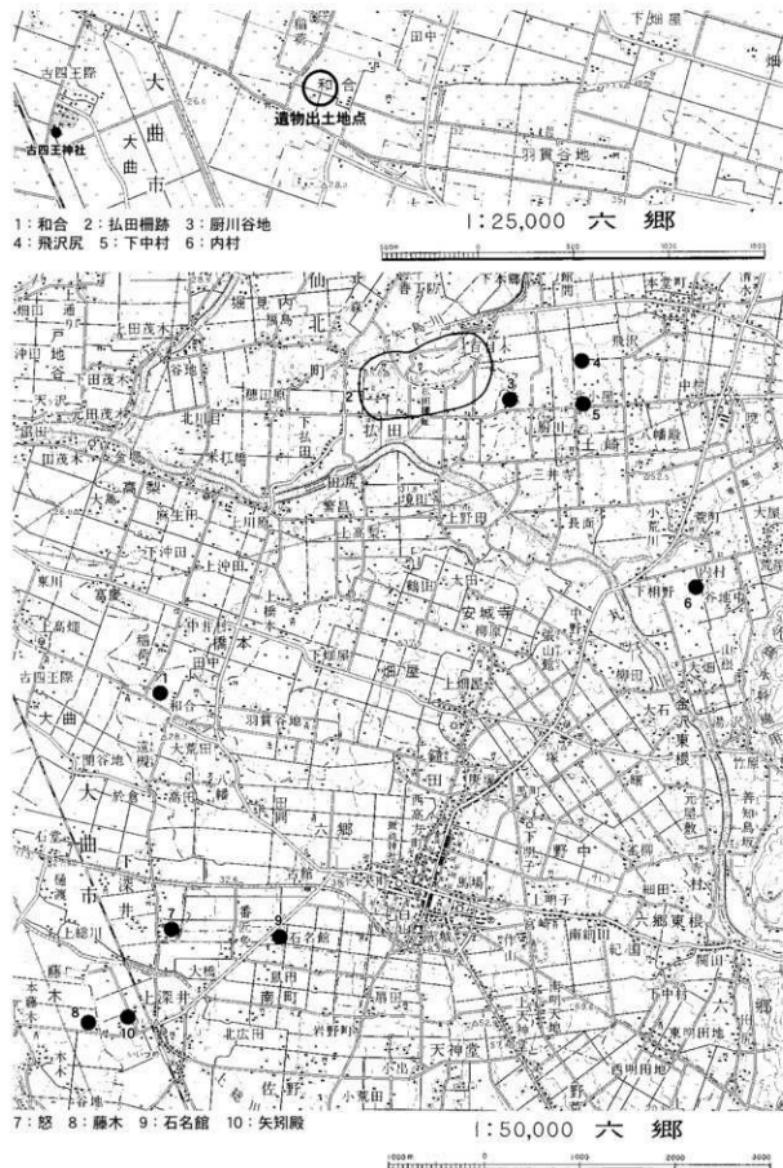
ここに紹介する3個体の土器は、全て須恵器耳であり、墨書きを有する。三者とも胎土に細砂粒を比較的多く含むものの焼成良好であり、色調は内外面共に灰色～灰白色を呈する。法量・底部切り離しは、第2図右下に一覧してあるので参照頂くこととし、その他の情報を示す。

1は体部正面に墨書きをもつ。2と同一字形となるが判読はできなかった。記号的な符号の可能性もある。内面には漆が付着（図のトーン部）しており、漆容器として利用されていたことが明確である。ただし、内面を観察すると器使用に伴う“擦れ”（磨耗痕跡）が顕著に認められることから、当初は通常の容器として使用していたものを、ある段階から漆容器に転用したと推測される。また口縁上部には“打ち欠き”痕が認められ、外面からの加撃による意図的な行為と見られる。その打点は明確でない箇所もあるが、図に▼で示したように少なくとも8度（a～h）にわたる加撃が円周の1/3強の範囲に連続してなされる。漆付着箇所での観察から、打ち欠き行為は漆容器として利用された後である。

2は底部に墨書きをもつ。1と近似した字形を記している。内面には暗褐色の付着物が認められ、あたかも柿渋を塗ったかのように見える。また器使用に伴うと思われる内面の“擦れ”も観察されるが、その痕跡は1ほど顕著ではない。さらに口縁上部に1箇所の打ち欠きが見られる（写真の▼箇所）。

3も底部に墨書きをもつが、1・2とは明らかに異なる字形となる。判読は不能である。内面には明確な“擦れ”的痕跡は認められない。口縁上部の打ち欠きは1・2と同様に観察され、円周の3/4程の範囲に少なくとも9度（i～q）の加撃を外面より施す。その使用工具は明確ではないが、○地点を見

*弘田樹跡調査事務所学芸主事兼調査班長



第1図 遺跡の位置と周辺の墨書土器出土遺跡

る限りにおいては、先の尖った釘状の工具を用いていた可能性が高い。また内面口縁端部には煤状付着物がわずかながら認められ、灯明行為に伴う痕跡と推測される。これは打ち欠き後の付着である。

2 墨書土器出土の意味するところ

わずか3個体の墨書土器である。いずれも判読はできず、しかも出土状況が判然としない不時発見遺物である。秋田県内の須恵器の編年^(注1)に照らし合わせると、これらは9世紀第2四半期頃に作られたと推測される。しかしこれ以上的情報は引き出せないかのようではあるが、3個体に共通して認められる打ち欠き痕の確認を取っ掛かりとして一步踏み込んだ推論を示したい。

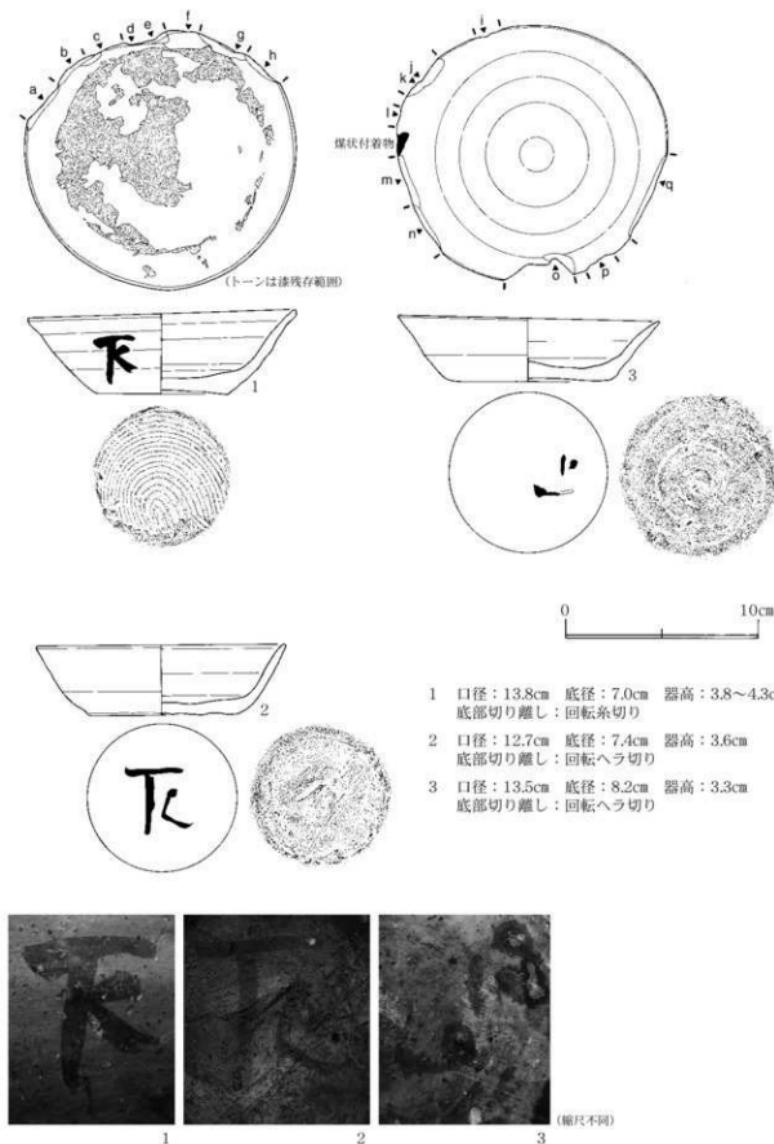
近年の古代土器研究の一つの視点として使用痕跡の観察が加わる。これは土器が消費地に運び込まれてから使用（あるいは使用のち転用）の後、遺棄（あるいは埋納）されるまでのいわば“土器の履歴”を器面観察により実施するものである。これには①付着物、②再加工・整形、③打ち欠き行為、④磨耗痕跡その他の要素が含まれよう。①には漆、墨、煤状炭化物、その他（柿渋状の付着物を含む）。②には坏類・蓋・甕を転用窓に再生、あるいは坏を皿に加工するという目的的行為、③には穿孔（底部あるいは胴部）、打ち欠きという本来的な機能を停止させる行為。④は日常的な使用に伴う磨耗、“擦れ”。その他には被然の有無や広義には墨書・籠書（焼成後）行為も該当する。それでは和合出土の3個体を使用痕跡の観察という視点で再度整理してみよう。

1・2は内面のほぼ全体に“擦れ”が認められる。これは日常的な使用に伴う、水洗い後の拭き取り痕と考えられる。逆に3は“擦れ”が見られないことから日常容器としては未使用（あるいは使用頻度が低い）だった可能性も推測される。1はその後、漆容器として転用され、最終的には意図的な打ち欠きがなされる。2も日常的な使用後、一箇所ではあるが打ち欠きが加えられる。3は1と同様に打ち欠きがなされ、その後に灯明皿としての使用が推測される。三者とも遺棄直前段階には器本来の機能が奪われた状態を見なすことができる。これらの意味することは、どのように考えればよいのであろうか。

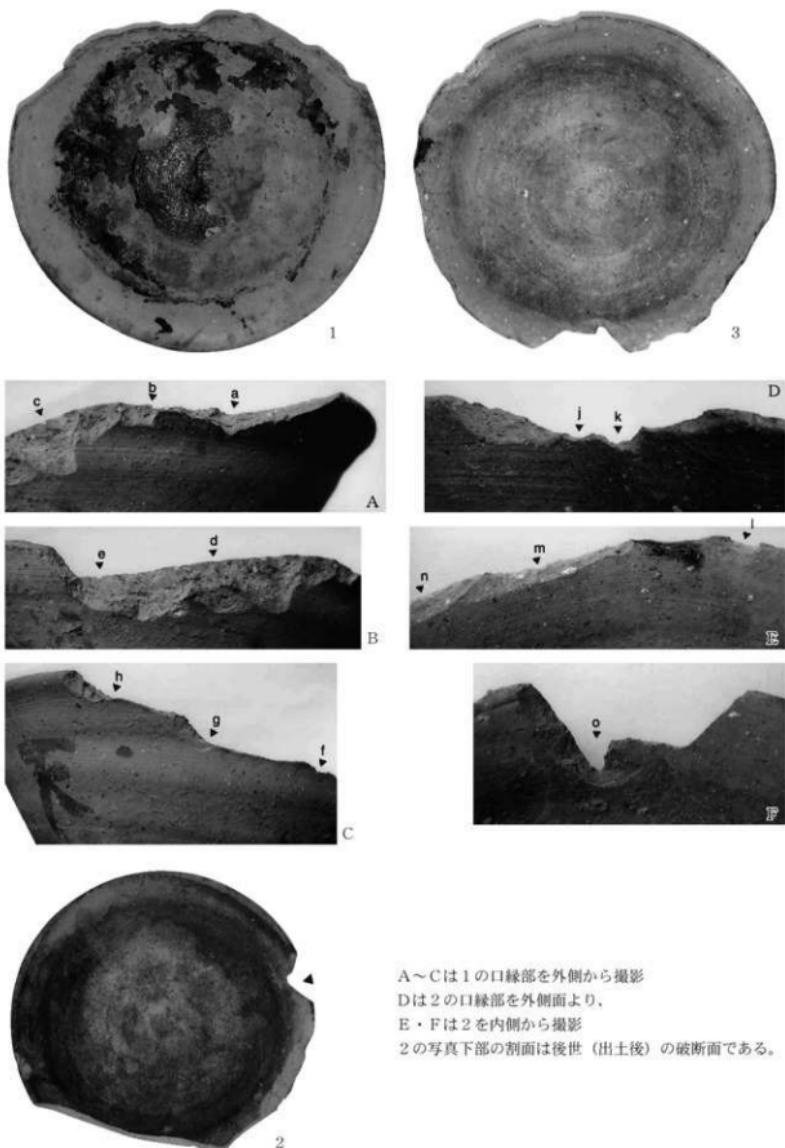
一つの鍵は、やはり払田柵跡（仙北町・千畑町）の存在に求めることができよう。和合の北東約4kmに所在する払田柵跡（第1図2）は、9世紀初頭に創建された出羽国の城柵官衙遺跡である。^(注2)ここでは柵内及び隣接する厨川谷地遺跡（千畑町、同3）で律令祭祀に係わる遺構・遺物が沖積地面から発見されている。特に厨川谷地は9世紀後半から10世紀前半代という時期ではあるが、約400点の墨書土器（「成」「冂」「几」「☆」「寺」「調酒」「硯」「万」「大」「毛」「東」など）と、意図的な打ち欠きや火の使用（灯明）痕跡を複合的に残す土器が数多く見いだされた。これら土器に対する二次的な作為は、祭祀儀礼に伴う何らかの証であり、出土位置・状態を考慮に加えると、厨川谷地は払田柵域における祭祀の場としての性格を占有する遺跡と判断される。^(注4)この遺跡の事例を引くとき、和合における3個体の須恵器も律令期における祭祀の遺物と推測ができるのではないか。

おわりに

和合周辺では第1図下図幅中に限ってみても、墨書土器を出土した古代遺跡が点在する。千畑町飛沢尻遺跡（4）・下中村遺跡（5）・内村遺跡（6）は、払田柵跡の東・南東側に位置し、厨川谷地を含め払田柵に関連する遺跡と想定される。飛沢尻・下中村は2002年に千畑町教育委員会が発掘調査



第2図 墨書須恵器実測図・墨書部位写真



A～Cは1の口縁部を外側から撮影
Dは2の口縁部を外側面より、
E・Fは2を内側から撮影
2の写真下部の剖面は後世（出土後）の破断面である。

写真 内面及び打ち欠き部の状況

した集落遺跡である。飛沢尻では「廣」、下中村では「具夫」銘の墨書き土器が出土した。内村は1980年に秋田県教育委員会が発掘調査した遺跡で、判読はできなかったが、厨川谷地と同類の「几」字形(呪い符号か)墨書き土器が出土している。^(註5)

また和合の南方にも4箇所の遺跡が集中する。大曲市怒遺跡(7)・藤木遺跡(8)、六郷町石名館遺跡(9)、仙南村矢矧殿遺跡(10)である。怒も和合同様の不時発見を端緒とするもので、現在36点(採集時には50点以上とされる)の墨書き土器が県重要文化財として保管されており、「福」「富」「伴」「川」「大」「足」「仙」「厨」「几」等の文字が判読される。藤木は怒の南西約1kmに位置し、水田の灌溉用溜池を浚渫した際に多くの墨書き土器が出土した。それは全て「伴」と記され、「伴」以外は見られなかつたと1912年(大正元年)の記録が残る。現在遺物の所在は不明である。その後、同地区ではほ場整備事業に伴う発掘調査が1980年に実施された。この時には37点の墨書き土器が出土し、判読できるものは「田」が1点、残りは全て「伴」であった。石名館は縄文時代晩期の遺跡として周知されるが、古代の遺物も出土している。1983年の秋田県教育委員会による発掘調査では「田」の墨書き土器が出土し、採集品ではあるが鳥の絵が描かれた坏形土器(須恵器)も見つかっている。矢矧殿は2001年に仙南村教育委員会が発掘調査を実施し、「吉」「方」の墨書き土器や凝灰岩製の小型の岩偶も出土している。^(註6)^(註7)

和合での祭祀を想起させる墨書き土器の出土を受け、払田柵周辺域とは異なる、例えば怒・藤木・矢矧殿周辺域における未知なる官衙関連遺跡が眠っている可能性が高まつたと推論することは早急であろうか。

末筆ながら、土器を持ち込まれ紹介する機会を与えていただいた佐々木千代治氏と、本稿で紹介した墨書き土器の釈読にあたり、山形大学人文学部の三上喜孝氏より多大なご協力をいただいた。深謝の意を表す。

註1 岩見誠夫・船木義勝 「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」 『秋大史学』 第32号 1985(昭和59)年

註2 高橋 学 「西目町井岡遺跡で採集された遺物について」 『秋田考古学』 第40号 1990(平成2)年

註3 秋田県教育委員会 『払田柵跡I-政庁跡-』 1985(昭和59)年

秋田県教育委員会 『払田柵跡II-区画施設-』 1999(平成11)年

註4 五十嵐一治 「厨川谷地遺跡」 『第28回古代城柵官道跡検討会資料』 2002(平成14)年

註5 未報告の遺跡だが、千畠町教育委員会より情報の提供を得た。

註6 秋田県教育委員会 『内村遺跡発掘調査報告書』 1981(昭和55)年

註7 出土地点は不明確ではあるが、和合の東隣にあたる千畠町羽貫谷地でも墨書き土器が出土している。

高橋 学 「秋田県内出土の墨書き土器、鐵書き・刻書き土器」 『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第10号 1995(平成5)年

註8 高橋 学 「秋田県内出土の墨書き土器集成」 『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』 第1号 1986(昭和60)年

註9 秋田県教育委員会 『藤木遺跡発掘調査報告書』 1981(昭和55)年

註10 秋田県教育委員会 『石名館遺跡発掘調査報告書』 1984(昭和55)年

註11 富樫泰時 『日本の古代24 秋田県』 保育社 1985(昭和58)年

註12 未報告の遺跡だが、仙南村教育委員会より情報の提供を得た。

秋田県考古学関係文献抄録(4) —城館・防衛性集落・城柵(秋田城跡・払田柵跡を除く)一

利部 修*

(1925(大正14)年～2003(平成15)年)

1925. 8. 加成惣一郎「新城館址と古鏡との研究」『秋田考古会々誌』第一卷第一号 秋田考古会
1926. 7. 伊藤政治「チャシについて」『秋田考古会々誌』第一卷第四号 秋田考古会
1934. 5. 早川中尉「秋田城ノ沿革及築城的研究ノ概要」『筆写集』第24
1934. 7. 下田時也「山本郡内に於ける館跡一班」『秋田考古会々誌』第三卷第一号 秋田考古会
1936. 12. 大山順造「沼柵と関根柵」『秋田考古会々誌』第三卷第三号 秋田考古会
1936. 12. 小澤秀靖「沼城雜観」『秋田考古会々誌』第三卷第三号 秋田考古会
1936. 12. 細谷則理「沼館のゆかしい名の所々」『秋田考古会々誌』第三卷第三号 秋田考古会
1955. 9. 斎藤陽二郎『秋田の城』 秋田魁新報社
1955. 11. 伊藤郷人「笠岡・道川の城塞遺跡」『秋田考古学』第三号 秋田考古学協会
1955. 11. 大和久震平「チャシ調査の現況」『秋田考古学』第三号 秋田考古学協会
1956. 12. 山崎眞一郎「由利十二頭発祥の研究」『教育秋田』第89号 秋田県教育委員会
1956. 伊藤郷人「出土器と城塞」『秋田考古学』第五号 秋田考古学協会
1957. 1. 大和久震平「三十一年度の調査」『秋田考古学』第六号 秋田考古学協会
1959. 4. 小野正人「館址出土の陶片について—羽後出土の陶片考(承前)」『秋田考古学』第12号 秋田考古学協会
1959. 6. 秋田県教育委員会「秋田県の文化財—史跡 四十二館跡」『教育秋田』第119号 秋田県教育委員会
1959. 12. 伊藤郷人「秋田市附近の城塞遺跡」『秋田考古学』第13号 秋田考古学協会
1959. 12. 加藤高士「一出土品に因る戸島館址考」『秋田考古学』第13号 秋田考古学協会
1960. 3. 柳田凌次郎「前田家系譜」と大曲城』『大曲市郷土史資料』第一集 大曲市教育委員会
1960. 4. 姉崎岩藏「橋岡豈前守と本荘城の創建について」『出羽路』第9号 秋田県文化財保護協会
1960. 7. 成田重郎「続山本郡の遺跡 桧山と八森・岩館」『秋田考古学』第15号 秋田考古学協会
1960. 7. 成田格二「蝦夷館址」『出羽路』第10号 秋田県文化財保護協会
1960. 8. 富樫茂七「小吉館跡を訪ねる人々に」『鶴舞』第5号 本荘市文化財保護協会
1960. 11. 伊藤郷人「古代中世の遺跡」『秋田考古学』第16号 秋田考古学協会
1961. 3. 栗田茂治「館文化時代」『大曲市郷土史資料』第二集 大曲市教育委員会
1961. 7. 柿崎隆興「雄勝村と雄勝城趾の遺址について」『出羽路』第13号 秋田県文化財保護協会
1961. 11. 尾留川慶治郎「石沢の七崎八館」『鶴舞』第9号 本荘市文化財保護協会
1961. 12. 糸井藤之助「杉沢城跡」『横手郷土史資料』第34号 横手郷土史編纂委員会
1961. 12. 糸井藤之助「雄勝城址の発掘視察」『横手郷土史資料』第34集 横手郷土史編纂委員会

*秋田県理収文化財センター中央調査課学芸主事兼長

1961. 伊藤郷人「長尾氏系図と安東氏砂館」『秋田考古学』第19号 秋田考古学協会
1962. 6. 柳田凌次郎「四十二館と払田ノ柵」『出羽路』第16号 秋田県文化財保護協会
1962. 11. 板橋源「出羽国雄勝城考」『出羽路』第17号 秋田県文化財保護協会
1963. 2. 伊藤郷人「秋田県に於ける館と集落の研究」『出羽路』第18号 秋田県文化財保護協会
1963. 5. 奈良修「秋田県の文化財—史跡 雀館古代井戸」『教育秋田』第166号 秋田県教育委員会
1963. 12. 伊藤郷人「『館』私考・出土陶土器による館の性格と構造と集落の研究（第一）」『秋田考古学』第23号 秋田考古学協会
1964. 7. 伊藤郷人「秋田県における城郭構造変遷の研究」『秋田考古学』第24号 秋田考古学協会
1964. 7. 小野正人「陶片と城館」『秋田考古学』第24号 秋田考古学協会
1965. 1. 柿崎隆興「小野寺時代のわが郷土」『出羽路』第25号 秋田県文化財保護協会
1965. 1. 佐川良視「金沢址趾発掘調査」『横手郷土史資料』第37号 横手郷土史編纂委員会
1965. 6. 奈良修介・富樫泰時「蝦夷館発掘調査概報」『出羽路』第26号 秋田県文化財保護協会
1965. 8. 秋田魁新報社文化部「秋田むかしまむかし 久保田城下町と庶民生活の歴史」 秋田魁新報社
1965. 11. 新野直吉「金沢史蹟管見」『出羽路』第28号 秋田県文化財保護協会
1965. 11. 佐藤与市「秋田湊のうつりかわり」『出羽路』第28号 秋田県文化財保護協会
1965. 11. 奈良修介・板橋源「横手市所在金沢柵擬定地発掘調査略報」『横手郷土史資料』第38号 横手郷土史編纂委員会
1966. 10. 板橋源「第三次金沢柵跡発掘略報（一）」『出羽路』第31号 秋田県文化財保護協会
1969. 5. 姉崎岩藏「小助川館の発見と川名小助川について」『鶴舞』第19号 本荘市文化財保護協会
1970. 8. 姉崎岩藏「由利郡中世史考」 矢島町公民館
1971. 3. 秋田県教育委員会・横手市教育委員会「金沢柵跡発掘調査概報」秋田県文化財調査報告書第23集
1971. 4. 秋田県教育委員会「秋田県の史跡—史跡 四十二館跡—」『教育秋田』第261号
1972. 3. 秋田県教育委員会・横手市教育委員会「昭和46年度 金沢柵跡発掘調査概報」秋田県文化財調査報告書第25集
1972. 5. 須藤直吉「本荘と子吉館」『鶴舞』第24号 本荘市文化財保護協会
1972. 11. 小川武「岩倉館とその周辺」『鶴舞』第25号 本荘市文化財保護協会
1972. 11. 仁賀保町史編纂委員会「五節 栗山館と待居館瞥見」『仁賀保町史』 仁賀保町
1973. 5. 伊藤鉄太郎「土器と城廓」
1973. 6. 新野直吉「雄勝城とその周辺」『秋田地方史の研究』 今村教授退官記念会
1973. 9. 高橋健治「藤木四十二館」『大曲市と周辺の史跡』第一集 大曲市生涯教育センター
1973. 9. 高橋健治「金沢の柵」『大曲市と周辺の史跡』第一集 大曲市生涯教育センター
1973. 11. 佐藤孝一「子吉館とまぼろしの柵」『鶴舞』第27号 本荘市文化財保護協会
1974. 3. 能代市教育委員会「大館遺跡発掘調査概報—野代營擬定地—」
1974. 4. 秋田県教育委員会「秋田県の史跡—桧山城跡—」『教育秋田』第297集
1974. 5. 秋田県教育委員会「秋田県の文化財一本堂城跡—」『教育秋田』第298集
1975. 3. 五城目町史編纂委員会「中世の郷土」『五城目町史』 五城目町

1975. 5. 佐々木生「雄勝郡城址一覧」『雄勝郡郷土史資料』 名著出版
1975. 7. 塩谷順耳「博物館紹介戦国時代の城と町一本堂城」『出羽路』第56号 秋田県文化財保護協会
1975. 12. 中谷雅昭「歴史探訪⑧ 近世の城跡—檜山城・本堂城—」『教育秋田』第317号 秋田県教育委員会
1976. 8. 長谷川秀樹「雄和町白根館の出土品について」『秋田考古学』第33号 秋田考古学協会
1977. 2. 栗山文一郎「花輪城=臥牛本館=花輪御館(要害屋敷)の考証」『上津野』第2号 鹿角市文化財保護協会
1977. 4. 奈良修介「第三節 室町時代館址」『秋田県史 考古編』株式会社加賀谷書店
1977. 8. 加成惣一郎「南秋阿彦館址について」『郷土誌研究考』
1977. 8. 加成惣一郎「阿部の館址と福城寺研究私考」『郷土誌研究考』
1977. 8. 加成惣一郎「一、長岡館址」『郷土誌研究考』
1977. 8. 渡部景一「千秋公園を訪ねて—久保田城の歴史—」みしま書房
1977. 11. 八郎潟町史編纂委員会「一、浦城跡(浦大町)」『八郎潟町史』八郎潟町
1977. 11. 八郎潟町史編纂委員会「二、押切城跡(一日市字中島)」『八郎潟町史』八郎潟町
1978. 3. 塩谷順耳「鹿角地方の館」『秋田県立博物館研究報告』第3号 秋田県立博物館
1978. 3. 横手市教育委員会『大鳥井山I—横手市大鳥井山遺跡発掘調査概報—』
1978. 3. 安村二郎「曾我貞光申状にみえる鹿角郡館名について」『上津野』第3号 鹿角市文化財保護協会
1979. 1. 富木隆藏「角館城下の形成」『歴史手帖』7巻1号 名著出版
1979. 3. 板橋範芳「第二節 大館地方にのこる城館跡」『大館市史』第一巻 大館市
1979. 3. 塩谷順耳「由利地方の館—仁賀保・矢島を中心として—」『秋田県立博物館研究報告』第4号 秋田県立博物館
1979. 3. 横手市教育委員会『大鳥井山II』
1979. 6. 渡部景一「佐竹氏と久保田城—秋田の城の歴史と物語—」無明舎出版
1980. 3. 飯塚喜市監修『久保田城跡・千秋公園道しるべ』秋田市史跡学習サークル
1980. 3. 秋田県教育委員会『鶴沼城跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第73集
1980. 3. 横手市教育委員会『大鳥井山III』
1980. 3. 鹿角市教育委員会『新斗米館跡 鹿角市新斗米館跡第I次発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料14
1980. 6. 姉崎岩藏「幻の由利柵と豊岡館の地点に関する考察」『鶴舞』第40号 本荘市文化財保護協会
1980. 9. 沼館愛三『出羽諸城の研究』伊吉書院
1980. 10. 島田亮三「二節 平安時代」『雄物川町郷土史』雄物川町役場
1980. 12. 高橋良一「地形から見た由利柵と豊岡館の地点「姉崎岩藏氏説に地元住民の唱和」」『鶴舞』第41号 本荘市文化財保護協会
1981. 3. 片岡正一「鹿角における館の一考察」『上津野』第6号 鹿角市文化財保護協会
1981. 3. 秋田市教育委員会『後城遺跡発掘調査報告書』

1981. 3. 横手市教育委員会『大鳥井山IV』
1981. 3. 平野広吉「角間川の館」『大曲市郷土史資料』第21号 大曲市教育委員会
1981. 3. 鹿角市教育委員会『長牛城跡 長牛城跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料17
1981. 3. 秋田県教育委員会「湯瀬館遺跡」「東北縦貫自動車道発掘調査報告書I—居熊井遺跡・湯瀬館遺跡・大地平遺跡・上山田遺跡・堂の上遺跡・上葛岡Ⅲ遺跡—」秋田県文化財調査報告書第78集
1981. 3. 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集
1981. 7. ぬめひろし「羽川小太郎の周辺と悪党のもたらしたもの—中世史の一断面」『鶴舞』第42号 本荘市文化財保護協会
1981. 7. 鈴木俊男「雄勝の中世城館 河川を防衛線とした」『出羽路』第73号 秋田県文化財保護協会
1981. 7. 秋田魁新報社地方部「古戦場—秋田の合戦史—」秋田魁新報社
1981. 10. 五城目町教育委員会『砂沢城跡緊急発掘調査概報』
1981. 11. 照内捷二「鷹巣町の城館調査レポート」『鷹巣地方史研究』第9号 鷹巣地方史研究会
1981. 12. 伊藤徳保「阿仁川流域の中世城館と街道」『出羽路』第74号 秋田県文化財保護協会
1981. 12. 池田憲和「新出の中世城館について」『出羽路』第74号 秋田県文化財保護協会
1982. 3. 鹿角市教育委員会『高市向館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料22
1982. 3. 秋田県教育委員会「北の林I 遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書III—鳥居平遺跡・飛鳥平遺跡・北の林I 遺跡—』秋田県文化財調査報告書第89集
1982. 3. 秋田県教育委員会「小豆沢遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書IV—北の林II 遺跡・上葛岡I 遺跡・上葛岡II 遺跡・小豆沢館遺跡—本文篇・図録篇』秋田県文化財調査報告書第90集
1982. 3. 秋田県教育委員会『腹鞍の沢遺跡・桐木田遺跡・蒲沼遺跡発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第94集
1982. 3. 鹿角市教育委員会『鹿角の館—館跡航空写真測量調査報告書(1)一小枝指館・玉内館・長牛館(城)』鹿角市文化財調査資料20
1982. 4. 若松鉄四郎「能代市・山本郡の城館址」『能代山本地方史研究』創刊号 能代山本地方史研究会
1982. 10. 油浅耕三「65.『出羽国秋田郡久保田城塗図』の都市的考察—正保城絵図による都市研究の試みー」『都市計画・別冊』17号 日本都市計画学会
1982. 10. 塩谷順耳他「城館と村落」『中世の秋田』秋田魁新報社
1982. 10. 佐々木辰郎「小湊(阿仁町)の古城と頓源吾」『北方風土』第5号 北方風土社
1982. 11. 安村二郎「第二節 国代成田氏の盛衰」『鹿角市史』第一卷 鹿角市
1982. 11. 安村二郎「第三節 南部・浅利・秋田諸氏の鹿角侵入」『鹿角市史』第一卷 鹿角市
1982. 11. 安村二郎・片岡正一「第五節 鹿角の中世城館」『鹿角市史』第一卷 鹿角市
1982. 12. 林正宗『図説・角館城下町の歴史』無明舎出版
1983. 2. 渡部景一『図説・久保田城下町の歴史』無明舎出版
1983. 3. 鹿角市教育委員会『鹿角の館—館跡航空写真測量調査報告書(2)一大里館・小豆沢館・石鳥谷館』鹿角市文化財調査資料23
1983. 5. 花田一司「館跡と密教の仏教」『鷹巣地方史研究』第12号 鷹巣地方史研究会

1983. 10. 花田一司「脇神部落北西の館跡」『鷹巣地方史研究』第13号 鷹巣地方史研究会
1983. 10. 骸山人「夢の岩館」『郷土誌資料「八森」』第15号 八森町文化財保護協会
1984. 2. 鹿角市教育委員会『鹿角の館一館跡航空写真測量調査報告書(3) 一鹿倉館・大湯館・瀬田石館・高屋館・高瀬館』鹿角市文化財調査資料25
1984. 3. 鹿角市教育委員会『花輪館跡試掘調査報告書・下沢田遺跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料27
1984. 3. 本荘市「中世城館資料」『本荘市史 史料編Ⅰ上』
1984. 3. 本荘市「本荘城下絵図」『本荘市史 史料編Ⅰ上』
1984. 3. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書VII一妻の神Ⅰ遺跡・乳牛平遺跡』秋田県文化財調査報告書第107集
1984. 3. 秋田県教育委員会『東北縦貫自動車道発掘調査報告書IX一妻の神Ⅲ遺跡』秋田県文化財調査報告書第108集
1984. 3. 大曲市教育委員会『四十二館跡発掘調査報告書』
1984. 6. 三浦鉄郎「日本の中世末城館に関する一試論」『聖霊女子短期大学紀要』第12号 聖霊女子短期大学
1984. 6. 池田憲和「甦る館主たち」『秋田県の歴史と風土』 創土社
1984. 6. 半田市太郎「久保田城跡の築城と城下町の建設」『秋田県の歴史と風土』 創土社
1984. 9. 仙波昭彦「久保田城跡絵図」『開館10周年記念 秋田県立博物館10年のあゆみ』 秋田県立博物館
1984. 9. 山田貞吉「第三節 中世の城館と平鹿」『平鹿町史』 平鹿町
1984. 12. 秋田県教育委員会『妻の神Ⅱ遺跡』『東北縦貫自動車道発掘調査報告書XI 一孫右工門館遺跡・案内Ⅰ遺跡・妻の神Ⅱ遺跡・下乳牛遺跡・西町Ⅰ遺跡・西町Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第119集
1985. 2. 鹿角市教育委員会『鹿角の館 館跡航空写真測量調査報告書(4) 長嶺館・谷内館・夏井館・三ヶ田館・長内館・尾去館・土山館・茶臼館』鹿角市文化財調査資料28
1985. 10. 河辺町「第六節 郷土の城館」『河辺町史』
1985. 11. 塩谷順耳「記録にみる中世城館―吾妻鏡・永慶軍記を中心―」『秋大史学』32 秋田大学史学会
1985. 11. 烏海町史編纂委員会「烏海町の中世の城館」『烏海町史』 烏海町
1986. 1. 秋田県文化財保護協会「近世絵図研究の一視点―中世の城館と街道―」『出羽路』第86号 秋田県文化財保護協会
1986. 2. 千畑村郷土誌編纂委員会「第三節 我が村の中世時代」『千畑村郷土誌』 千畑村
1986. 3. 鹿角市教育委員会『鹿角の館 館跡航空写真測量調査報告書(5) 小平館・高市館・柴内館・一ツ森館・万谷野館・地羅野館・黒土館・花輪古館』鹿角市文化財調査資料30
1986. 3. 湯沢城資料編纂委員会『湯澤城』 湯沢市教育委員会
1986. 11. 半田嘉栄之助「二 郷土と郷土周辺の城館」『井川町史』 井川町
1986. 12. 昭和町誌編さん委員会「二、遺跡・遺物が語る郷土の中世」『昭和町史』 昭和町

1987. 2. 若松鉄四郎「カトウド城」の所在地を推考する『能代山本地方史研究』4号 能代山本地方史研究会
1987. 3. 島田亮三『沼の柵』『雄物川町郷土史資料』第16集 雄物川町教育委員会
1987. 3. 秋田県教育委員会『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—高瀬館跡—』秋田県文化財調査報告書第153集
1987. 7. 塩谷順耳「中世」『国説秋田県の歴史』 河出書房新社
1988. 3. 島田亮三「後三年の役『沼の柵』』『雄物川町郷土史資料』第17集 雄物川町教育委員会
1988. 3. 鹿角市教育委員会『花輪館跡試掘調査報告書（2）』鹿角市文化財調査報告書34
1988. 3. 秋田県教育委員会『味噌内地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一袖ノ沢遺跡・横沢遺跡一』秋田県文化財調査報告書第169集
1988. 3. 秋田県教育委員会『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査概報—山王岱遺跡—』秋田県文化財調査報告書第170集
1988. 3. 秋田県教育委員会『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—太田谷地館跡—』秋田県文化財調査報告書第172集
1988. 4. 渋谷鉄五郎「秋田「安東氏」研究ノート」 無明舎出版
1988. 8. 長山幹丸「中世の城と館」『北方風土』第16号 北方風土社
1988. 8. 平鹿三郎「まぼろしの臼井城址と戸沢氏の勢力範囲」『北方風土』第16号 北方風土社
1988. 8. 佐藤貢「城館地名を考える一百目木・麓・亀田一」『北方風土』第16号 北方風土社
1988. 10. 工藤清泰「浪岡城跡の発掘調査成果から見た北日本における中世城館研究の課題」『よねしろ考古』第4号 よねしろ考古学研究会
1988. 10. 若松鉄四郎「能代市・山本郡の城館」『よねしろ考古』第4号 よねしろ考古学研究会
1988. 10. 板橋範芳「大館市・北秋田郡の城館—浅利氏関係城館を中心に据えて—」『よねしろ考古』第4号 よねしろ考古学研究会
1988. 10. 桜田隆「鹿角地方の城館—考古資料より—」『よねしろ考古』第4号 よねしろ考古学研究会
1988. 10. 安村二郎・片岡正一・安倍良行「鹿角地方の城館—航空写真測量調査に関連して—」『よねしろ考古』第4号 よねしろ考古学研究会
1988. 12. 伊藤正男「白根館落城考跡」『北方風土』第17号 北方風土社
1989. 3. 塩谷順耳「久保田城下」の展示まで』『秋田県立博物館研究報告』第14号 秋田県立博物館
1989. 3. 高橋良一「由利柵が絶対確保要城に—決定された背景—」『鶴舞』第57号 本荘市文化財保護協会
1989. 3. 鹿角市教育委員会『柏崎館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料36
1989. 3. 鹿角市教育委員会『当麻館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料37
1989. 3. 秋田県教育委員会『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V—太田谷地館跡第2次調査—』秋田県文化財調査報告書第183集
1989. 4. 若松鉄四郎「檜山城の遺構の現況」『能代山本地方史研究』5号 能代山本地方史研究会
1989. 4. 古内龍夫「〈文化財短信〉」『能代山本地方史研究』5号 能代山本地方史研究会
1989. 6. 三浦鉄郎「日本の中世末城館に関する一試論」『北方風土』第18号 北方風土社

1989. 6. 伊藤正男「椿台城の考察」『北方風土』第18号 北方風土社
1989. 6. 斎藤幸七・長山幹丸「協和町の中世の城と館—新発見の城及び館の概要—」『北方風土』第18号 北方風土社
1989. 10. 池田憲和「架空の世界を遊ぼう 城下町久保田を語る」『出羽路』第97号 秋田県文化財保護協会
1989. 10. 飯塚喜市「久保田城の堀の行方」『出羽路』第97号 秋田県文化財保護協会
1989. 10. 杉沢文治「久保田城下外町の諸相」『出羽路』第97号 秋田県文化財保護協会
1989. 12. 秋田市教育委員会『久保田城跡一本丸御隅櫓跡発掘調査報告書一』
1989. 12. 渡部景一『久保田城ものがたり』 無明舎出版
1990. 1. 大野憲司「太田谷地館跡について—空堀を持つ平安時代後葉の集落跡—」『よねしろ考古』第5号 よねしろ考古学研究会
1990. 2. 秋田県教育委員会『竜毛沢館跡発掘調査報告書 一般国道7号二ツ井バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査』秋田県文化財調査報告書第188集
1990. 3. 大館市教育委員会『山王台遺跡発掘調査報告書』
1990. 3. 秋田県教育委員会『一つ森館跡発掘調査報告書—鹿角市小枝指地区県営一般農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査一』秋田県文化財調査報告書第197集
1990. 3. 秋田県教育委員会『片山館コ遺跡発掘調査報告書—一般国道7号大館西道路建設工事に係る埋蔵文化財発掘調査一』秋田県文化財調査報告書第203集
1991. 1. 飯塚喜市『ふる里道しるべ—久保田城跡・千秋公園・八橋・寺内・川尻編』 株式会社公人の友社
1991. 3. 「「築館」に就いて」『史友』第1号 合川地方史研究会
1991. 3. 秋田県教育委員会『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書III一飼遺跡—』秋田県文化財調査報告書第210集
1991. 3. 菊地隆二郎「松館は製鉄関係地か?—中世浅利氏をめぐる一考察一」『上津野』第16号 鹿角市文化財保護協会
1991. 5. 笹原一「李岱集落と砦址」『鷹巣地方史研究』第28号 鷹巣地方史研究会
1991. 12. 遠藤義「中世の出羽国山北地方」『北方風土』第23号 北方風土社
1991. 12. 島田亮三『文献による雄勝城私考』
1992. 3. 富樫泰時・児玉準「本荘市上谷地遺跡について—由理柵推定地の調査—」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 秋田県埋蔵文化財センター
1992. 3. 板橋範芳「大館地方の中世遺跡」『平成3年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 秋田県埋蔵文化財センター
1992. 3. 桜田隆「北秋田の中世城館」『平成3年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 秋田県埋蔵文化財センター
1992. 3. 秋田県教育委員会『国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書V—山王岱遺跡—』秋田県文化財調査報告書第221集
1992. 3. 秋田市教育委員会『久保田城跡—佐竹史料館増築に伴う二の丸発掘調査報告書一』

1992. 3. 鹿角市教育委員会『小枝指館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料44
1992. 5. 川村美智子「かりがね」の城あと』『鷹巣地方史研究』第30号 鷹巣地方史研究会
1992. 10. 阿仁町史編纂委員会「第二節 浅利氏の支配」『阿仁町史』 阿仁町
1992. 11. 安村二郎「最後の鹿角国人・大湯四郎左衛門のこと」『北方風土』第25号 北方風土社
1992. 11. 長岐喜代次「浅利氏と明利又城についての考察」『北方風土』第25号 北方風土社
1993. 3. 島田亮三「前九年の役と「沼の柵」』『雄物川町郷土資料』第22集 雄物川町教育委員会
1993. 3. 鹿角市教育委員会『地羅野館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料47
1993. 5. 野目白之「柵・城・館と歴史—秋田の場合—」『北方風土』第26号 北方風土社
1993. 5. ぬめひろし「雄勝城周辺の古代史の考察—払田柵は雄勝城か—上』『北方風土』第26号 北方風土社
1993. 8. 納谷信広「久保田城の門の構造について—久保田城本丸の門はどんな建物だったのか—」『秋田考古学』第42・43合併号 秋田考古学協会
1993. 10. ぬめひろし「雄勝城周辺の古代史の考察—払田柵は雄勝城か—中』『北方風土』第27号 北方風土社
1994. 3. 秋田県教育委員会『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V 一館の上館遺跡』秋田県文化財調査報告書第240集
1994. 3. 二ツ井町教育委員会『大川口館跡発掘調査報告書』二ツ井町埋蔵文化財調査報告書第4集
1994. 3. 片岡正一「鹿角における地形と館の一考察」『上津野』第19号 鹿角市文化財保護協会
1994. 3. 斎藤典芳「山根館跡の調査』『平成5年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 秋田県埋蔵文化財センター
1994. 3. 鹿角市教育委員会『花輪古館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料51
1994. 5. ぬめひろし「雄勝城周辺の古代史の考察（三）—払田柵は雄勝城か—』『北方風土』第28号 北方風土社
1994. 8. 長谷川成一「第一節 六郷氏本荘城下の成立」『本荘市史 通史編Ⅱ』 本荘市
1995. 3. 磐村朝次郎「第一節 小鹿島の城館跡」『男鹿市史』上巻 男鹿市
1995. 3. 磐村朝次郎「第二節 脇本城跡」『男鹿市史』上巻 男鹿市
1995. 3. 斎藤稔「史跡「山根館跡」について」『出羽路』第113号 秋田県文化財保護協会
1995. 3. 男鹿市教育委員会『脇本石館遺跡・脇本城跡遺跡詳細分布調査報告書』男鹿市文化財調査報告書第12集
1995. 3. 能代市史編さん委員会「第五節 中世」『能代市史 資料編 考古』 能代市
1995. 3. 男鹿市教育委員会『染川城跡発掘調査報告書』男鹿市文化財調査報告書第13集
1995. 10. 鷲谷豊「脇神館を考察する」『鷹巣地方史研究』第37号 鷹巣地方史研究会
1996. 2. 大館市『餌釣館発掘調査報告書』
1996. 3. 相馬源一郎「鷹巣町における中世の城館」『鷹巣地方史研究』第38号 鷹巣地方史研究会
1996. 3. 鹿角市教育委員会『黒土館跡発掘調査報告書』鹿角市文化財調査資料57
1996. 3. 遠藤巖『脇本城と脇本城跡—第2次・第3次調査報告—』男鹿市文化財調査報告第14集 男鹿市教育委員会

1996. 3. 二ツ井町教育委員会『東北電力(株) 北奥幹線新設工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
—茱萸ノ木遺跡・加代神館跡・竜毛沢Ⅲ遺跡・竜毛沢IV遺跡・竜毛沢V遺跡—』
1997. 3. 池田憲和「久保田城下町の復原的研究」『秋田県立博物館研究報告』第22号 秋田県立博物館
1997. 3. 栗澤光男「脇神館跡」『平成8年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 秋田県埋蔵文化財センター
1997. 3. 新田沢湖町史編纂委員会『第1章 中世の城館』『新田沢湖町史』 田沢湖町
1997. 3. 鹿角市教育委員会『黒土館跡発掘調査報告書(2)』鹿角市文化財調査資料59
1997. 3. 能代市教育委員会『多賀谷居館跡確認緊急調査報告書』
1997. 5. 川尻茂行「安倍・安東氏と蝦夷館由来」『北羽歴研史論集』三 北羽歴史研究会
1997. 5. 金澤長一郎「古代防御集落考」『北羽歴研史論集』三 北羽歴史研究会
1997. 6. 佐藤一幸「第五節 増田地方の中世城館」『増田町史』 増田町
1997. 9. 秋田市教育委員会『久保田城跡 表門復元に伴う発掘調査報告書』
1997. 10. 熊田亮介「秋田城と払田柵跡—秋田城の停廃と第2次雄勝城の造営—」『日本考古学協会
1997年度大会研究発表要旨』 日本考古学協会
1997. 10. 熊田亮介「秋田城跡と払田柵跡—秋田城の停廃と第2次雄勝城の造営」『蝦夷・律令国家・
日本海—シンボジウムⅡ・資料集—』 日本考古学協会1997年度秋田大会実行委員会
1998. 3. 山崎和夫「多賀谷居館跡」『平成9年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 秋田県
埋蔵文化財センター
1998. 3. 磐村亨「石鳥谷館跡」『平成9年度秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料』 秋田県埋蔵文
化財センター
1998. 3. 泉明「文化財と城館跡」『男鹿半島—その自然・歴史・民俗』 男鹿市教育委員会
1998. 3. 池田正治「第四章 西目町の城館」『西目町史 資料編』 西目町
1998. 3. 秋田県教育委員会『石鳥谷館跡—県道比内大葛鹿角線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査
報告書—』秋田県文化財調査報告書第279号
1998. 3. 鹿角市教育委員会『黒土館跡発掘調査報告書(3)』鹿角市文化財調査資料62
1998. 7. 納谷信広「久保田城の発掘調査について」『平成10年度秋田考古学協会公開研究会・講演会
資料』 秋田考古学協会
1999. 3. 塩谷順耳「第三節 秋田地方の城館」『秋田市史』第二巻 中世通史編 秋田市
1999. 3. 秋田県教育委員会『脇神館跡—県道木戸石鷹巣線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告
書I—』秋田県文化財調査報告書第284号
1999. 3. 鹿角市教育委員会『黒土館跡発掘調査報告書(4)』鹿角市文化財調査資料64
1999. 3. 鹿角市教育委員会『小平遺跡(3) 緊急地方道路整備工事に伴う発掘調査報告書』鹿角市
文化財調査資料65
1999. 10. 河辺町文化財保護審議会『河辺町の文化財』第9集 豊島館跡 河辺町教育委員会
1999. 11. 遠藤巖『脇本城と脇本城跡—第4次～第6次調査報告—』男鹿市文化財調査報告第19集 男
鹿市教育委員会
1999. 11. 仁賀保町教育委員会『山根館跡—「にかほ史跡の里づくり事業」に係る予備発掘調査報告

書一』

2000. 2. 男鹿市教育委員会『鳥屋場館跡発掘調査報告書—市道北町増川線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』男鹿市文化財調査報告書第21集
2000. 3. 由利町教育委員会「第12節 西の館分布調査」『埋蔵文化財詳細分布調査報告書1 由利町西滝沢地区・滝沢城に係る埋蔵文化財詳細分布調査報告書』由利町文化財調査報告書第14集
2000. 3. 由利町教育委員会「第13節 滝沢城分布調査」『埋蔵文化財詳細分布調査報告書1 由利町西滝沢地区・滝沢城に係る埋蔵文化財詳細分布調査報告書』由利町文化財調査報告書第14集
2000. 6. 伊藤祐紀「雄勝地区的住吉系神社から雄勝城跡を探す」『北方風土』第40号 北方風土社
2000. 12. 飯田川町史編纂委員会「第五節 「館」のこと」『飯田川町史』 飯田川町
2001. 3. 川越雄助「寛文九年横手城下絵図 余録」『横手郷土史資料』第75号 横手郷土史研究会
2001. 3. 秋田県教育委員会『御嶽公園館跡—緊急地方道路整備事業象潟矢島線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一』秋田県文化財調査報告書第311集
2001. 3. 秋田県教育委員会『館堀城跡—県営ほ場整備事業（寺沢地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一』秋田県文化財調査報告書第320集
2001. 3. 秋田市教育委員会『久保田城跡—表門復元に伴う発掘調査報告書一』
2001. 9. 木村清幸「根小屋」地名と「陣馬台」の合戦』『史友』第20号 合川地方史研究会
2002. 2. 秋元信夫「第一節 出羽北部の城館」『中世出羽の領主と城館』奥羽史研究叢書2 高志書院
2002. 3. 秋田県教育委員会『鹿来館跡—日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XI—』秋田県文化財調査報告書第332集
2002. 3. 男鹿市教育委員会『脇本城跡I—第1次・第2次他調査報告一』男鹿市文化財調査報告第23集
2002. 3. 男鹿市教育委員会『男鹿市内遺跡発掘調査報告書（十文字松原遺跡・岡獅子館跡）』男鹿市文化財調査報告第24集
2002. 3. 能代市教育委員会『外荒巻館跡—土砂採取事業に伴う緊急発掘調査報告書一』能代市埋蔵文化財調査報告書第13集
2002. 4. 都道府県教育委員会「秋田県の中世城館」『都道府県別日本の中世城館調査報告書集成』第1巻
2003. 3. 鈴木登「第四節 中世の領主と城館」『本荘の歴史 普及版』 本荘市
2003. 3. 長谷川成一「貞享四年本荘絵図」『本荘の歴史 普及版』 本荘市
2003. 3. 秋田県教育委員会『柴内館跡—主要地方道十二所花輪大湯線緊急地方道路整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書一』秋田県文化財調査報告書第355集
2003. 3. 男鹿市教育委員会『脇本城跡II—第8次～第10次調査報告一』男鹿市文化財調査報告第27集
2003. 3. 由利町教育委員会「第2節 蒲田館分布調査」『埋蔵文化財詳細分布調査報告書4 由利町諏訪台遺跡・蒲田館の埋蔵文化財詳細分布調査報告書』由利町文化財調査報告書第22集
2003. 6. 加藤民夫「第二章 中世社会の形成と郷土」『南外村史 通史編』 南外村
2003. 9. 東北中世考古学会秋田大会実行委員会『中世出羽の諸様相—寺院・生産・城館・集落—東北中世考古学会第9回研究大会（秋田大会）資料集』 東北中世考古学会

発行 2004(平成16)年3月

秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第18号

発行 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802

秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地

電話 (0187)69-3331 FAX (0187)69-3330

印刷 株式会社 成文社
